

大倉幕府跡 (No.253)

雪ノ下三丁目 693 番 8 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市雪ノ下三丁目 693 番 8 地点における大倉幕府跡（鎌倉市遺跡 No.253）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 21 年 9 月 14 日から同年 11 月 20 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は、33㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

調査員 岡田慶子、高橋 亮、平山千絵（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

作業員 安達越郎、伴 一明、永井隆三郎、根市真古人

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

整理作業参加者 岡田慶子、押木弘己、本城 裕、吉田桂子

（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

秋田公佑、天野隆男、串田健一、倉澤六郎、高橋こう子、松岡信喜

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
7. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「O B 0 9 0 9」とし、出土品への注記その他に使用した。

本文目次

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	213
第二章	調査の方法と経過	216
第1節	調査に至る経緯	
第2節	調査の方法	
第3節	調査の経過	
第三章	基本土層	217
第四章	発見された遺構と遺物	220
第1節	検出遺構	
第2節	出土遺物	
第五章	調査成果のまとめ	255

挿図目次

図1	調査地の位置	214	図20	2面遺構14出土遺物	236
図2	調査区配置図	216	図21	2面下出土遺物	237
図3	調査区東壁・西壁土層断面図	218	図22	2面下炭層出土遺物	238
図4	Ⅱ区北壁・南壁土層断面図	219	図23	3面出土遺物	239
図5	1・2面全体図	221	図24	3面下出土遺物	241
図6	1・2面個別遺構図	222	図25	3面下ほか出土遺物	242
図7	3面全体図	223	図26	4a面遺構15出土遺物	243
図8	3面遺構3	223	図27	4a面遺構15 ・4b面遺構15b出土遺物	244
図9	4a・4b面全体図	224	図28	4面下・4b面下出土遺物①	245
図10	4a面遺構15	225	図29	4面下・4b面下出土遺物②	246
図11	4b面遺構15b	226	図30	4面下・4b面下出土遺物③	247
図12	5面全体図	227	図31	4c面遺構17・4c面下出土遺物	248
図13	6a・6b面全体図	228	図32	4c面下最下層・5面遺構9出土遺物	249
図14	7・8面全体図	230	図33	5面下出土遺物①	250
図15	9・10面全体図	231	図34	5面下出土遺物②	251
図16	1面遺構13出土遺物	232	図35	5面下出土遺物③	252
図17	1面遺構1出土遺物①	233	図36	6面下～10面 ・10面遺構11出土遺物	253
図18	1面遺構1出土遺物②	234			
図19	1面下出土遺物	235			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

大倉幕府跡は鎌倉低地の北東部に位置する。神奈川県遺跡台帳では鎌倉市の No.253 遺跡として登載され、県道 204 号（金沢・鎌倉線）沿いの「関取場」碑を南東の起点として西に 270 m、北に 215 m の範囲を持つ（図 1）。遺跡西限は横浜国立大学付属小・中学校の東辺だが、かつては現県道の「筋替橋」から西御門一丁目の谷戸方面に直向する道路が存在しており、これが幕府西限の名残であったと考える理解が有力である（馬淵ほか 2005 など）。これに従えば、大倉幕府の東西規模は最大で 380 m を測ることになる。

治承四年（1180）十月に鎌倉へ入った源頼朝は、同年十二月十二日には大倉郷に構えた新亭に移ったことを『吾妻鏡』は伝える。以後、頼家・実朝と続く源氏三代の将軍御所が当地に置かれ、承久元年（1219）の焼亡に伴い北条義時大倉亭南へ仮移転するまで幕府政治の中核を担った。この間の第一次将軍御所を「大倉御所（大倉幕府）」と呼び、本遺跡名の元となっている。

嘉禄元年（1225）の宇津宮辻子御所への正式移転後、大倉御所の跡地はどうなったのか。嘉禎元年（1235）には頼朝法華堂前の湯屋からの出火・延焼を防ぐために湯屋から法華堂までの民家数十字が破却されたこと、また、寛元五年（1247）正月には頼朝法華堂前の人家数十字が火災に遭い、その中には金沢実時の邸宅も含まれていたことを『吾妻鏡』は伝えている。これらの記事からは、嘉禄元年の正式移転から早くも 10 年後には人家が密集していたさまが読み取れる（高橋 2005）。建長三年（1251）には鎌倉中の町屋免許地 7ヶ所の一つに「大倉辻」も含まれていることから、御所移転後の当地周辺は武家の邸宅や寺社が点在する一方で、庶民階層の経済活動によって都市鎌倉を支える側面も合わせ持っていたと考えられる。

「大倉幕府跡」では現在までに 19 地点で発掘調査が実施され（註 1）、今回は 13 地点目での調査となる。概ね 100 m²未満の狭小な範囲が調査対象であり、広範囲に亘り遺跡状況を把握できた例は少ない。太田静六氏は『吾妻鏡』の記載内容をもとに建久二年（1191）の焼亡後に再建された「第二期大倉御所」の復元を試み、南に苑池をもつ寝殿造りを想定しているが（太田 1992）、今のところ、発掘調査によって検証するだけの材料は得られていない。ただ、**地点 6**では中世基盤層上面とされる 10c 面で礎板を持つ柱間距離 2.49 m の東西柱穴列が検出され、報告では大倉御所存続期間中の遺構とされている（馬淵ほか 2005）。同一面では他に、やはり礎板持ちで掘方プランの直径が 1.5 m を超えると推定される大型の柱穴も発見されており、南北柱穴列を構成する可能性も示唆されている。今回の調査でも中世最下面である 10 面ないし一段階新しい 9 面で南北径 1.1 m を超え垂直に掘り込まれた大型の土坑が検出され、中世基盤層が覆土のベースとなる点など**地点 6**の事例と共通する要素が見て取れる。**地点 8**では中世基盤層上での遺構の検出には及んでいないが、報告では 6 面までの 5 時期の遺構面が嘉禄元年以前の大倉御所時代と推定されている。6・7・8 面上には混貝砂が敷かれ、8 面上では礎石や雨落ち溝と見られる南北溝などが検出されている（福田 2011）。このように、遺跡範囲の中心 = 大倉御所の中核であったかを実証するためには、なお調査の蓄積を待たなければならない。

他方、大倉御所の外郭線がどのような形態をなしていたかも重要な問題である。**地点 4**では、下層で上幅 1.5 m 以上、深さ 1.15 m の断面 V 字状を呈する東西溝（溝 3）が検出され、これと同一面、ないし 1 層上位では幅 25 ～ 60 cm、深さ 20 ～ 30 cm の南北溝 11 条が検出されている。この上位には少なくとも 3 段階に及ぶ東西道路路面が構築されており、報告者は慎重を期しながらも南北溝群から上層道路路面への連続性を想定している（汐見・山上 2002）。溝群について、平面図からは道路基礎としての波板状



図1 調査地の位置

痕跡といった印象も受ける。最上位の東西道路は北側溝を伴い、ここから概ね 15 世紀代に下るかわらけが一定量出土している。下層の東西溝 3 については県道を挟んだ南側の地点 a で検出された溝 9 を類例に挙げることができ、報告では平安時代末の 11 世紀後半～12 世紀前半という所産時期が想定されている（馬淵 1998）。底面レベルは溝 9 の方が 60cm ほど高いが、走行軸は N80° W 前後と共通している。なお、2014 年度に調査された地点 19 では、中世の東西道路面と北側溝とも目される遺構が検出され、道路面の下位では断面 V 字状の東西溝が確認されている（註 2）。詳細は今後の報告を待ちたいが、上記二例との関連が注目される成果といえる。これらは、六浦方面へと抜ける主要な東西道として現在まで踏襲されるとともに、鎌倉時代初期に限れば大倉御所の南限を画す役割も担ったであろう。中世の六浦道は仁治二年（1241）の朝夷奈切り通しの開通に伴い整備されたというが、平安時代末期には主に房総半島を睨んだ軍事的要請から前身道路が整っていたとする見解もある（馬淵 1994）。この段階の道路規模や構築状況は明らかでないが、東方には古代の遺跡も点在していることから、滑川岸の狭い段丘上を縫うように古くからの交通路があったことは頷ける。

地点 9 では、標高 11.3 m ほどの中世基盤層上で上幅 5.1 m、深さ 2.7 m と大規模で断面形が V 字状と見られる南北溝（遺構 91）が検出されている。13 世紀中頃には埋没したと見られ、流下方向の軸線は東接する現東御門川よりも荏柄天神社の参道に近いという。この 2 m ほど東では、ほぼ同時期に埋没したとされる推定幅 2.2 m、深さ 0.5～0.8 m の南北溝（遺構 96）も検出され、こちらは現東御門川に近い軸線で延びるという（熊谷 2011）。現時点では両溝が同時存在したものか確証がなく、この延伸部での新たな調査知見を待ちたい。断片的ではあるが、今のところ大倉御所の東限と見なせる遺構は同例だけである。

これに対し地点 b では、13 世紀初頭～中葉に比定される南北柱穴列が確認されている（菊川 1993）。前述した筋替橋から西御門方面に抜ける南北旧道に東接する地点でもあり、存続期間と併せて御所西限の境界施設であった可能性が指摘されている（馬淵ほか 2005）。

現時点では、御所の北限と見なしうる遺構の発見には及んでいない。冒頭で述べた大倉御所推定域が後代の宇津宮辻子御所や若宮大路御所の推定範囲の倍以上に及ぶという指摘（馬淵ほか 2005）を受け、清泉小学校南辺の東西道路を北限と仮定した場合の広さ（約 37000 m²）が、後続する二御所の合算面積（約 72000 m²）の半分近くになるという試算も行われている（熊谷 2011）。

以上、本章では大倉御所時代の遺跡概要を中心に述べてきた。同御所の実態把握は、中世都市鎌倉の研究を行う上で最重要テーマといっても過言ではないだろう。学術発掘も含めた調査成果の蓄積を期待したい。

【図 1 に番号を付した調査地点と所収文献、他の参考文献は 288 頁に掲げた】

【註】

註 1 地点 1 について、報告書名は『大倉幕府周辺遺跡群』（馬淵 1990）となっているが、「大倉幕府跡」の包蔵地内にあることから、本報告では後者に含むものとした。

註 2 調査担当者である宮田 眞氏のご教示による。現地調査の終了から間もないため、事例紹介に留めたい。

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、個人住宅の建設に伴う事前の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。平成21年4月7日・8日に実施した確認調査の結果、現地地表下30cmほどで中世の遺構面が検出され始め、地表下150cmまでに少なくとも3枚の中世遺構面の遺存する状況が確認された。さらに下位にも文化層が続くことが予測されたため、地盤の柱状改良を伴う建設計画の実施に先立っては発掘調査を行う必要があるとの判断に至った。

これを受け、平成21年9月14日から同年11月20日までの約3ヶ月間、現地での発掘調査を行った。

第2節 調査の方法

表土の除去は重機によって行い、遺構面（1面）に近付いたところで人力での掘削作業に移行した。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区は二分割し、先行して着手した北部2/3をⅠ区、南部をⅡ区として、各々調査を進めた。調査範囲は東西約3m、南北約11mと細長いもの

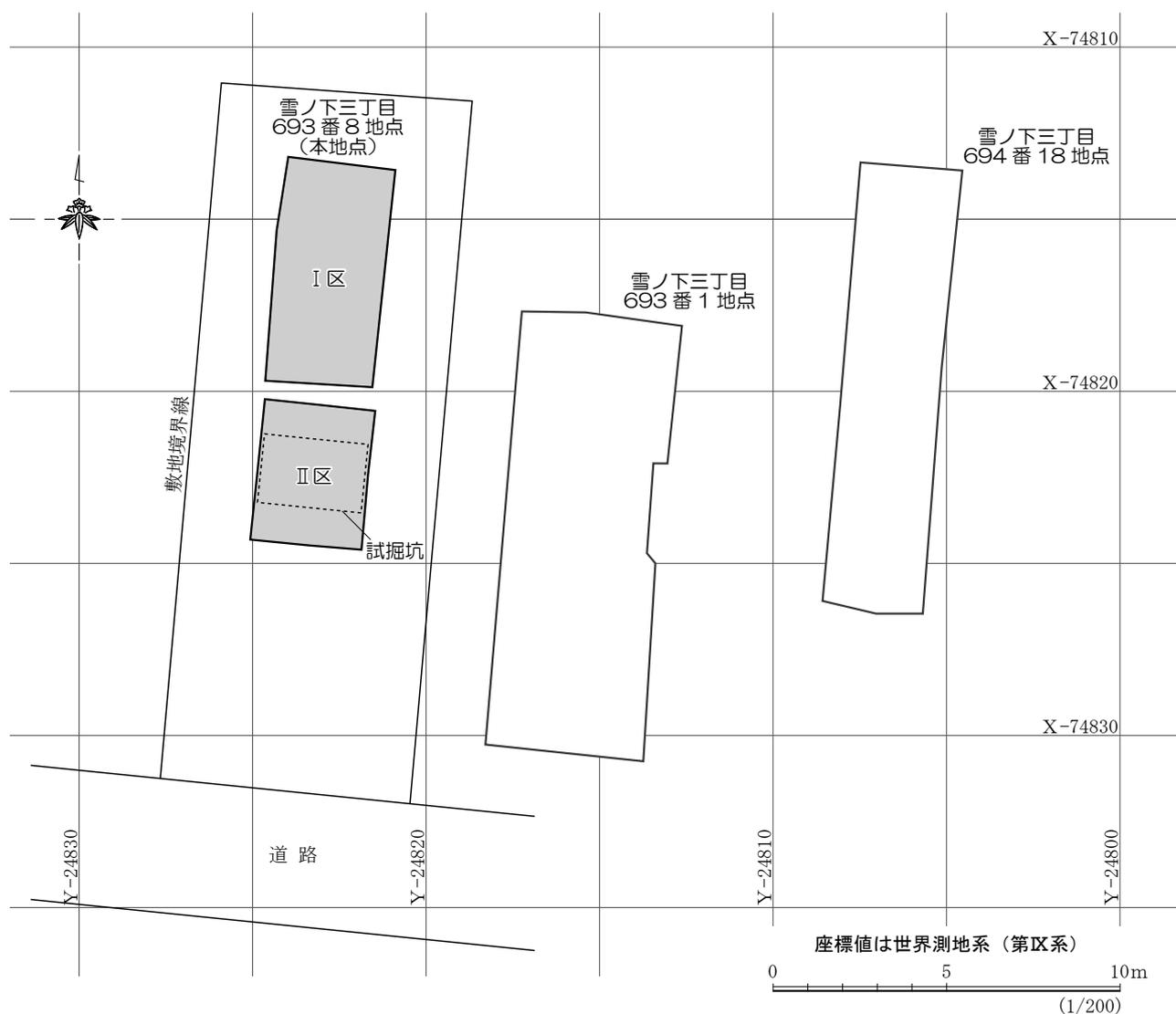


図2 調査区配置図

であったが、この中で現地表下 3.0 m まで文化層が累々と重なる状況が確認された。このため、安全面への配慮から下層での調査ほど対象面積を狭める必要があり、中世基盤層 (10 面) の調査は 1.2 m² ほどしか対象にできず、Ⅱ区では 5 面以下の調査を行うことができなかった。現地表面から中世基盤層までが非常に深い状況は大倉幕府跡における他の調査地点に共通しており、個人住宅の建設に起因する小規模調査では鎌倉初期 (大倉幕府期) における遺跡様相の把握を困難にしている。

Ⅰ・Ⅱ区とも順次下層への掘り下げと写真撮影・測量図作成の記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に即した座標軸を設定し、光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。座標移動は市道上に設置された鎌倉市 4 級基準点「E059」と「E085」二点間の関係をもとに開放トラバースで行った。現地では 4 級基準点の成果簿に基づき旧測地系の座標値を用いたため、本報告の作成に当たって世界測地系の座標値に表記を改めた (図 2)。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web 版 TKY2JGD」を使用した。変換値は東日本大震災後の補正值とはなっていない。

なお、図 2 では隣接する二地点の調査区も提示したが、両地点の調査報告書では旧測地系の座標値を用いていたので、これも併せて上記ソフトで座標変換した後、合成を行った。

第 3 節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 21 年 9 月 14 日に開始した。重機によるⅠ区の表土掘削を行い、測量基準軸の設定や残土置場の整備を行った後、人力による遺構面の精査と調査区壁面の整形に移行した。順次、遺構掘削と記録作業を進め、下層遺構面でも同様の作業を繰り返し行った。

10 月 27 日にⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を重機で行い、11 月 19 日までⅡ区の調査を進めた。11 月 20 日には調査器材の搬出を行い、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は平成 25 年度に着手し、同年度末までには遺物の実測とトレースを終えた。平成 26 年度には挿図および写真図版を作成し、次いで表組みの作成と本文の執筆を進めた。整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。

第三章 基本土層

本地点の現地表面は標高 13.6 ~ 13.7 m で、南側がやや低い。

前述したように、本地点では 10 枚に上る中世遺構面を検出した。部分的な広がりも含めればさらに多くの遺構面が確認されており、中世における本地点での土地利用が、整地を繰り返しつつ連綿と続けられた状況を見て取ることができた。

中世最上層の 1 面が標高 13.3 m で、中世基盤層の上面である 10 面が標高 10.7 m で確認されている。この間、泥岩屑による平らな整地面が繰り返し造成され、各整地面の間には、比較的軟質な粘質土層の堆積が見られた。標高 12.0 m 前後の 3 面 - 5 面間では有機質腐植土層 (まぐそ層) の堆積が確認された。

1 面と 2 面の構築土は人頭大の泥岩ブロックを主体とする層厚な造成土となっており、3 面以下とは様相を異にしている。3 面上には 5cm ほどの厚さで炭層が堆積していることから、3 面の構築物が火災により焼失した後、当地点における土地利用の在り方が大きく変わった状況が想定される。

10 面以下の中世基盤層は黒色粘質土で、奈良~平安時代の土師器相模型坯の小片 3 点が出土した他、中世遺物の混入は見られなかった (表 2)。

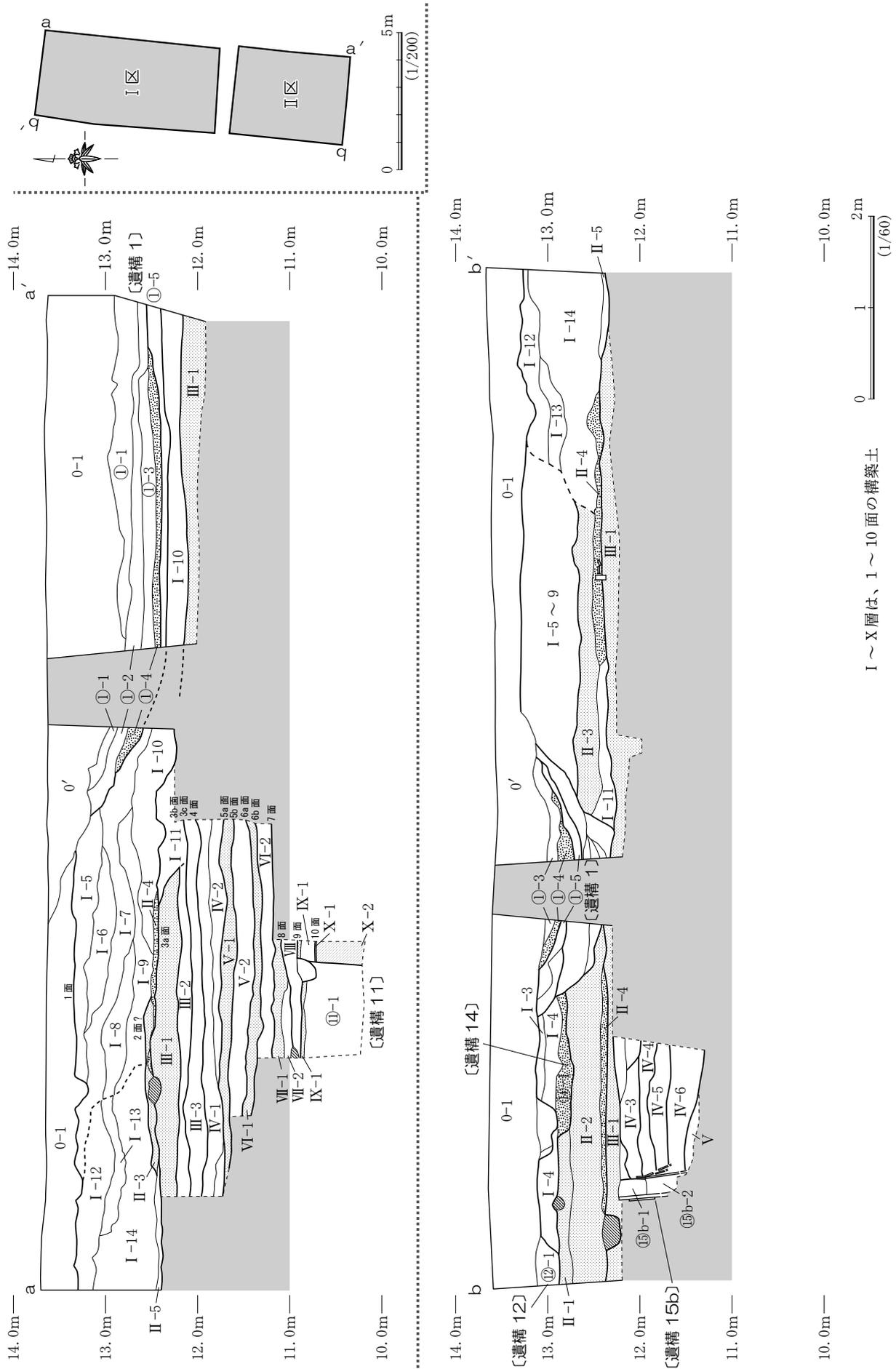


図 3 調査区東壁・西壁土層断面図

第四章 発見された遺構と遺物

第1節 検出遺構

本地点では10枚の遺構面が検出され、全て中世に帰属するものであった。Ⅱ区では安全面の配慮から、5面までの調査しかできなかった。

以下、上層の遺構面から順に、発見された遺構について説明する。

1面(図5・6)

Ⅰ区では標高13.3m前後、Ⅱ区では13.05m前後で確認した。全体的に拳～人頭大の泥岩ブロックで造成され、部分的に上面が細かな泥岩粒で整地されていた。Ⅰ区の北半と南半とでは泥岩の大きさが異なるなど整地状況に差異が見られたことから、造成は二段階に分けて行われたものと考えられる。Ⅰ区北半部では泥岩ブロックが特に大きく、その南辺は人頭大の泥岩塊で縁取りされていたように見て取れた(泥岩盛土)。この点、確証はないものの東西方向の土塁または道路といった構築物が一定期間存在した可能性を示しておきたい。

泥岩の盛土が次段階の造成土で埋没した後、Ⅰ区南端～Ⅱ区のほぼ全域で南から東に向けて落ち込む炭層が検出され、Ⅱ区の南端付近ではこの落ち込みを切るかわらけ集積土坑が検出された。

遺構13(かわらけ集積土坑)：Ⅱ区の南端で検出され、遺構1より新しい。長径140cm、短径120cmを測り、確認面からの深さは40cmを測る。土坑内では多量のかわらけが出土している。総じて遺存状況が良好で、完形資料も多く見られた。二次的被熱のためか器表が暗褐色～黒褐色に変色した個体が多く、また覆土に炭化材が多く混入していた状況から、火災後の処理などに伴い一括廃棄された可能性が考えられる。

出土遺物は図16に掲げた。様相については第2節で説明する。

遺構1(炭層落ち込み)：Ⅰ区南端部では南に、Ⅱ区では東に向けて落ち込む。確認面からの深さは90cmほどで、Ⅱ区では標高12.4m付近で東と南に続く平坦面が確認できた。炭層は落ち込みの最下層に堆積し、斜面部で5～10cm、平坦面では20cmほどの層厚があった。炭層への土粒の混入は殆どなく、ほぼ細粒炭化物の純層であった。

本遺構の機能・用途については、現時点では明確にしえない。現地調査時には池の可能性も考慮したが、滞水の痕跡が明瞭でなかったため積極的には肯定できない。平面的な広がりに関して、東に接する図1-地点16では標高13.0m前後の第1面で最大比高差12.5cmの段差が確認されているが、本地点の落ち込みと関連するものかは定かでない。出土遺物は15世紀前半が主体で、本遺構と近似した様相を呈している。

炭層中からは完形に近いかわらけが一定量出土しており、他に古瀬戸の天目碗や瓦質風炉などの小片も少量出土している。図17・18に掲げた。

2面(図5・6)

Ⅱ区では標高12.9m前後で確認した。Ⅰ区では良好な平坦面を確認できなかったが、12.6～12.8m前後で広がる整地層上面を2面と捉えた。1面で説明した泥岩盛土は、2面の整地後に行われている。

Ⅰ区南端からⅡ区北東部にかけては1面遺構1(落ち込み)の削平が及んでおり、2面整地層は失われていた。削平を免れたⅡ区の西部で、土坑1基が検出されている。

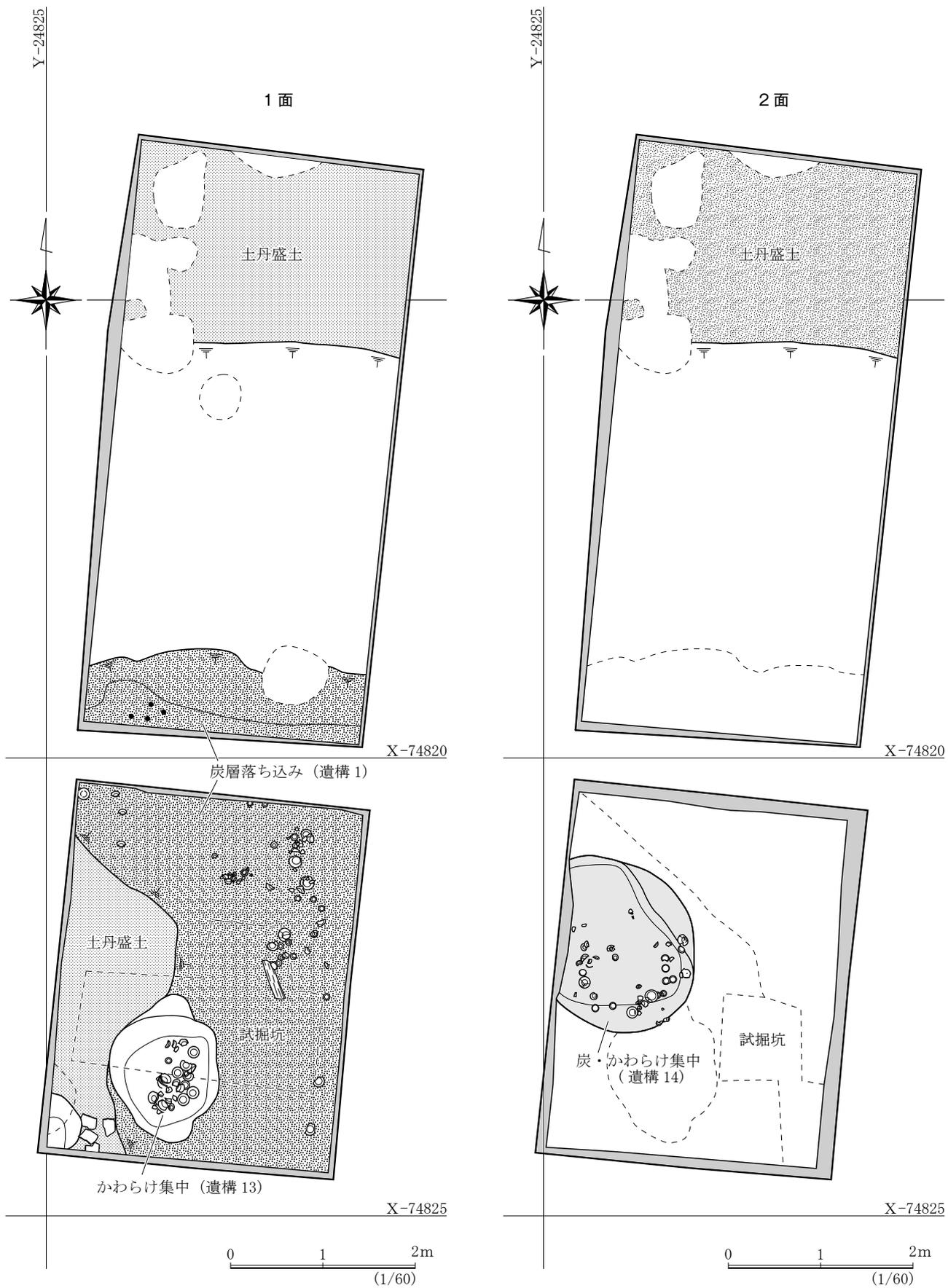


図5 1・2面全体図

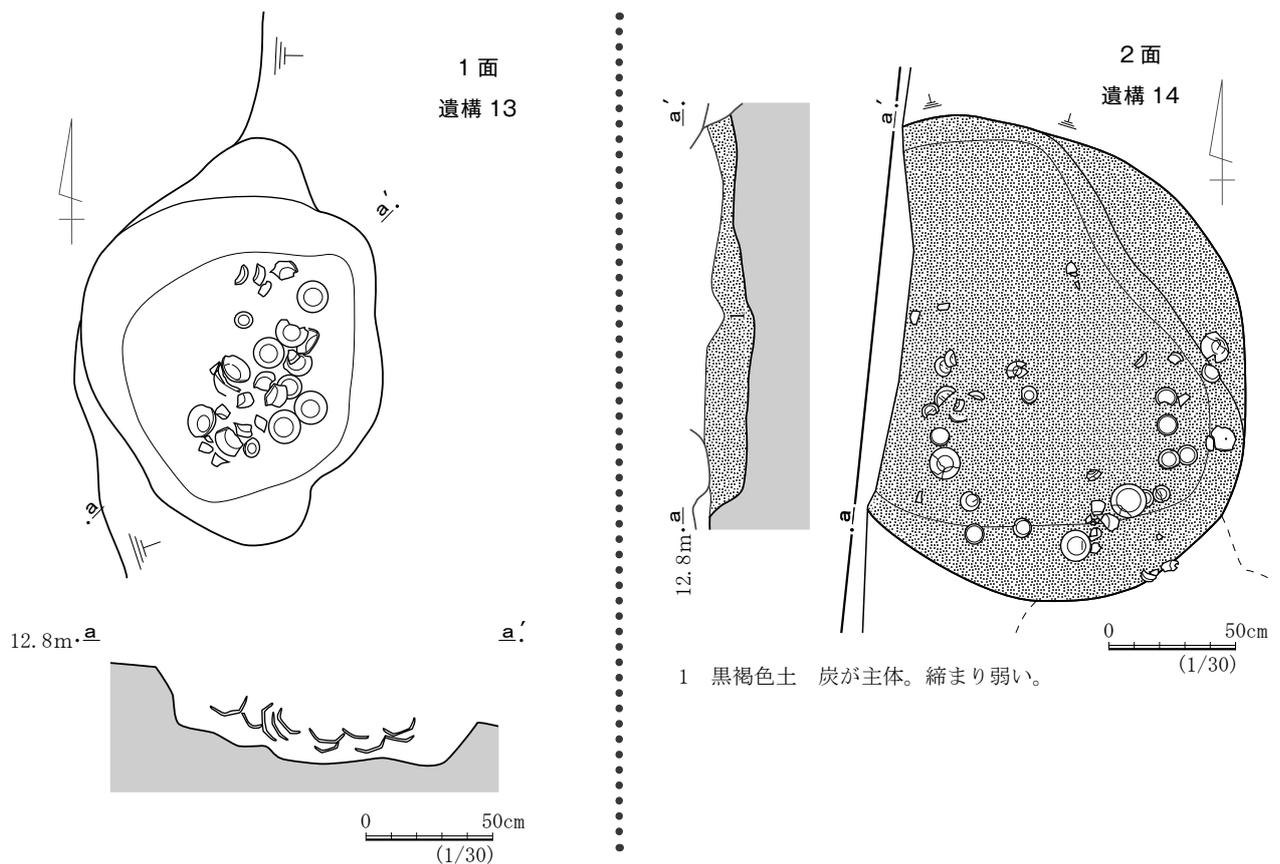


図6 1・2面 個別遺構図

遺構 14 (土坑)：Ⅱ区の南西部で検出された。西縁が調査区外に続くため全体形は不確定であるが、円形もしくは楕円形の平面プランを呈すると考えられる。南北径は200cmを測り、東西径は150cmまでを計測しえた。確認面からの深さは20cmと浅く、覆土は炭化物を主体とする黒褐色土の単層であった。

土坑内からは遺存状態の良好なかわらけが多く出土しており、完存する資料も数多く見られた。出土遺物は図20に示した。様相の説明は、次節で行う。

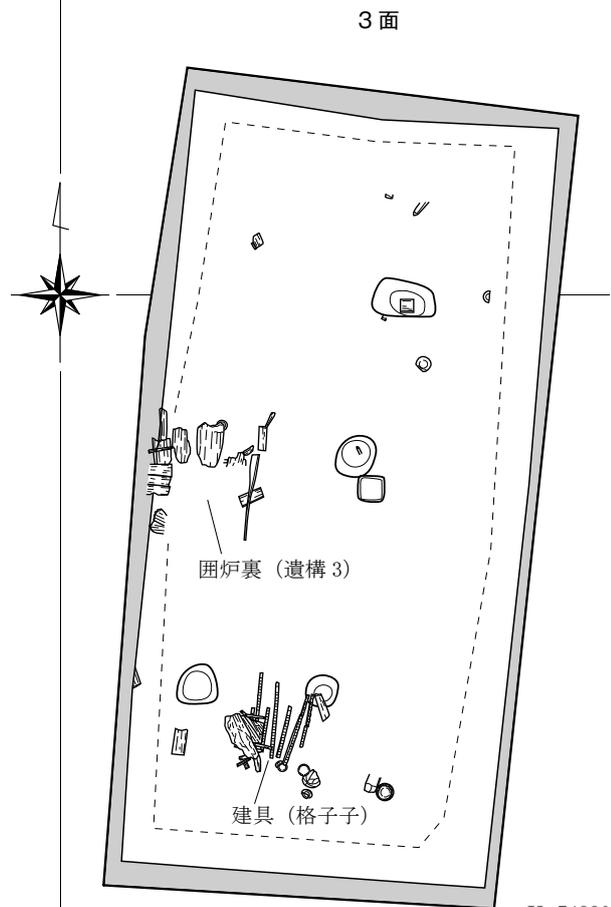
3面 (図7・8)

I区で標高12.35～12.5m、Ⅱ区では12.3m前後で確認した。拳大の泥岩塊が主体の整地面上に層厚5～10cmの炭層が検出された。I区では細粒炭化物の純層で、Ⅱ区では粘質土が混入していた。

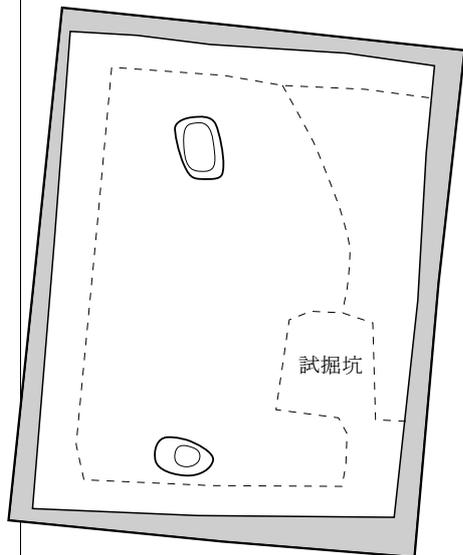
炭層を取り除いた面上で板囲いの囲炉裏1基と小穴5基が検出され、I区の南端付近では建具の格子(戸板か)が倒れた状態で出土している。

I区は囲炉裏が検出されたことから、この段階には床板貼りの建物内部であったと考えられる。また小穴には底面に礎板を据えたものもあるため柱穴と見なせようが、限られた調査区内では柱列を復元・提示するには至らなかった。

遺構 3 (囲炉裏)：I区の北部で検出された。西側辺の一部が調査区外に掛かるものの、囲炉裏内部の平面規模は把握することができた。内寸は60cm四方で、西辺および北辺は縦板で、東辺は横板で囲われていた。南辺では囲い板が残っていなかったが、外方から泥岩粒主体の整地土を寄せ集めて板材の裏込めにしたと見られる痕跡が確認できた。囲い板は整地面上に据えており、縦板には浅く突き立てているものも見られた。各辺とも外方へ倒れた状態であった。板材は30～50cmの長さを測ることから、本来あった床板も整地面上から50cmほど高い位置に貼られていた



X-74820



X-74825

0 1 2m
(1/60)

図7 3面全体図



水平ラインは
標高 12.5m

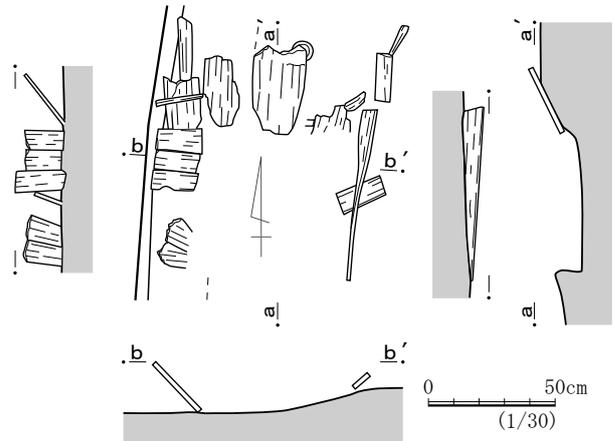


図8 3面遺構3

と考えられる。西辺・北辺の縦板には、上端が焼け焦げているものも見られた。

検出状況から考えると、囲炉裏は附属建物の火災に伴って上屋建築物の焼失炭化層に覆われたのであろう。囲い板も焼亡するか、火災後処理の際に撤去され、然る後に2面整地面が形成されたものと考えられる。

図23には、3面整地面の直上で出土した遺物を示した。説明は次節を参照されたい。

4面 (図9～11)

I・II区とも標高11.75～12.2mで確認した。II区南辺で東西方向の木組み溝が検出され二段階の造り替えが認められたこと、また5面までの掘り下げに当たり数層に亘って落ち込みが確認された。平面図は上下相前後するが、4a・4c面と4b面の2枚集約した。

4a面は軟質な有機質腐植土層の上部に形成され、泥岩による良好な整地面はII区木組み溝の北辺に幅120cmのエリアで確認できたのみである。I区では標高12.0～12.1mで30～40cm間隔で並ぶ杭列と、杭で横板を抑えた東西方向の木組みを確認している。遺存状態が悪いため明言できないが、30cm上層の3面で囲炉裏など建物痕跡が残されていたことから、直下の4a面においても簡素な建物が存在していた可能性がある。

4b面の木組み溝は4a面木組み溝よりも20cmほど低い位置で検出された。有機質腐植土の堆

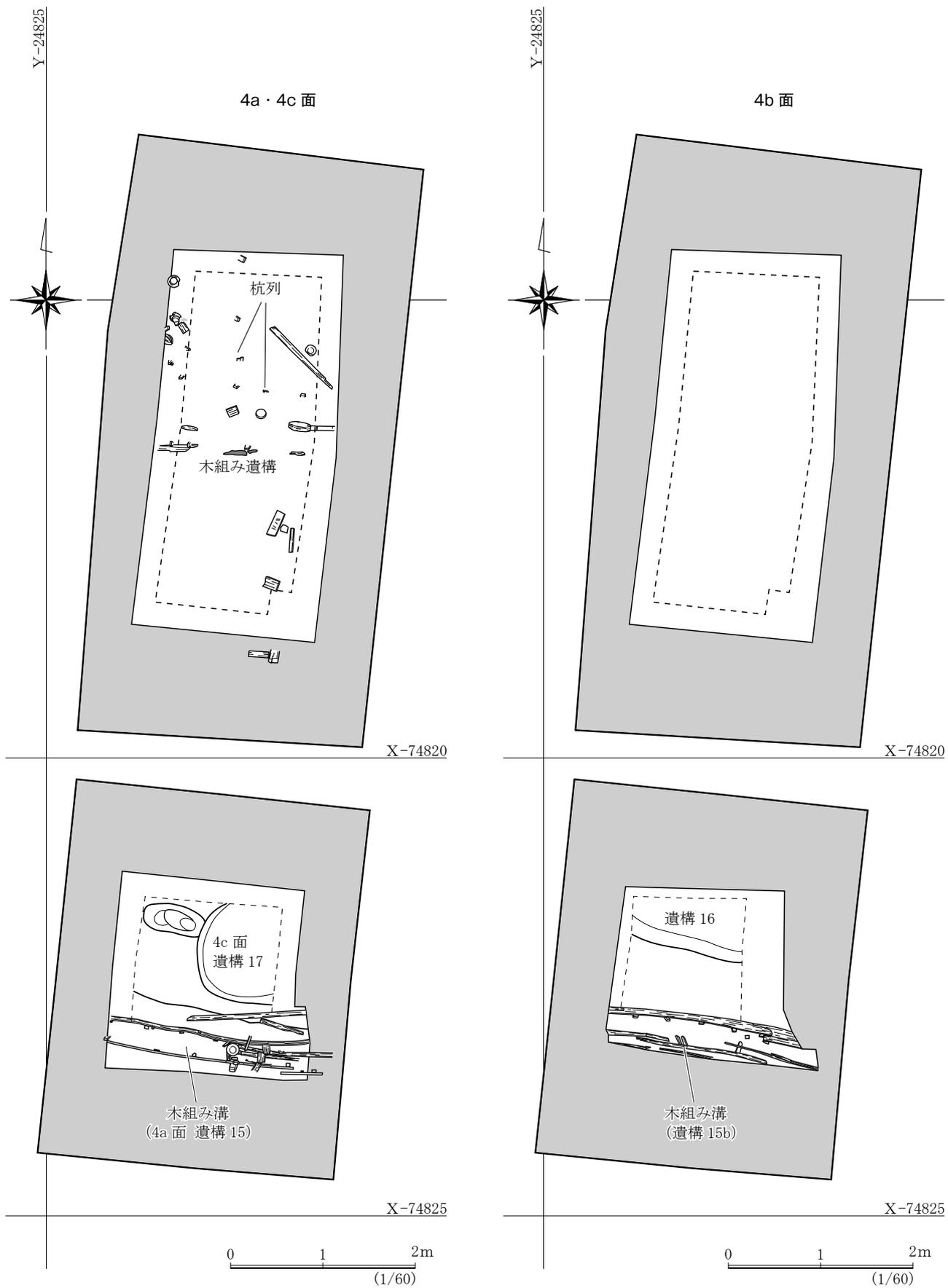


図9 4a · 4b 面全体図

積層中に構築され、明確な整地層に伴う遺構ではなかった。平面図（図9右）にはⅡ区木組み溝の北側に土坑や落ち込みを描き込んであるが、これらは有機質腐植土層を掘り下げている際、標高12.05～11.75 mで確認された。本報告では4c面の遺構として扱うが、いずれも明確な整地面に伴うものではなかったため、有機質腐植土の堆積層中に異質土が紛れ込んだ痕跡とも考えられる。従って、後述する4c面などは厳密な意味での生活面とはいえないかもしれない。

4a面 遺構 15（木組み溝）：

Ⅱ区南端部で検出された。東西方向に延び、両端とも調査区外に続く。確認できた長さは250cmで、N81° Wで延びる。確認面からの深さは35cmで、底面標高は11.84～11.88 mを測り、東端部が低い。

両岸ともに横板を縦杭で抑えて護岸材とし、両岸間の幅は25cmを測る。縦杭は30～60cm間隔で打たれ、北岸では10cmスパンの箇所もあった。横板は厚さ2cm、幅15～30cm、長さは50cm～2 mを測る。規格性はなく、転用材や端材を利用しながら構築と補強が繰り返されたのであろう。

南岸の護岸材に沿った20～30cm北側では粘質土で埋没した落ち込みが検出されたが、深さ10

cmと非常に浅く、木組み溝の掘り方・裏込めといえる状況ではなかった。

木組み内の覆土からは完存品を含むかわらけや折敷などの木製品が出土している。図26に図示した。

4b面 遺構 15b（木組み溝）：

Ⅱ区の南端、遺構15の直下で検出された。

木組みの構造・軸方位とも遺構15と同じで、両岸間は18～27cmを測る。両端とも調査区外へ続き、検出できた長さは215cmを測る。横板材を抑える縦杭は30～40cm間隔で打ち込まれ、横板は厚さ2cm、幅5～25cmで、南岸の護岸には幅が狭く粗末な板材が使われていた。深さは35cmで、底面標高は11.63～11.66 mを測り、東端部が最も低い。

木組みの覆土中からは完存品を含むかわらけの他、箸を主体とする数多くの木製品が出土している。図27に図示した。

掘り方・裏込めは確認されなかった。

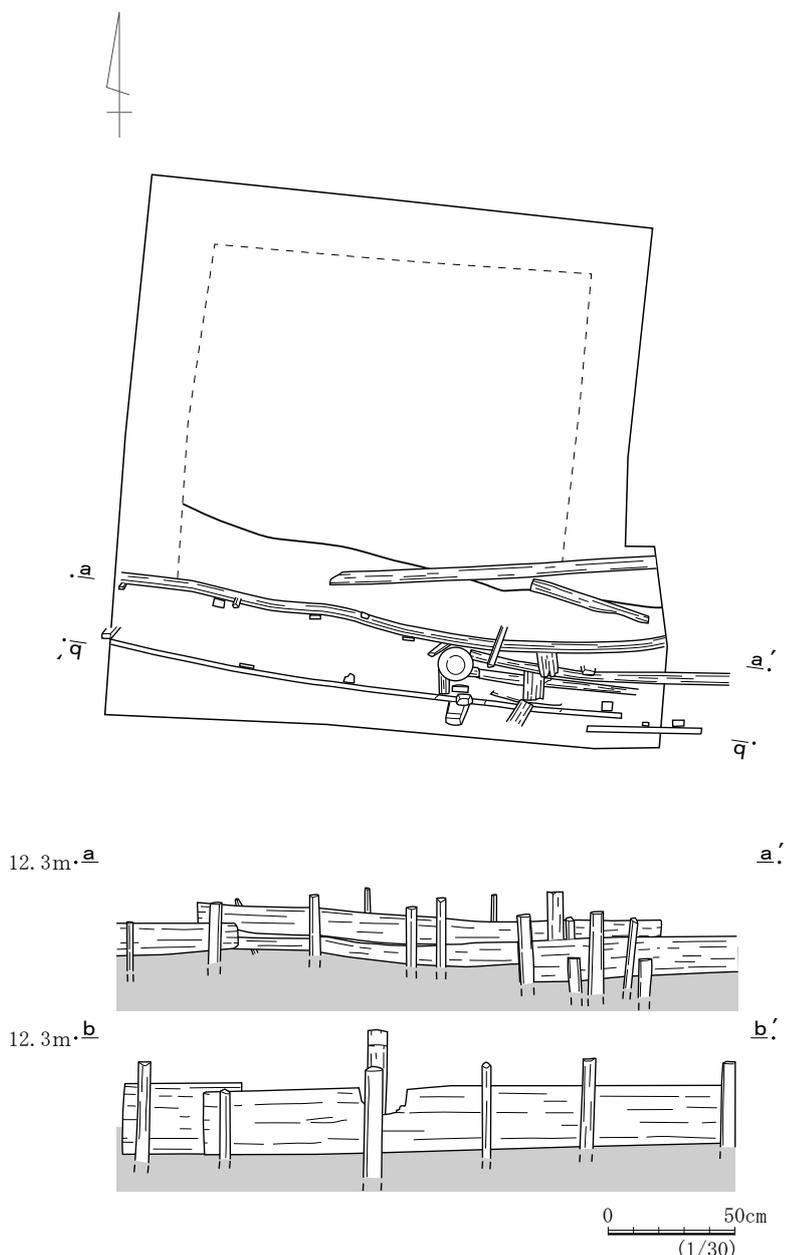


図10 4a面 遺構 15

4b面 遺構 16 (土坑) : 遺構 15b の北側、標高 12.05 m で検出された。北と東が調査区外に続くため全体の規模は不明。検出できた範囲で南北 105cm、東西 90cm までを計測しえ、概ね円形基調の平面プランであったと考えられる。深さは 10cm と非常に浅く、明確な整地面に伴うものではなかったため、堆積層中の窪みといった可能性も考えられる。埋土は、周囲の堆積土より泥岩塊をやや多く含む。

本遺構ではロクロかわらけや常滑甕などの小片が少量出土しているが、図示すべき資料はなかった。

4c面 遺構 17 (土坑) : 遺構 15b の北側を掘り下げている際、標高 11.9 m 近くで検出された。東西 70cm、南北 35cm の長楕円形を呈し、深さは 10cm と非常に浅い。坑内は泥岩ブロックが密に詰まっており、明確な整地面から掘り込まれた遺構ではないことから、腐植土の堆積中に泥岩が投棄されただけの痕跡とも考えられる。

本遺構からは、泥岩のブロックに混じってロクロかわらけの小片 1 点が出土している。図 31 に示した。



5面 (図 12)

I 区で標高 11.7 ~ 11.75 m、II 区では 11.35 ~ 11.5 m で検出された。泥岩ブロックを主体とする堅緻な整地層が形成され、I 区では浅い土坑 1 基が検出された。II 区では平坦面が確認できず、整地層の上面が北へ落ち込む状況が見て取れた。

遺構 9 (土坑) : I 区北部で検出された。西側調査区外へ続くため、全体の形状・規模は不明。確認できた範囲では南北 115cm で、東西は約 50cm までを計測した。確認面からの深さは最大でも 10 cm と浅く、覆土は有機質腐植土(まぐそ)の単層であった。土坑埋没後の確認面レベルで木製の折敷が出土している。

この他、整地面上で厚さ 2 ~ 4cm の板材が数枚出土しているが、礎板など建築部材であったかは、調査できた範囲も狭く不明である。

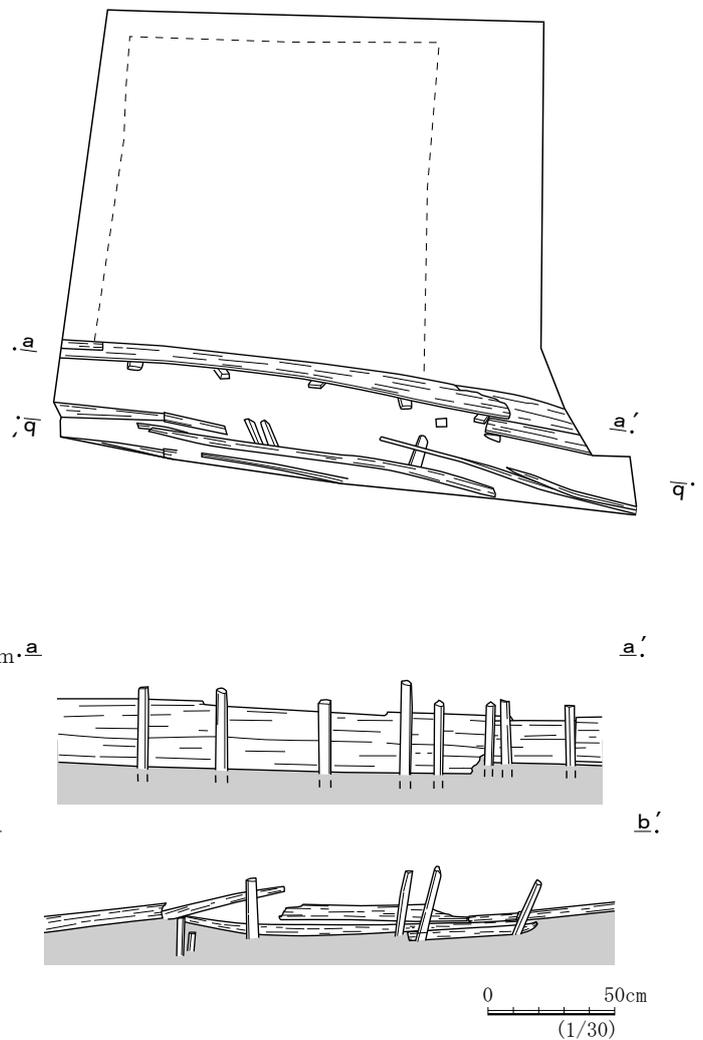


図 11 4b面 遺構 15b

6面 (図 13)

I 区では標高 11.40 ~ 11.50 m

で検出された。Ⅱ区では安全面を考慮して6面以下の掘削・調査を行わなかった。泥岩粒を主体とする比較的堅緻な整地層が形成され、この上面では縦杭や小穴が確認された。また、同面を掘り下げた標高 11.30～11.40 m 前後では明確な整地面に伴わない小穴数基が確認されたことから、上層を 6a 面、下層を 6b 面として平面図を2枚に分けて提示した。

6a 面の検出遺構は小穴1基のみで、長径 30cm、短径 25cm の楕円径プランを呈する。確認面からの深さは 20cm で、覆土は暗褐色粘質土の単層であった。出土遺物がなかったため遺構番号は付さなかった。

6b 面では小穴や落ち込みが5基ほど検出されている。いずれも確認面から数 cm～25cm の深さしかなく、明確な整地面から掘り込まれた遺構とは見なし難いことから、堆積層内の土質差と理解することもできるだろう。

I 区東部で確認された落ち込みは確認面からの深さが 5cm で、以西の堆積土に比べ泥岩粒の混入が少ないものであった。

7 面 (図 14)

I 区において標高 11.2 m 前後で検出された。調査できたのは東西 100cm、南北 140cm である。泥岩のブロックを多用した堅緻な整地層が形成され、この上面で小穴1基を確認した。

遺構 10 (小穴)：北側が調査区外に続くため、全体の規模は不明。検出できた範囲では東西 40 cm、南北 30cm までを計測しえた。確認面からの深さは 20cm で、底面に泥岩塊を据えた上に厚さ 2cm の板材 3 枚を積み重ねていた。本遺構からの出土遺物はなかった。

8 面 (図 14)

I 区において標高 11.0～11.1 m で検出され、上面が北側に向けて緩やかに落ち込む。調査ができたのは東西 100cm、南北 140cm のごく狭い範囲である。やや締まりの強い黒灰色土が面構成土であるが、泥岩粒を含まず人為的な整地層

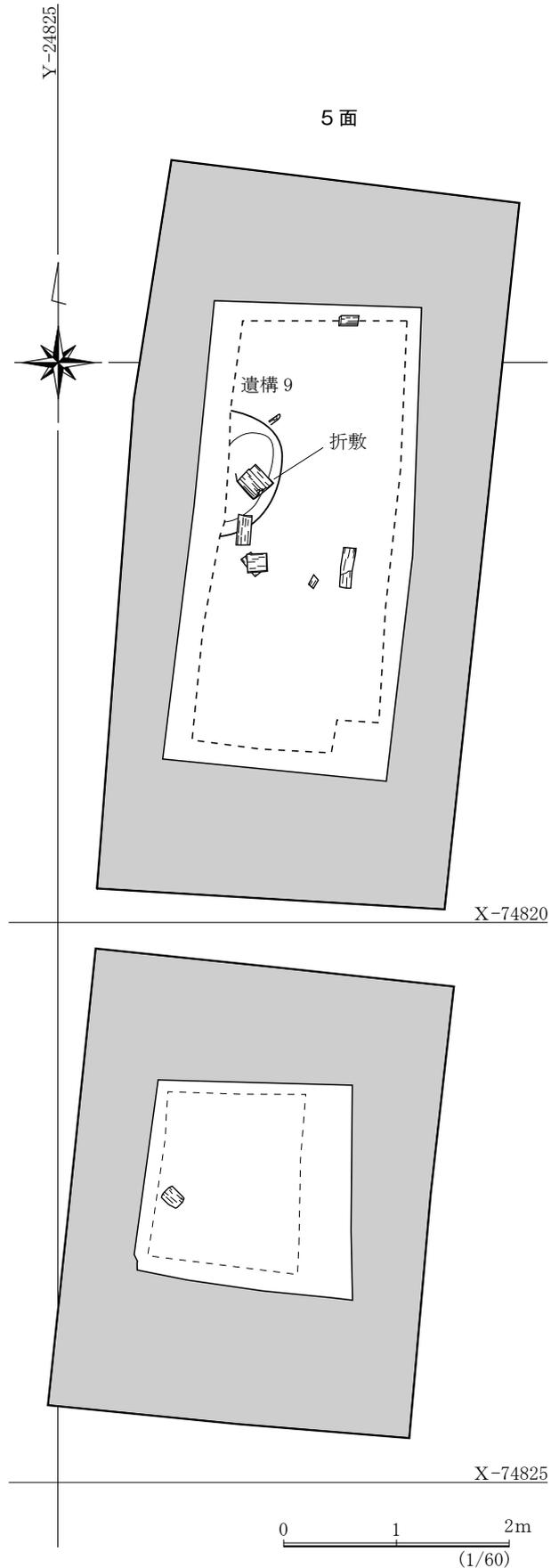


図 12 5 面全体図

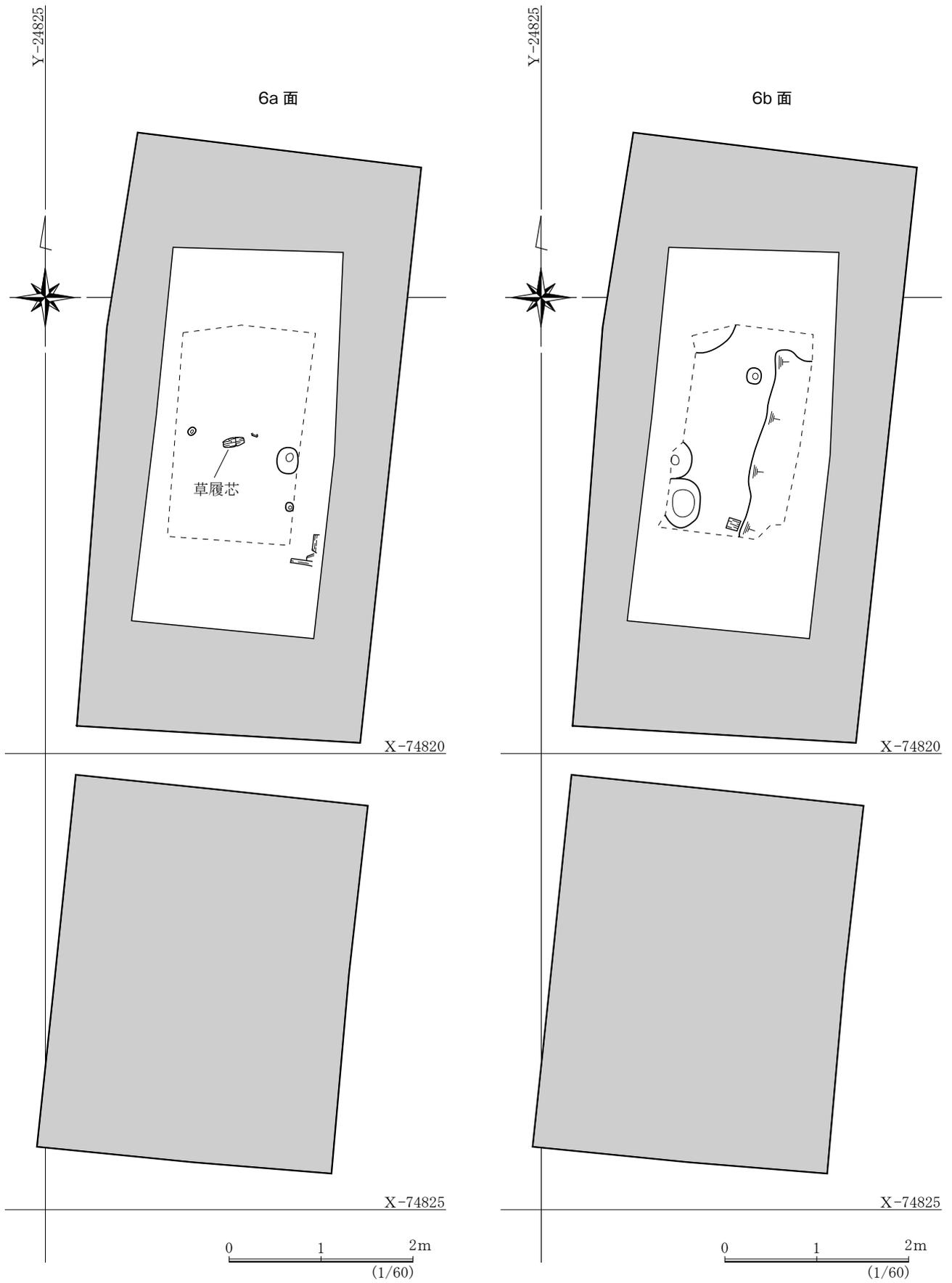


图 13 6a · 6b 面全体图

とはならない可能性もある。

9面 (図 15)

I 区において標高 10.9 m 前後で検出された。調査で検出できたのは東西 100cm、南北 140cm の範囲である。黒褐色粘質土層の上面に細密な泥岩粒を数 cm の厚さで敷いて整地が施されていた。この面上で検出できたのは小穴 1 基である。東側が調査区外に続くが、断面観察から直径 25cm ほどの円形プランを呈することが確認できた。確認面からの深さは 20cm で、覆土は暗灰褐色粘質土の単層であった。他に、調査坑の北東角で安山岩の扁平礫（伊豆石）が載っていた。これは 8 面の構成土に埋め込まれた可能性もある。

10面 (図 15)

I 区において標高 10.7 m 前後で検出された。調査できたのは東西 100cm、南北 140cm の範囲である。中世基盤層である黒色粘質土層の上面に、細密な泥岩粒を薄く敷いた整地面が確認された。この面上で大型の土坑 1 基が検出されたが、断面観察の所見としては、9 面整地層の直下まで立ち上がる可能性が高いと考えている。

遺構 11 (土坑)：調査坑のほぼ全面で検出され、上場は南西側のごく一部分が確認できたのみである。

検出できた限り、東西 60cm、南北 110cm 以上の規模となることは確実である。ほぼ垂直に立ち上がり、70cm 以上の深さを有する。覆土は灰黒色砂質土の単層であった。

覆土中からはロクロかわらけ・手づくねかわらけ、常滑甕などの小片が少量出土している。図 36 に 1 点のみを掲げた。

第 2 節 出土遺物

本地点では整理箱で 33 箱の遺物が出土した。本節では、それらの様相について説明する。面・遺構ごとの出土量は表 2 を、法量など個別の特徴については表 3 を参照されたい

1面 遺構 13 出土遺物 (図 16)

かわらけが一括廃棄された土坑で、出土遺物の殆どをロクロかわらけが占める。ロクロかわらけでは小皿が破片数 87 点で重量 1010 g、中皿も含めた大皿が 1221 点で 22480 g 出土している。完形または略完形の資料をもとに一個体当たりの平均重量を算出すると、小皿が約 45 g、大皿が約 210 g という数値が得られた。これで出土総重量を割ると小皿 27 点、大皿 107 点が出土したことになり、小：大の構成比は 2：8 となる。破片資料でも中皿を識別できれば大皿の比率は下がることになるが、相対的に中皿の構成比は低い印象がある。

1 は瓦質火鉢の口縁部片。口辺が外方へ直角に折れ、内縁部に突起を貼り付けている。

2 以下はロクロかわらけで、2～11 が小、12～15 が中、13～33 が大皿に類別できる。それぞれの口径は小皿が 7cm 前後、中皿が 10.5～11cm 前後、大皿は概ね 13cm 台にまとまりを見て取れる。器形の特徴としては、体部から口縁部にかけて外方へ直線的に開き、外面の体部下位に僅かな丸みを帯びている。底部は内面にナデを施し、外面に回転糸切り痕と板状圧痕を残すものが通例である。大皿の内面では、底部と体部境の屈曲が明瞭に見て取れた。胎土は微細で粉質といえるもので、総じて器壁は厚く口縁に向けて薄く整えられている。

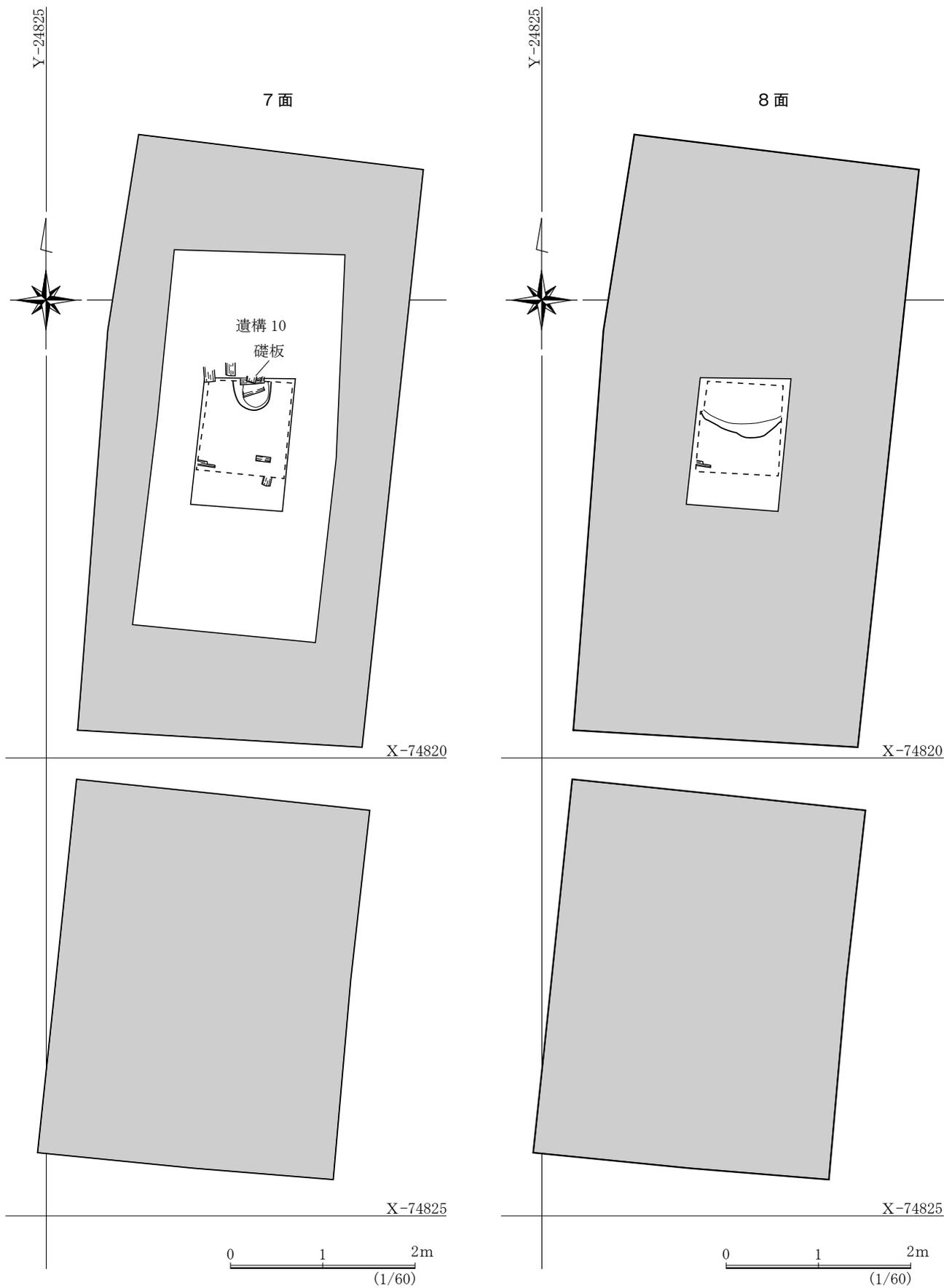


图 14 7·8 面全体图

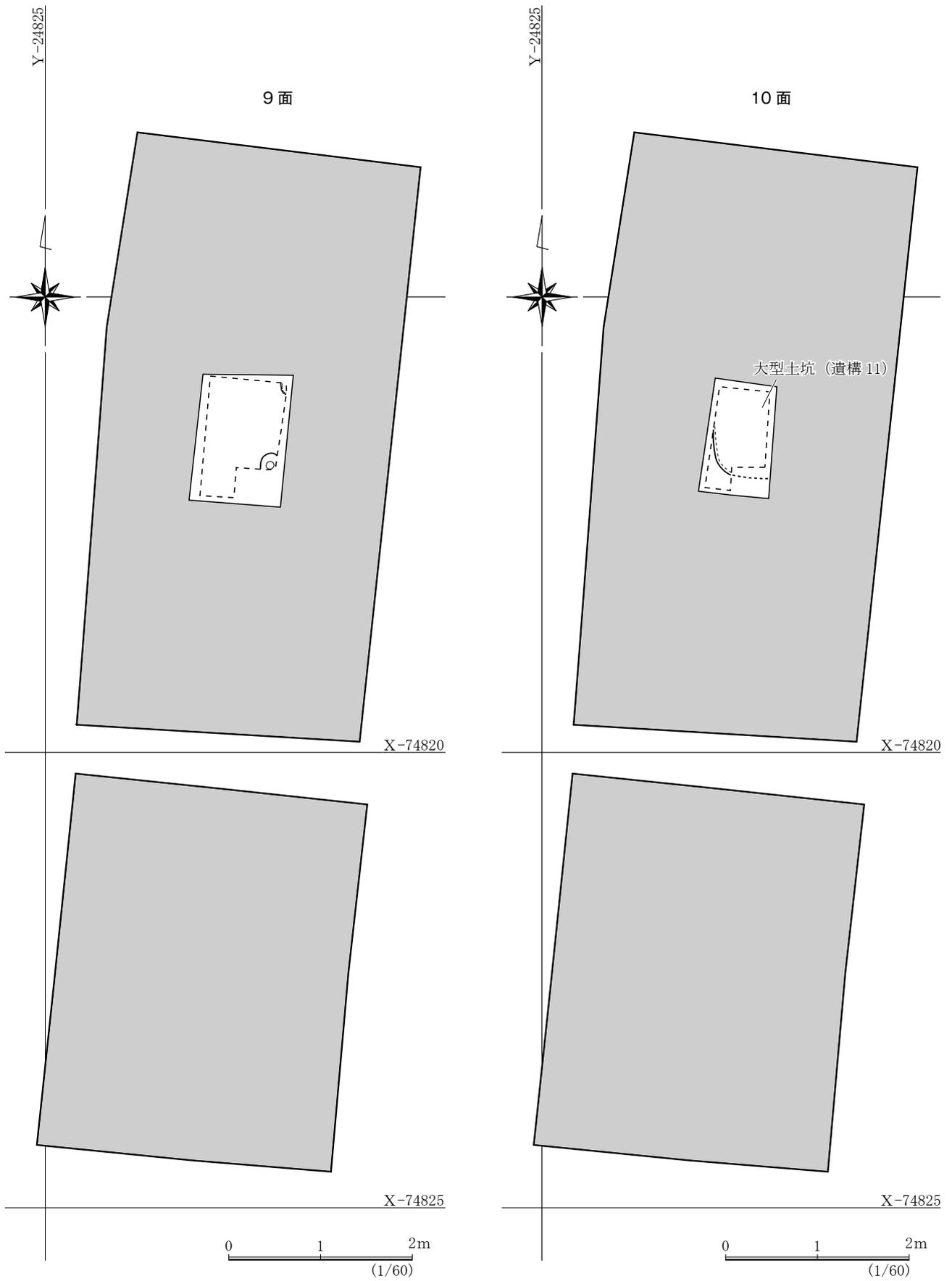


图 15 9·10面全体图

1面 遺構 1 出土遺物 (図 17・18)

I・II区で検出された炭層の落ち込みからの出土遺物で、完存品を多く含むロクロかわらけが一定量と常滑・瀬戸・瓦質土器などの小片がごく少数出土している。

ロクロかわらけは小皿が373点で4892g、中型品を含む大皿が635点で13580g出土している。完形資料を基準にした一団体当たりの平均重量は小皿が約49g、大皿が約165gで、これをもとに個体数を算出すると小皿が100個体、大皿が82個体となり、小皿:大皿の構成比は5.5:4.5となる。

34～104はロクロかわらけで、75までが小皿、76・77・80が中皿、80を除く78～104が大皿である。口径は小皿が6.5～7.5cm、中皿が11cm前後を中心としており、大皿には11.5～12cm台と14cm前後と二通りの中心分布域を見て取れる。小皿・大皿ともに遺構13出土資料に比べて器高が5mm程度低く、全体に低平となる印象を受ける。小皿には体部が外方へ直線的に開くものと丸みを持ちつつも口縁部が直線的に開く二種類の器形に分かれ、概して前者の方が厚い器壁を持つ。大皿

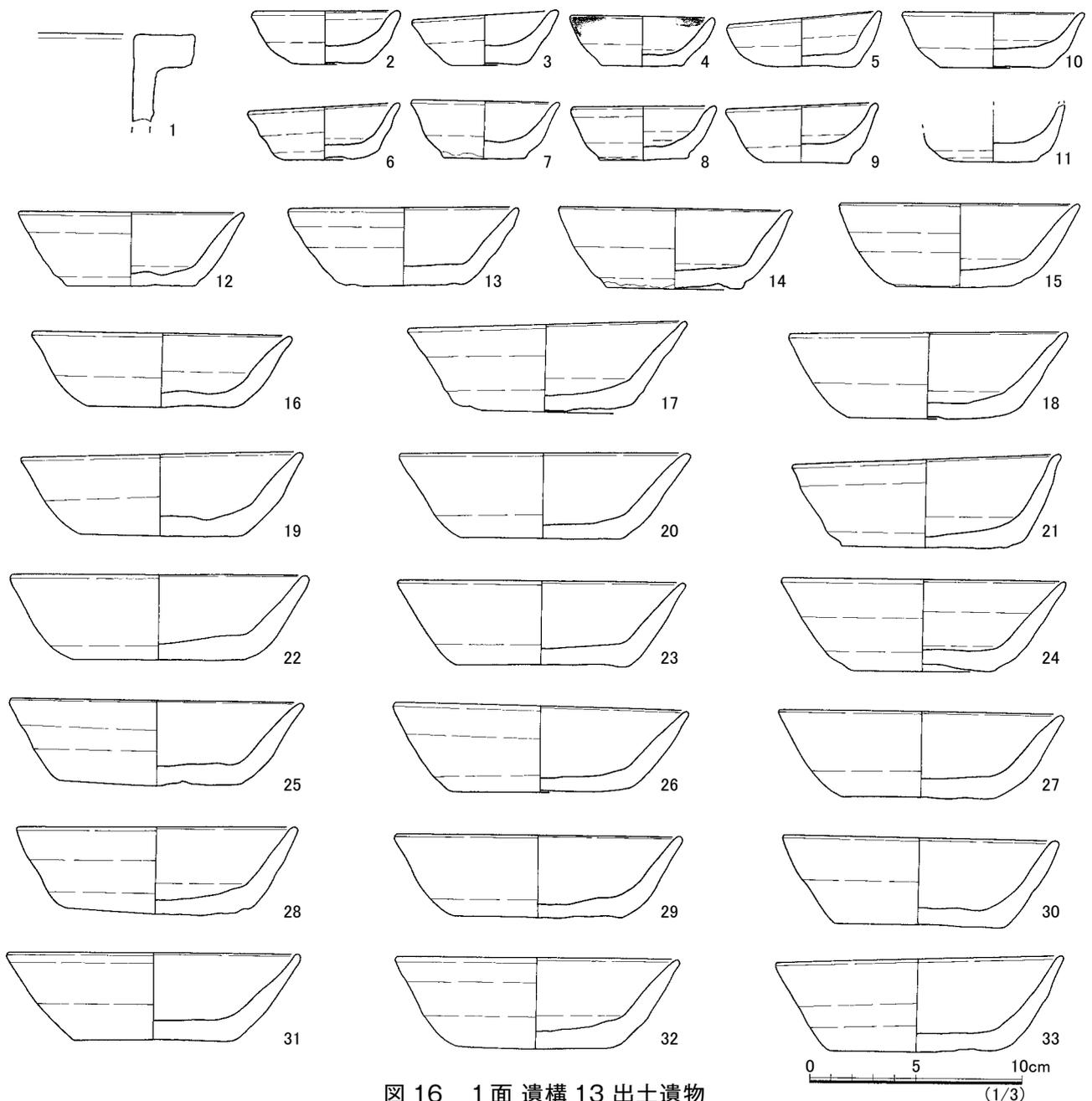


図 16 1面 遺構 13 出土遺物

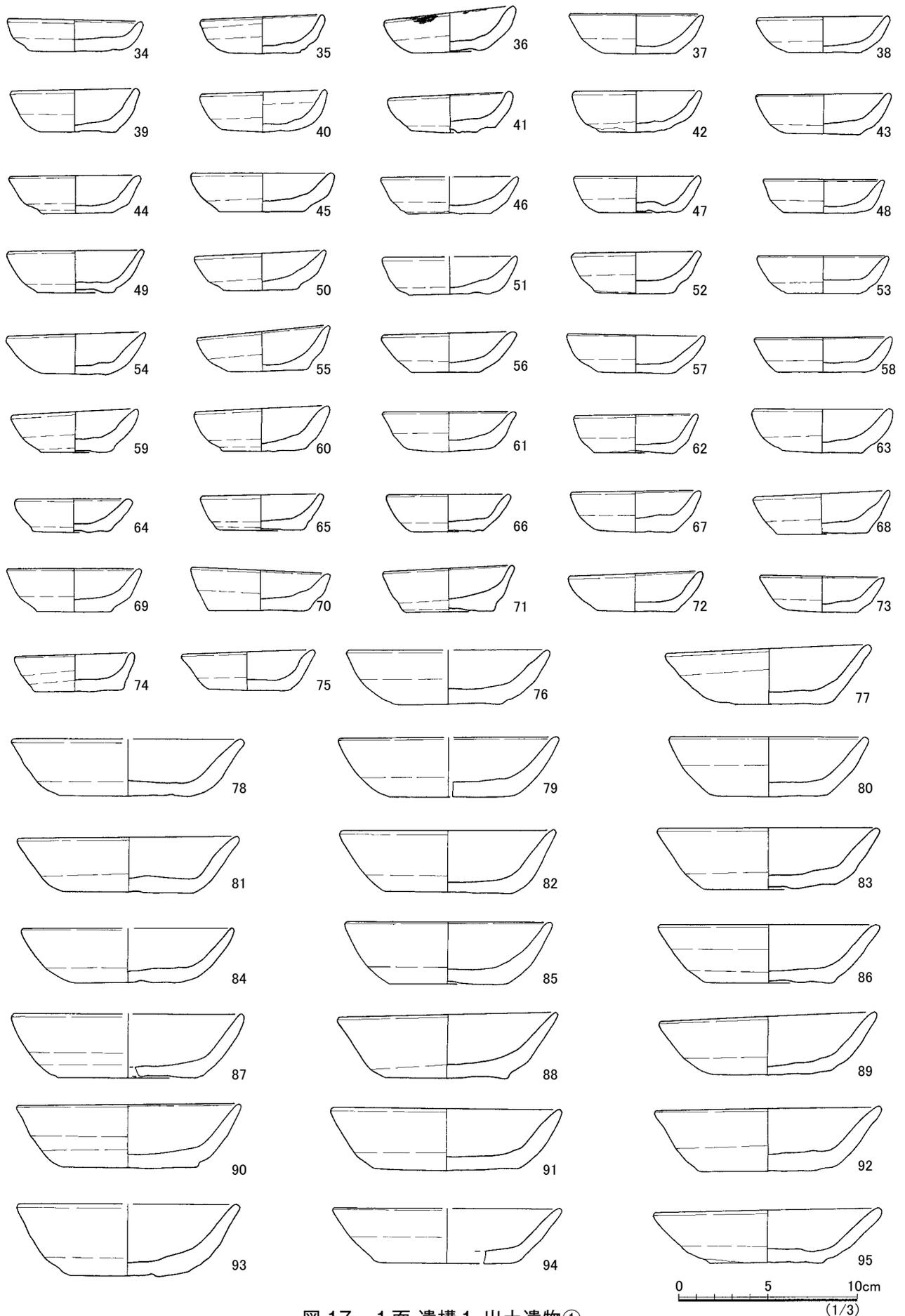


图 17 1面遺構1出土遺物①

は外面の体部下位に丸みを持ち、口縁は外方へ直線的に引き延ばされている。小・中・大皿とも底部内面をナデ調整し、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。

105は常滑甕の胴部小片。外面に縄目状圧痕が残るが、叩き具の原体ではなく成形時に不慮に付いたものと見られる。106・107は瀬戸の鉄釉天目茶碗。鉄釉は浸け掛けで、外面体部下位には薄い鉄釉の化粧掛けが施される。口縁部の屈曲が弱く、古瀬戸中期後半以降の特徴を有する。

108は瓦質土器で土風炉の口縁部小片。109・110は銅銭。

1面下出土遺物（図19）

1面遺構の調査後、2面まで掘り下げる際に出土した遺物である。

111～136はロクロかわらけで、111は極小の内折れ皿、112～126が小皿、127以下が大皿である。小皿・大皿とも1面遺構で見られた厚手で直線的な体部を持つものと、やや浅手で体部が内湾して立ち上がるものとがあり、後者は古い様相といえる。

以下の小片資料については、観察表（表3）を参照されたい。

2面遺構14出土遺物（図20）

出土遺物の殆どをロクロかわらけが占め、完存資料も一定量が出土している。小皿が破片数162点で2560g、中型品を含む大皿が154点で2945g出土している。完存品を基準にした小皿一個体の平均重量は約58g、大皿は口縁を僅かに欠く191の残存重量が172gなので、一個体当たり180g前後になることが推測される。これで総重量を割ると小皿が44個体、大皿が16個体に換算でき、

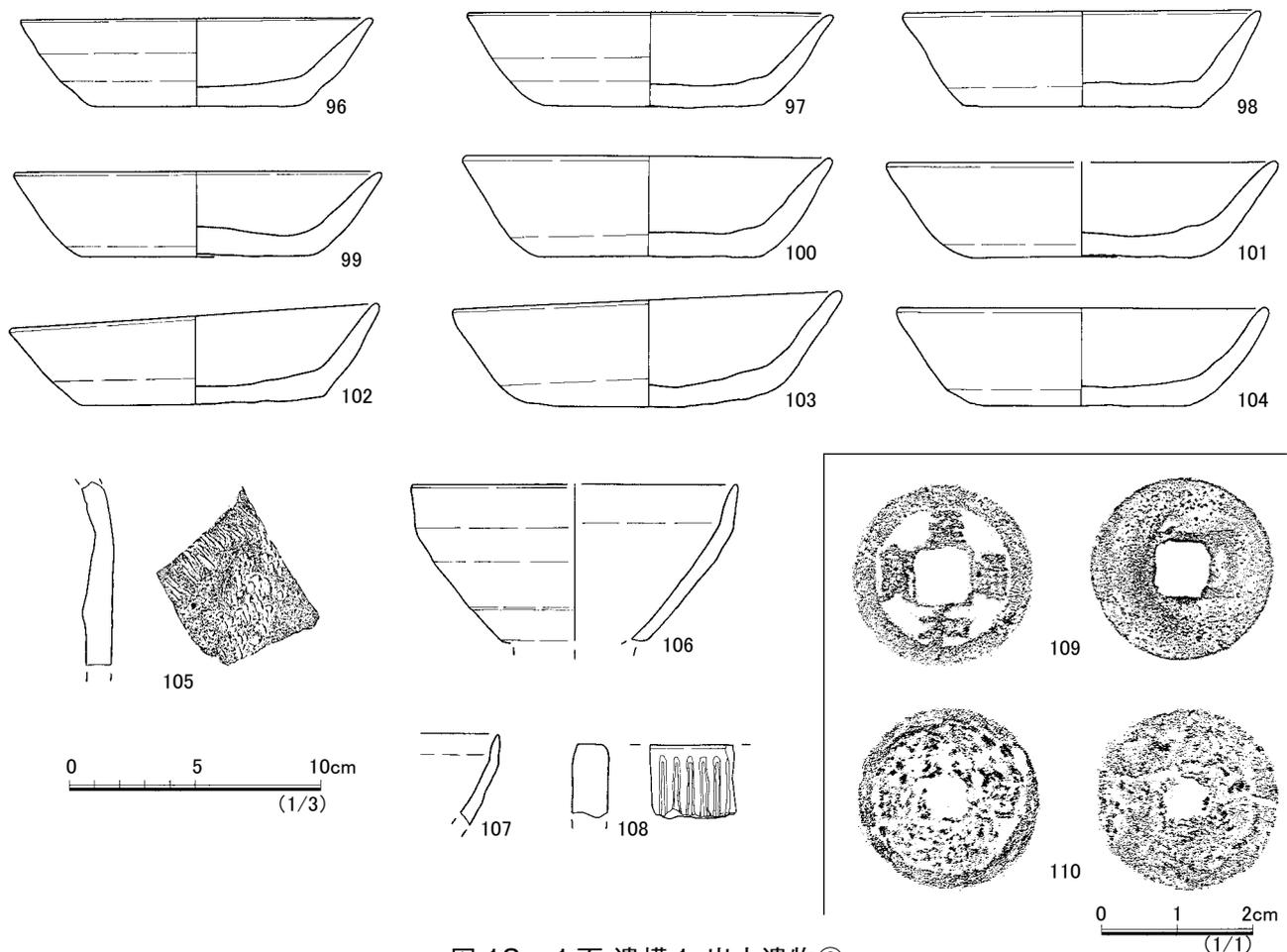


図18 1面遺構1出土遺物②

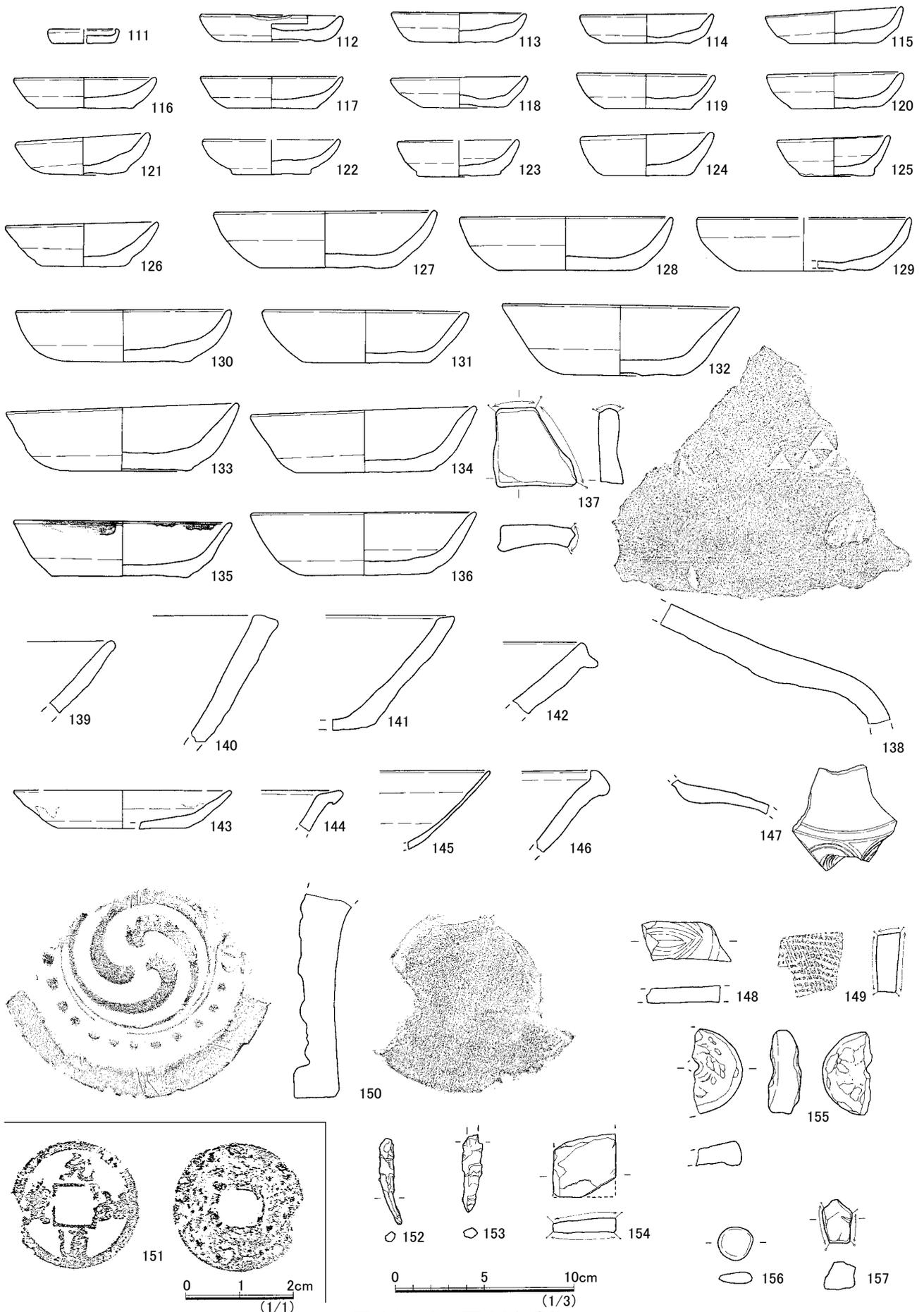


图 19 1 面下 出土遺物

小皿：大皿の構成比は7：3前後になる。

口径は小皿が7cm 台後半、中皿は1点のみだが11cm 前後、大皿は12cm 前後と13cm 前後の二通りの中心分布域が見て取れる。

163～192がロクロかわらけで、182までが小皿、183は中皿、184～192は大皿である。小皿には器高が2cm以下で口縁が直線的または僅かに内湾して開くものと、器高2.5cm前後でやや内湾気味の体部を持つものに体別できる。大皿は体部中位に膨らみを持ち、口縁が直線的に薄く収められる資料が主体となる。総じて1面遺構の資料と比較して器壁が薄くなる点、古相を備えているといえよう。内底面にナデ調整を施し、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例といえる。188は外底面に40箇所以上の非貫通孔が穿たれているが、何を目的にしたものかは不明である。

194は瀬戸の入れ子。口縁に外方からヘラ押しを施し輪花形に整えている。195は仕上げ砥。

2面下 出土遺物 (図21)

2面下～3面検出時に出土した遺物を一括して掲げた。196～216はロクロかわらけで、小皿・大皿とも2面遺構14の出土資料と明瞭な様相差は見取れない。

217は常滑の片口鉢I類。粘土紐積み上げ後に回転ナデで整形されるが無高台である。口縁部はやや肥厚し玉縁状となる。

223は漆器の皿。内外面とも黒色漆塗で無文。224～228は木製品で箸。本地点では2面下より下層で木製遺物が遺存していた。

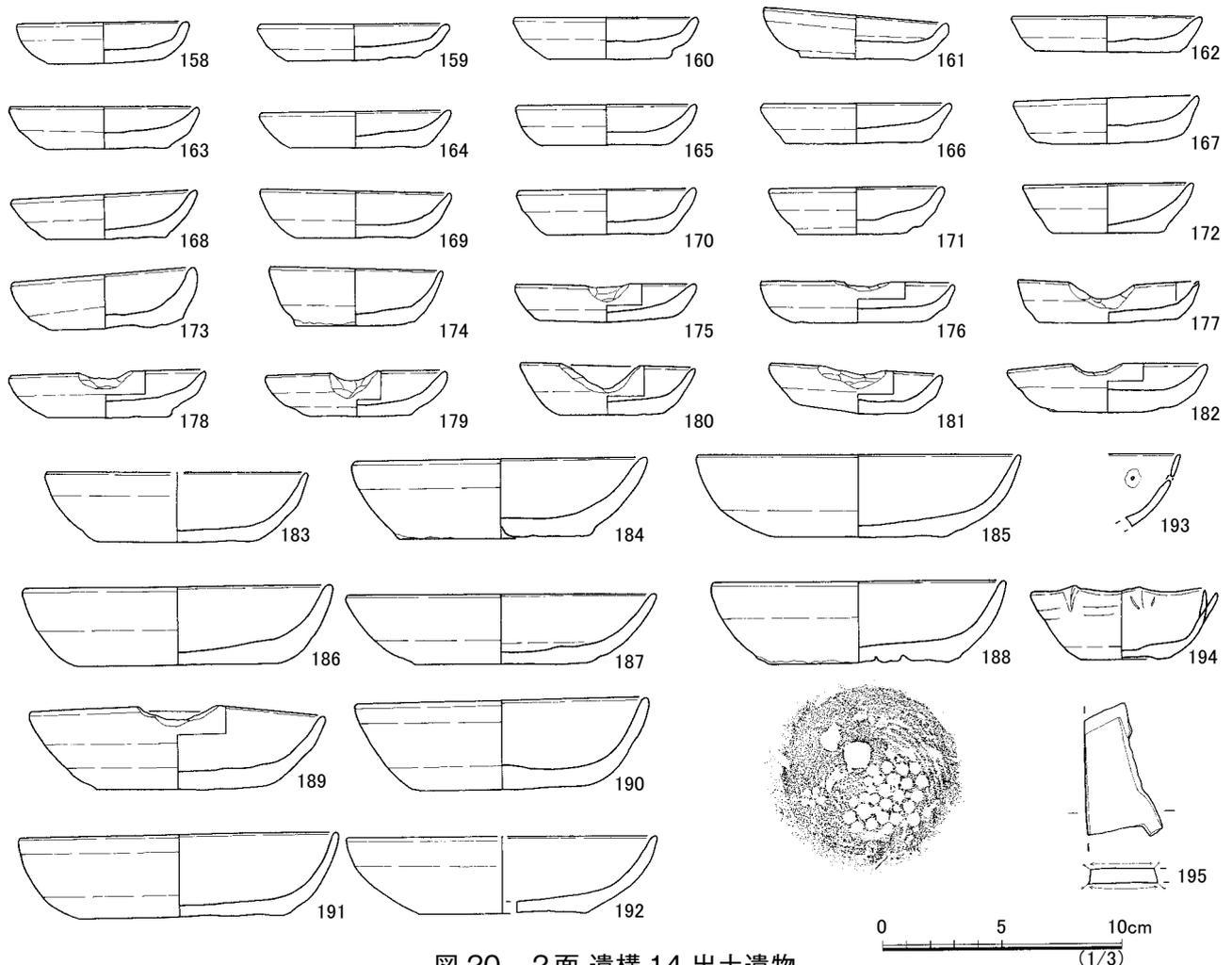


図20 2面遺構14出土遺物

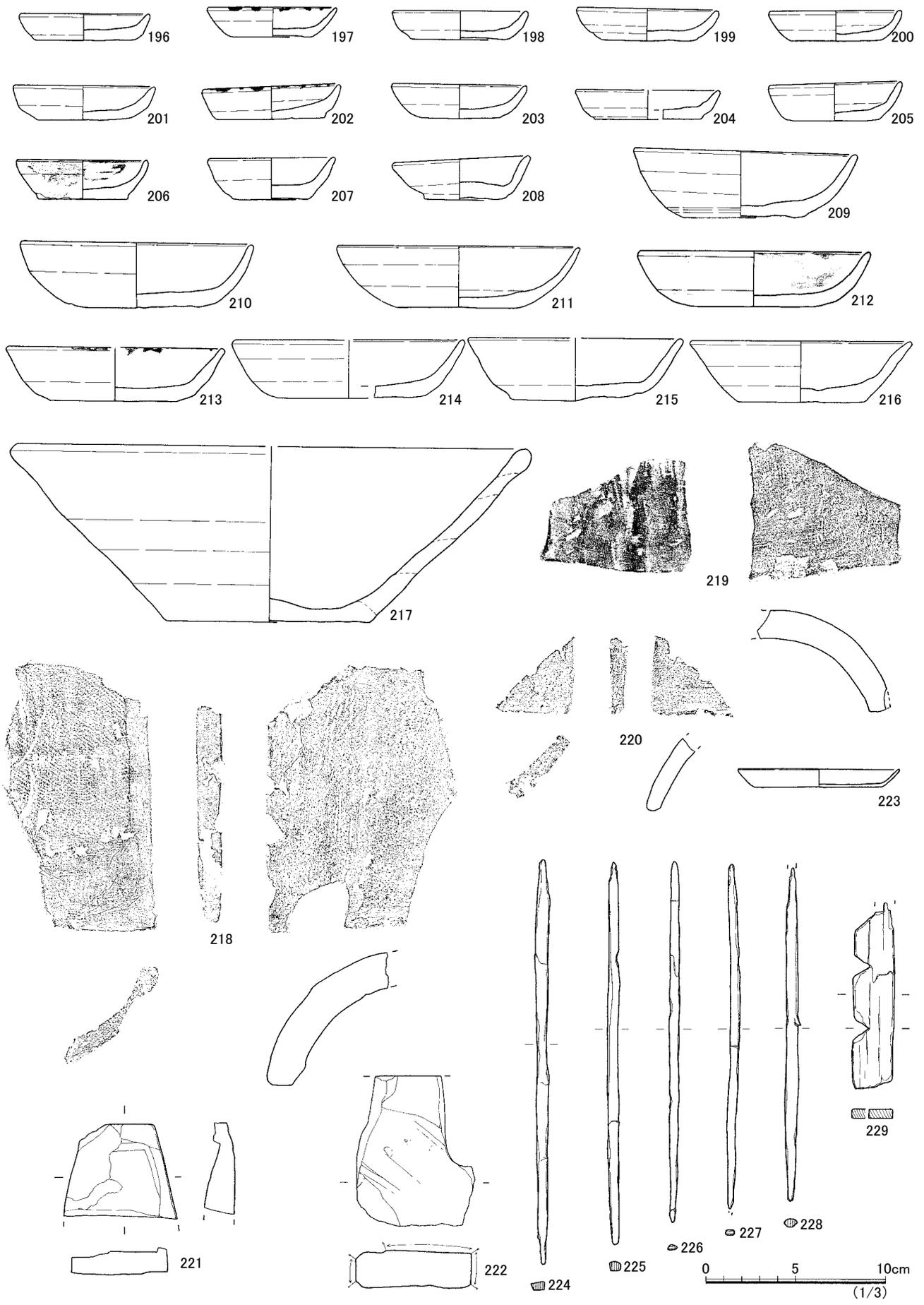


图 21 2面下 出土遺物

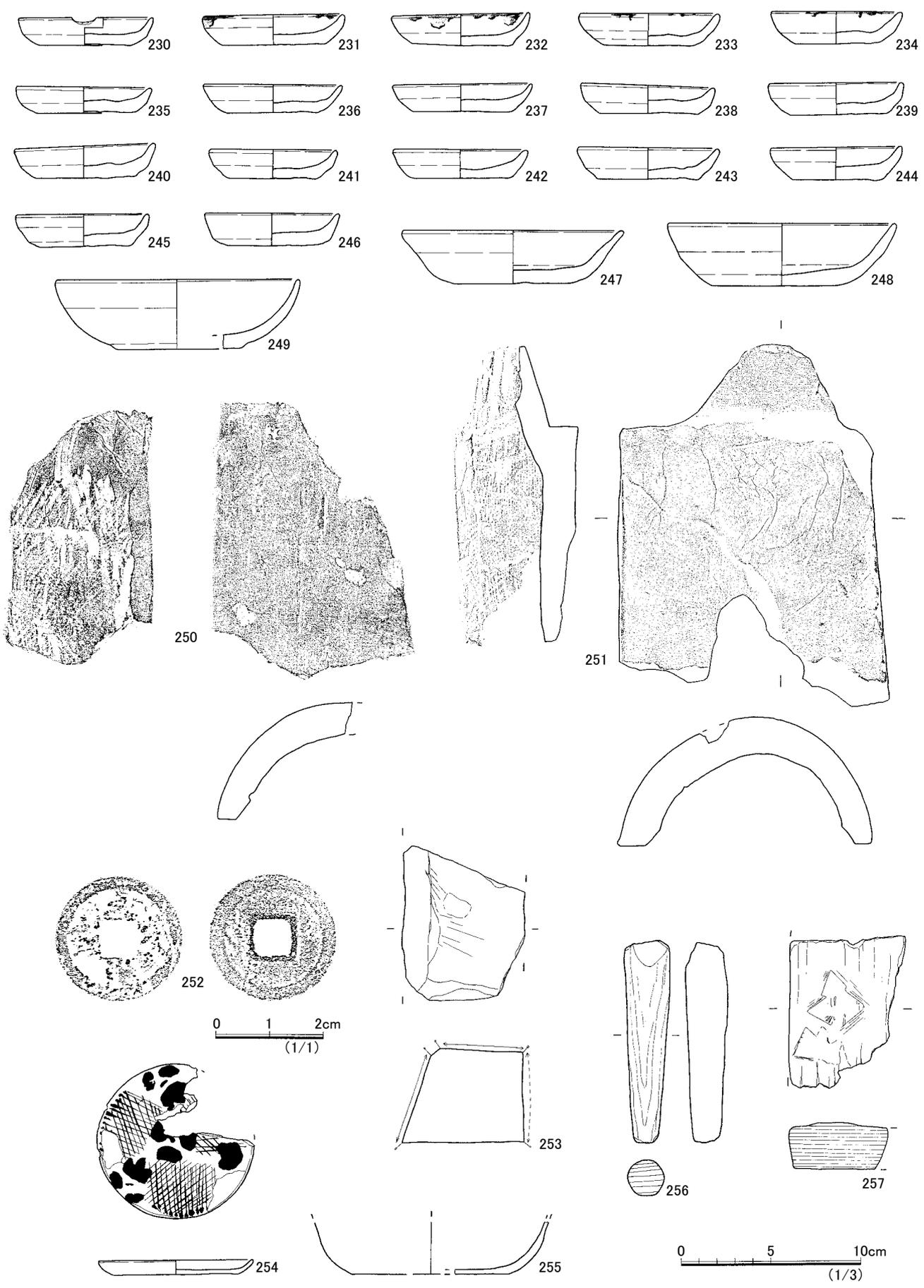


图 22 2 面下炭層 出土遺物

他の小片資料については観察表（表 3）を参照されたい。

2 面下炭層・3 面上出土遺物（図 22・23）

2 面下の炭層中と、3 面直上からの出土遺物を掲図した。出土点数は 2 面下を一括りでカウント・計量している。ロクロかわらけが主体で、瓦や木製品などが少量出土している。ロクロかわらけは小皿に遺存度の良好な資料が多く、完存品をもとに算出した一個体当たりの平均重量は、52 g となる。2 面下から 3 面までの出土かわらけは器形・法量ともに大きな様相差はなく、これら全体での一個体当たりの平均重量は 53g である。ここでの出土量は破片数 189 点で重量 6930 g であることから、小皿は約 131 個体分に相当する。大皿は 3 面上で略完存品が 1 点しており、残存重量は 155 g を測る。2 面下～3 面全体では 635 点で 7869 g が出土しているので、完存資料を 160 g とすると約 49 個体分に換算でき、小皿：大皿の構成比は約 7：3 となる。

230～249 と 258～267 はロクロかわらけ。小皿の口径は 7cm 台が主体で、器高は 2cm 以下と低平で、体部の外面中位に弱い膨らみまたは稜を有する。図示できた個体数は少ないが、大皿の口径は 12cm 台と 13cm 台と二通りに分布するようである。明確な中皿は見て取れず、存在するとしても構成比は低いと考えられる。小皿・大皿ともに底部内面にナデを施し、外底面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例といえる。小・大皿を問わず灯明具として使用されたものも散見された。

図 23 - 269・270 は木製の格子子。凹部同士を縦横に組み合わせて骨組みを作り、これに縦板を貼り合わせた状態で出土している。（図版 3 - 1）。凹部には一ヶ所おきに直径 1mm 程度の貫通孔が見られ、ここで骨組みと板材とを固定していたのであろうが、鉄釘や木釘は遺存していなかった。細縄での固定も推測できようか。

その他の資料については、観察表（表 3）を参照されたい。

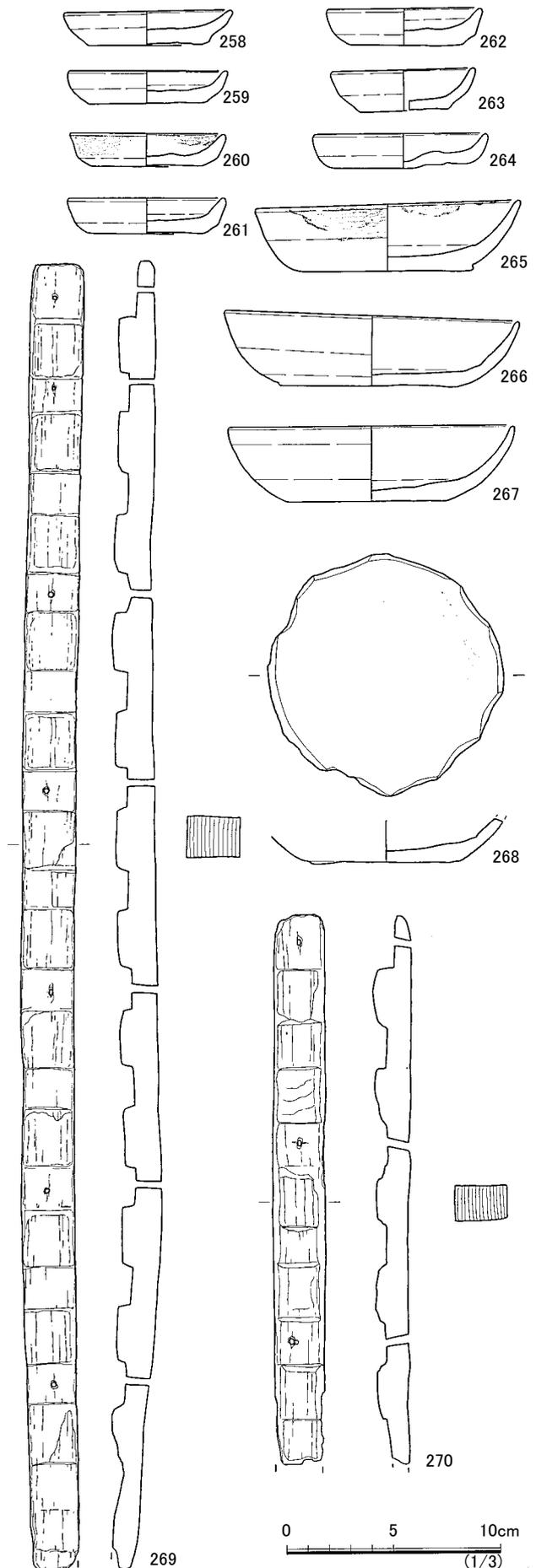


図 23 3 面 出土遺物

3面下出土遺物（図24・25）

3面以下、4面までの掘り下げ時に出土した遺物である。木製品が出土量・遺存度の良好な資料ともに目立ってくる。

271～282はロクロかわらけで、282の中皿以外は全て小皿である。小皿は完存品が277の1点のみで、重量は54gである。小皿は128点、1320gが出土しているので、大よそ24個体分に換算できる。法量・器形および調整技法とも、3面上出土資料との明確な様相差を見出せない。

287は丸瓦の凸面を二次的に加工して箱形の窪みを作り出している。断定はできないが形状から硯として転用された可能性がある。

290～292は漆器の皿。いずれも黒色系漆を下地とし、内面に赤色漆で筆描き文様を施している。290は線描きと周囲の赤色漆塗りで車輪文を描き出している。

293・294は木製品で連歯下駄、295～314は箸。

316以下には3面下でも下層から出土した資料を図示した。316は明確な遺構とはならなかったが、I区の泥岩がややまとまった範囲で出土した。ロクロかわらけの大皿で、器壁が薄く体部の内湾が顕著である。317～326もロクロかわらけで320までが小皿、321・323が中皿で、他は大皿に類別できる。小皿は口径7cm台後半で器高2cm未満の低平な資料が主体となる。中皿と大皿は内湾傾向が強い。大皿の口径は12cm前後にまとまりを持つ。この段階、破片資料であっても薄手丸深系に類別できる資料が比率を増してくる。

328は亀山の甕で胴部の小片。割れ口の数ヶ所を研磨に用いている。

4a面遺構15出土遺物（図26・27）

東西木組み溝の覆土中から出土した遺物である。ロクロかわらけと木製品が主体となる。

335～349はロクロかわらけ。335は極小の内折れ皿、336・337は小皿、338は中皿、他は大皿に類別できる。提示資料は少ないが、小皿は口径7～8cmで器高2cm未満となり、器形の特徴も含めて3面の出土資料と明確な差を見出せない。本遺構では総量220gが出土しているので、一個体50g前後とすると4個体ほどに留まる。大皿は略完存品の341が163gなので、一個体当たり170g前後となろう。総量は1955gなので12個体分に相当する。中皿の数量は不明確だが、小皿：中・大皿の構成比は1：3となる。この他に薄手丸深系に類別できる資料も一定量が出土しており、全体として中・大皿とも体部の内湾する資料が主体となる。大皿は口径12cm台を主体に13cm台の資料も含まれる。底部内面にナデ、外面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す資料が通例である。

350～373は木製品。350は折敷の底板で4/5ほどが残存する。前後二辺に沿って各5穴の貫通孔が開く。また、左右に半切した箇所を樹皮で止め直してあり、別用途かもしれないが破損後に修復を受け、再び使用されたようである。表面には細かい条痕が無数に見て取れることから、俎板としても再利用されたのだろう。

12は一側辺を鋸歯状に切り抜いている。筆置きか。

357～369は箸。370～373は角棒状の製品で、用途は不明。

4b面遺構15b出土遺物（図27）

下層の東西木組み溝覆土中より出土した遺物である。ロクロかわらけと木製品が主体となる。

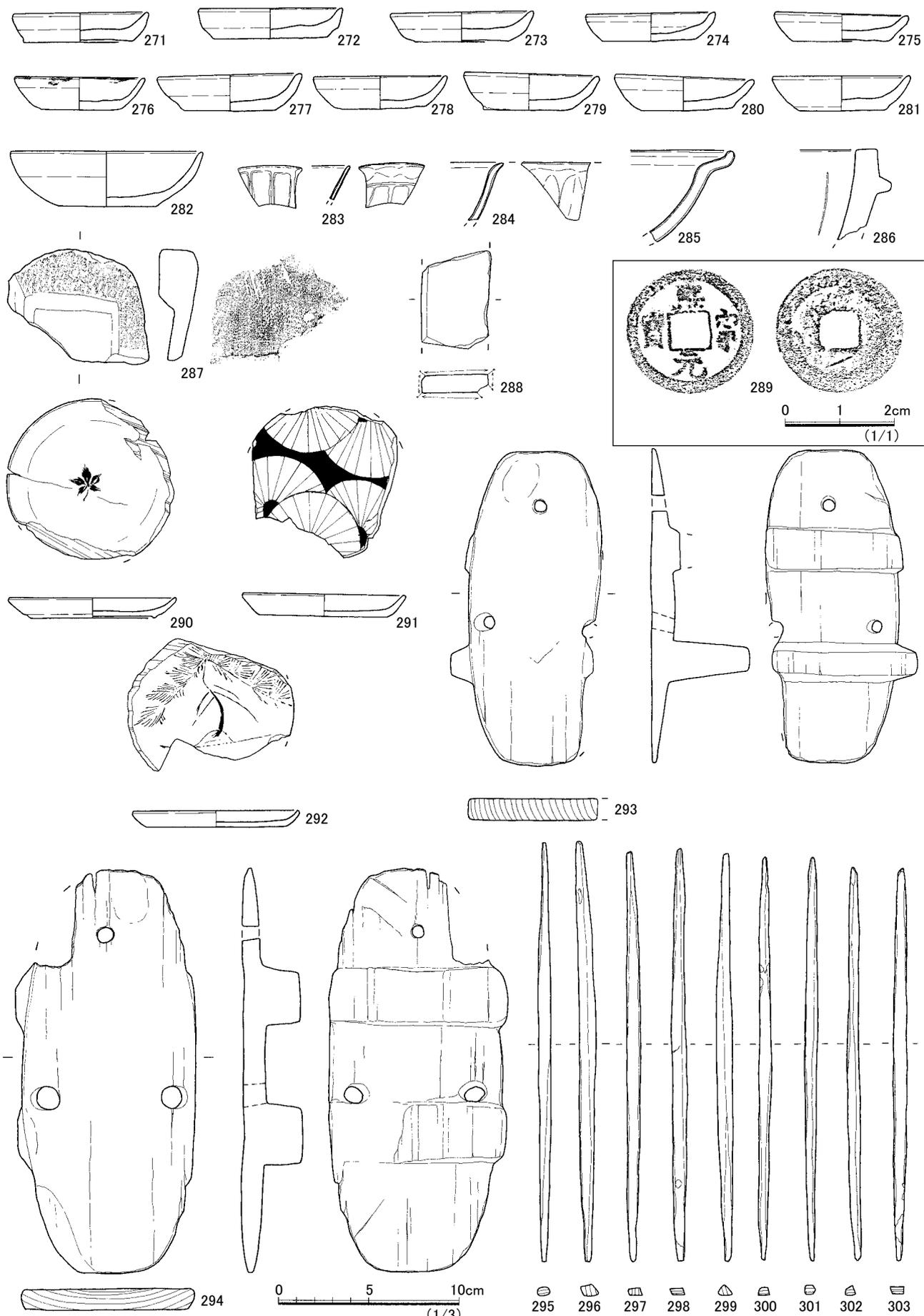


图 24 3面下出土遺物

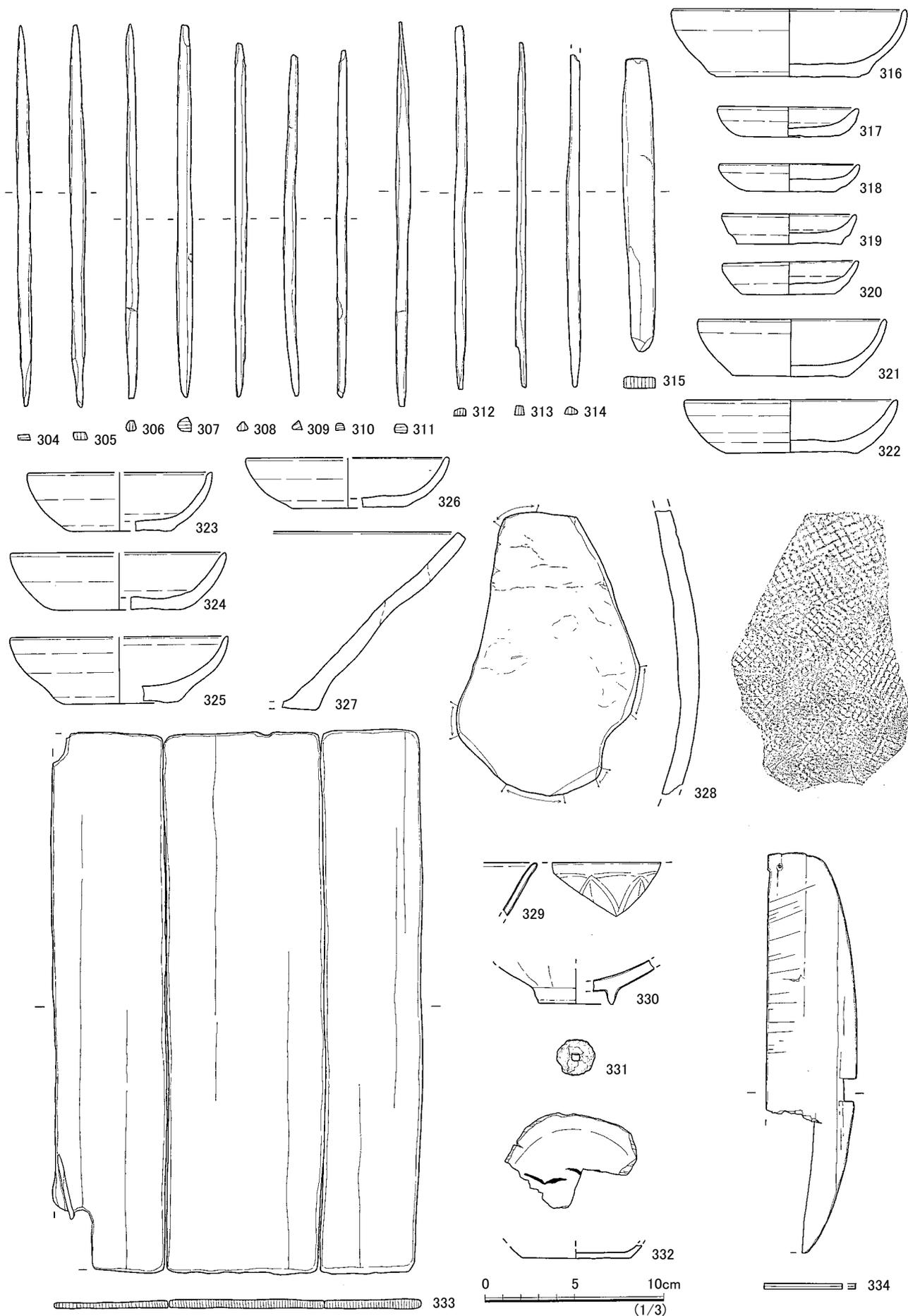


图 25 3面下ほか 出土遺物

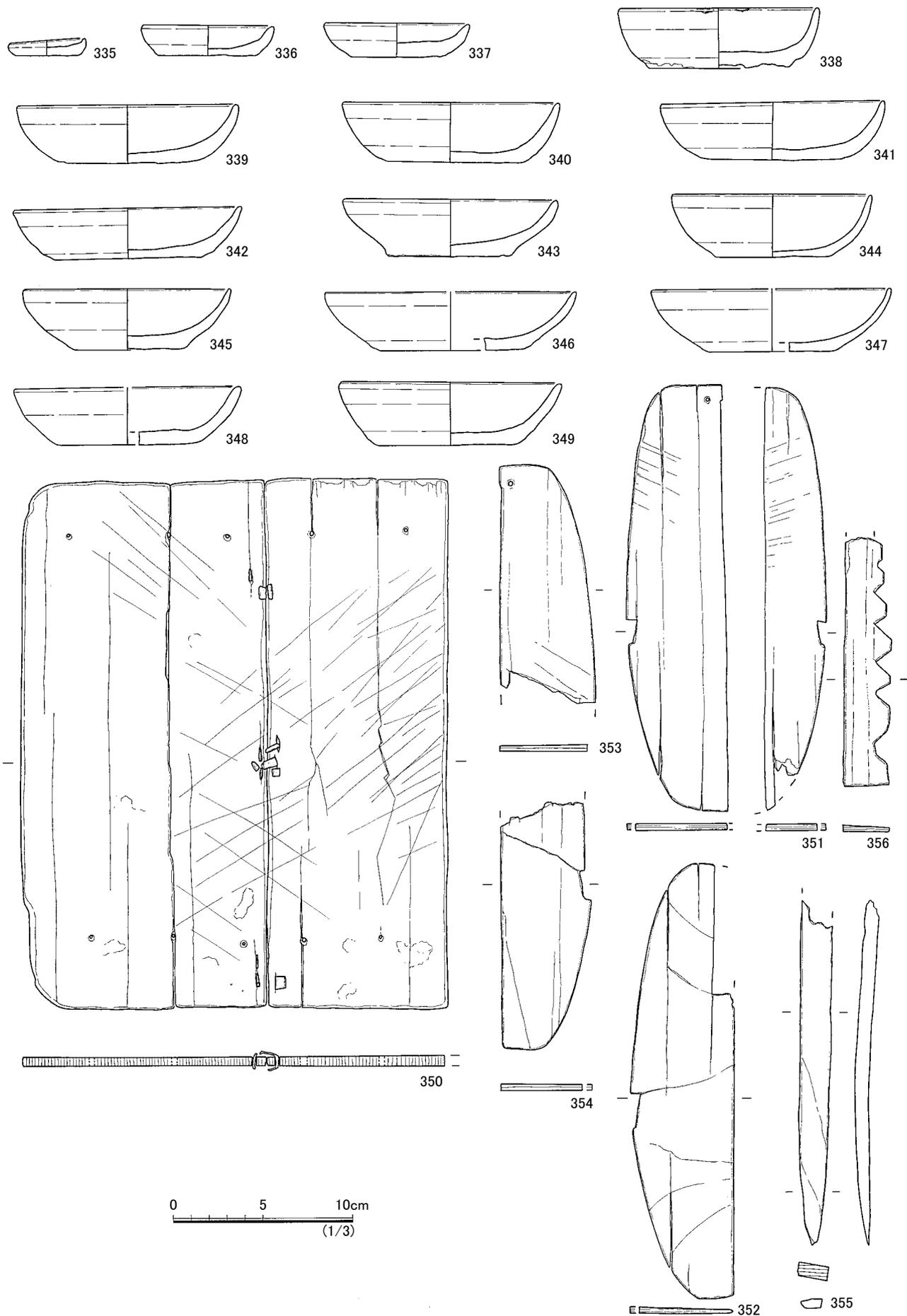


图 26 4a 面 遺構 15 出土遺物

374～378はロクロかわらけ。小皿・大皿ともに法量・器形の上で上層の木組み溝の出土資料と大差ない。完存する資料はなかったが、上層までの資料を参考として一個体当たりの平均重量を小皿50g、大皿170gと規定すると、小皿が4個体前後、大皿が7個体前後に換算できる。

379以下は木製品。385の棒状製品は上下両端付近に貫通孔を一ヶ所ずつ開けている。

4面下・4b面下出土遺物（図28～30）

386のみ4面上の出土で、以下は4面下および4b面下の掘り下げ時に出土した遺物である。5面上には厚い有機質腐植土が堆積していたため、遺存状態の良好な漆器や木製品が多数出土した。

386は木製草履芯の完存品。表面に編み藁の繊維質が僅かに付着する。

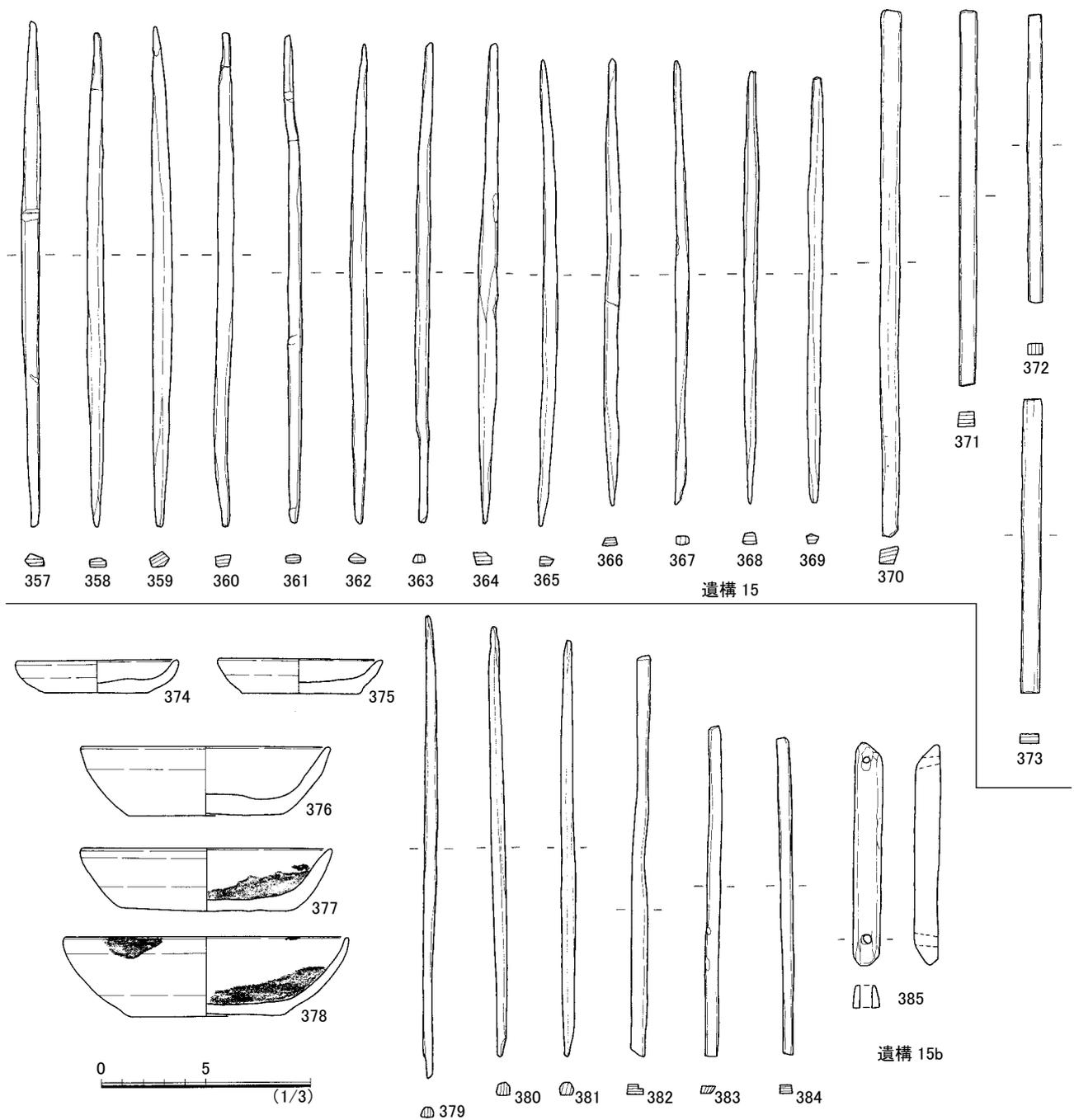


図27 4a面遺構15・4b面遺構15b出土遺物

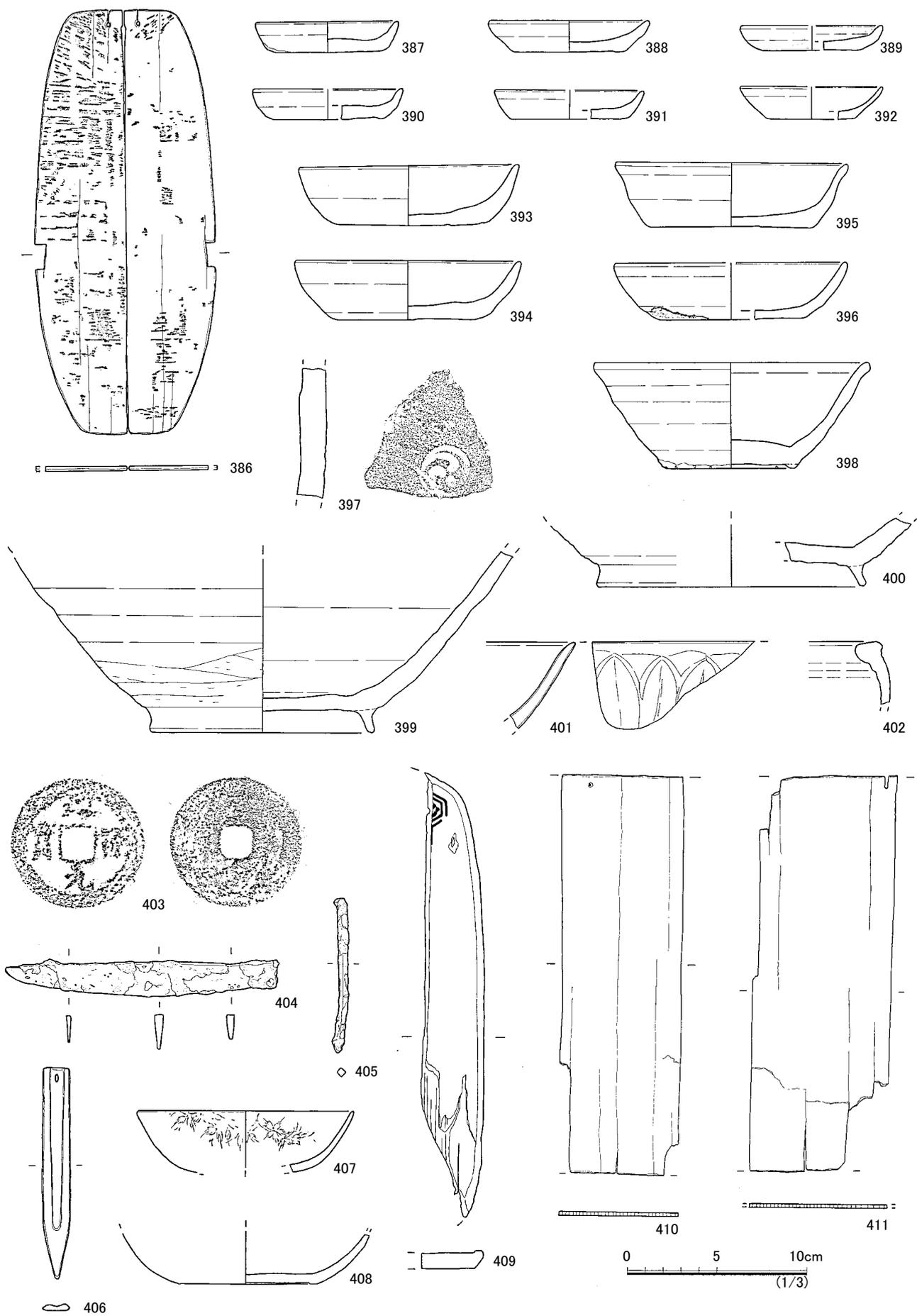


图 28 4 面下 · 4b 面下 出土遗物①

387～396はロクロかわらけ。小皿は口径7cm 台後半～8cm 前後の資料が主体で、体部外面の中位が膨らむものと、直線的に口縁へと至る二通りがある。大皿は口径12cm 台でまつまり、上層の出土資料に比べ体部の内湾傾向が弱い。通常、底部内面のナデと外面の回転糸切り痕・板状圧痕が見て取れる。

397は常滑甕の胴部片。外面に三つ巴文の押印が見える。

398は尾張型山茶碗。内面はコテを当てて整形されたことにより、底部と体部との境が明瞭である。常滑5型式。399・400は常滑の片口鉢I類。

407～409は漆器で、409は盆。ごく部分的な遺存だが、表面に赤色漆で亀甲文のスタンプを捺している。

410以下は木製品。415～436には箸の完存品を中心に示した。他の遺構面から出土した分も含め、箸の計測値は表1に示している。

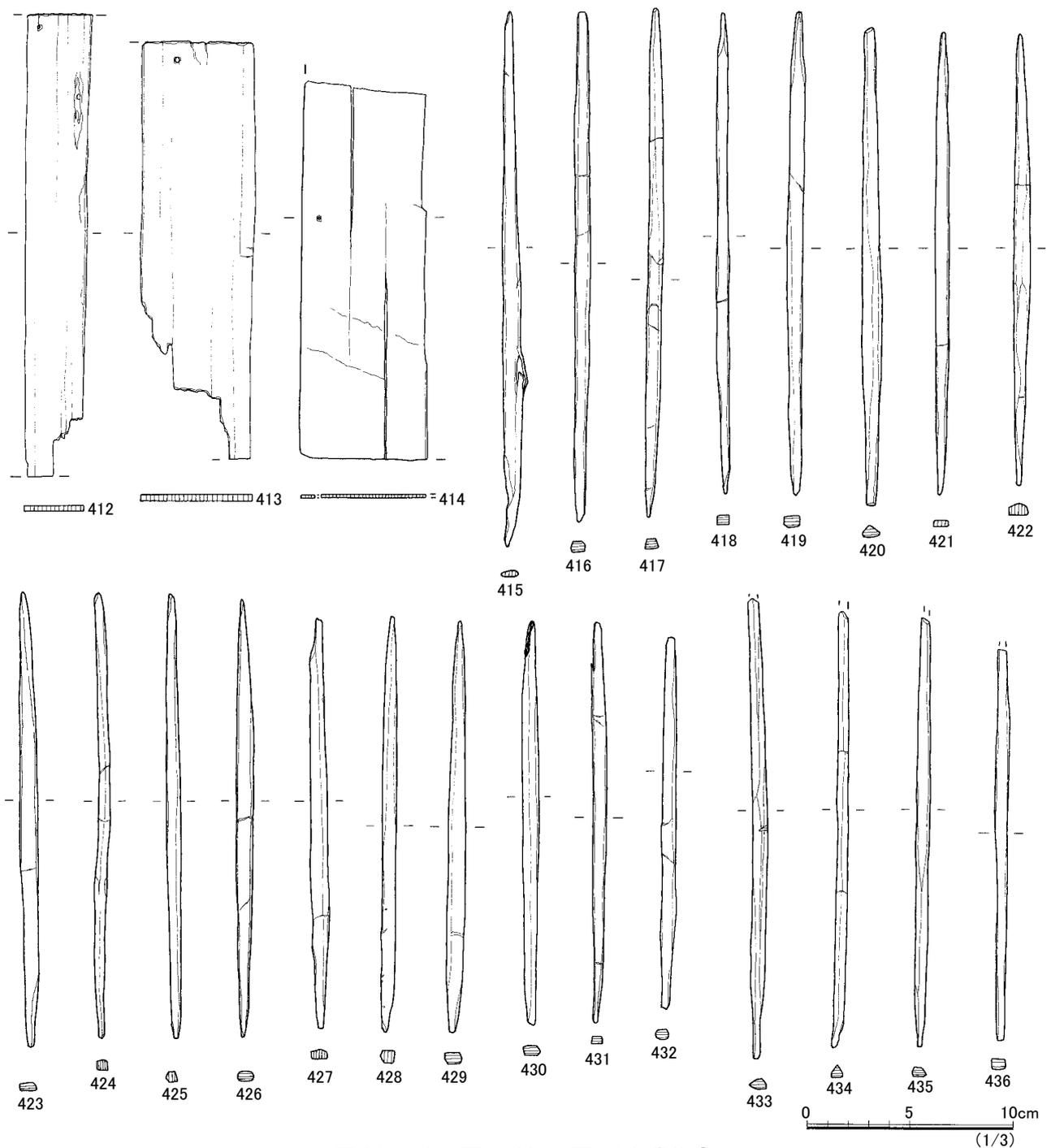


図29 4面下・4b面下 出土遺物②

444 は刀子の鞘。刀身を取める浅い凹部を彫り込んだ2枚の板を貼り合わせて作る。刀身の刃渡りは19cm 前後となろう。

4c 面 遺構 17・4c 面下出土遺物 (図 31)

453 のみ遺構 17 からの出土で、以下は全て 4c 面下から出土した遺物である。

453～457 はロクロかわらけ。個体数は少ないが、小皿・大皿とも上層出土分資料との様相差はない。

459～468 は木製品。466 は織機具の部材である「ツリガマチ」との類似性が指摘される資料である。側面に施された鋸歯状のキザミ目が、自在鉤よりも浅くなっている。

4c 面下 最下層出土遺物 (図 32)

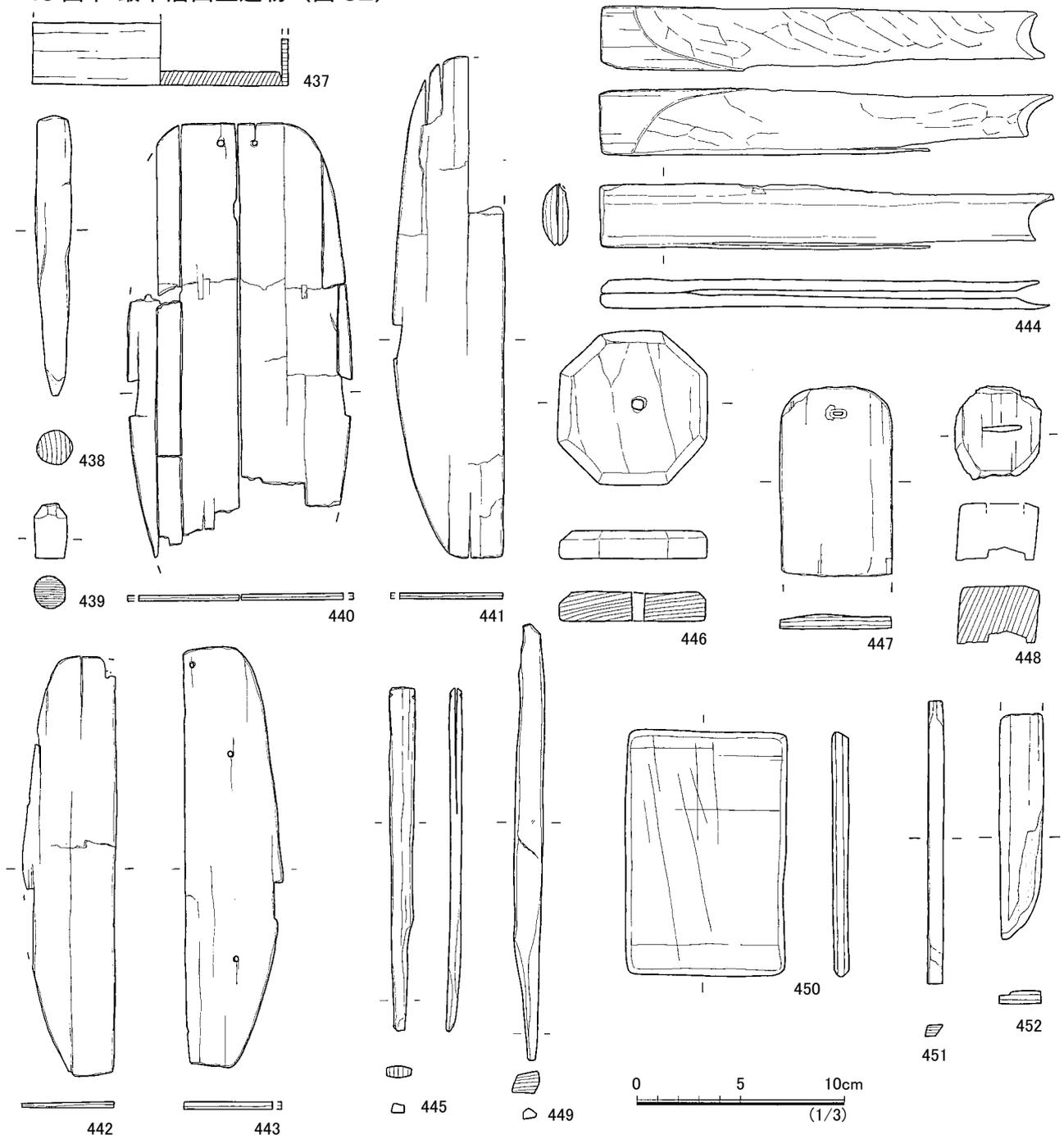


図 30 4 面下・4b 面下 出土遺物③

現地調査では4c面の下に4d面を設定して調査したが、不確実な要素が多いため、本報告では整地面として扱わないことにした。従って、「4d面下」で取り上げた遺物を「4c面下最下層」と呼称を変えて報告する。主体となるのは木製品で、これにロクロかわらけが次ぐ。

469～474はロクロかわらけ。小皿・大皿とも4面下全体の資料と比較して、法量・器形上の様相差はない。

476～487は木製品で、折敷や箸、草履芯などが見られる。

5面 遺構9 出土遺物 (図32)

488はロクロかわらけの中皿。薄手丸深系に類別できる。

489～491は木製品で折敷。489は側板の一部が欠損するが、概ね完形に近い。

5面下出土遺物 (図33～35)

5面～6面で出土した遺物である。出土量としては、ロクロかわらけと常滑甕が多い (表3)。

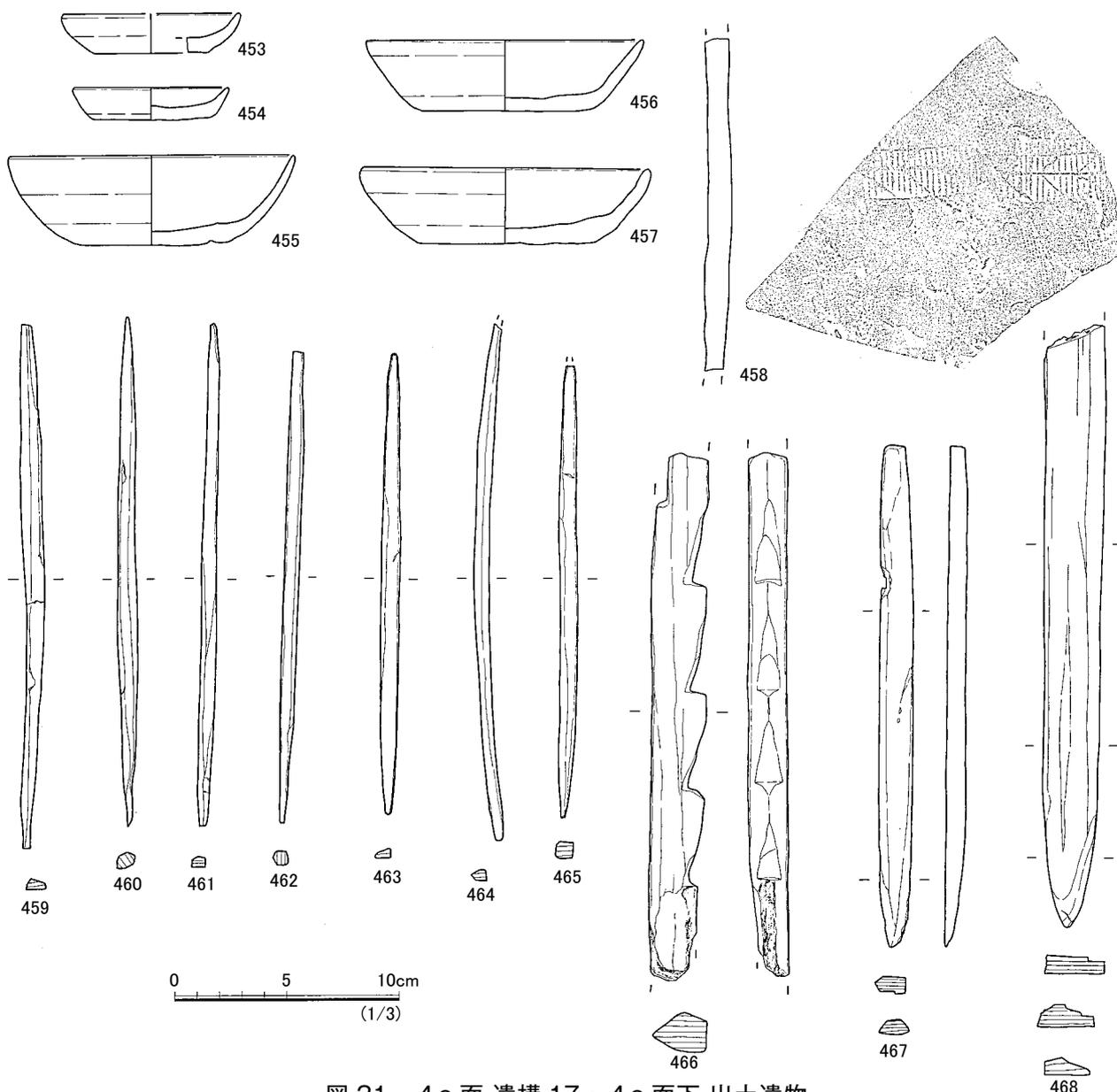
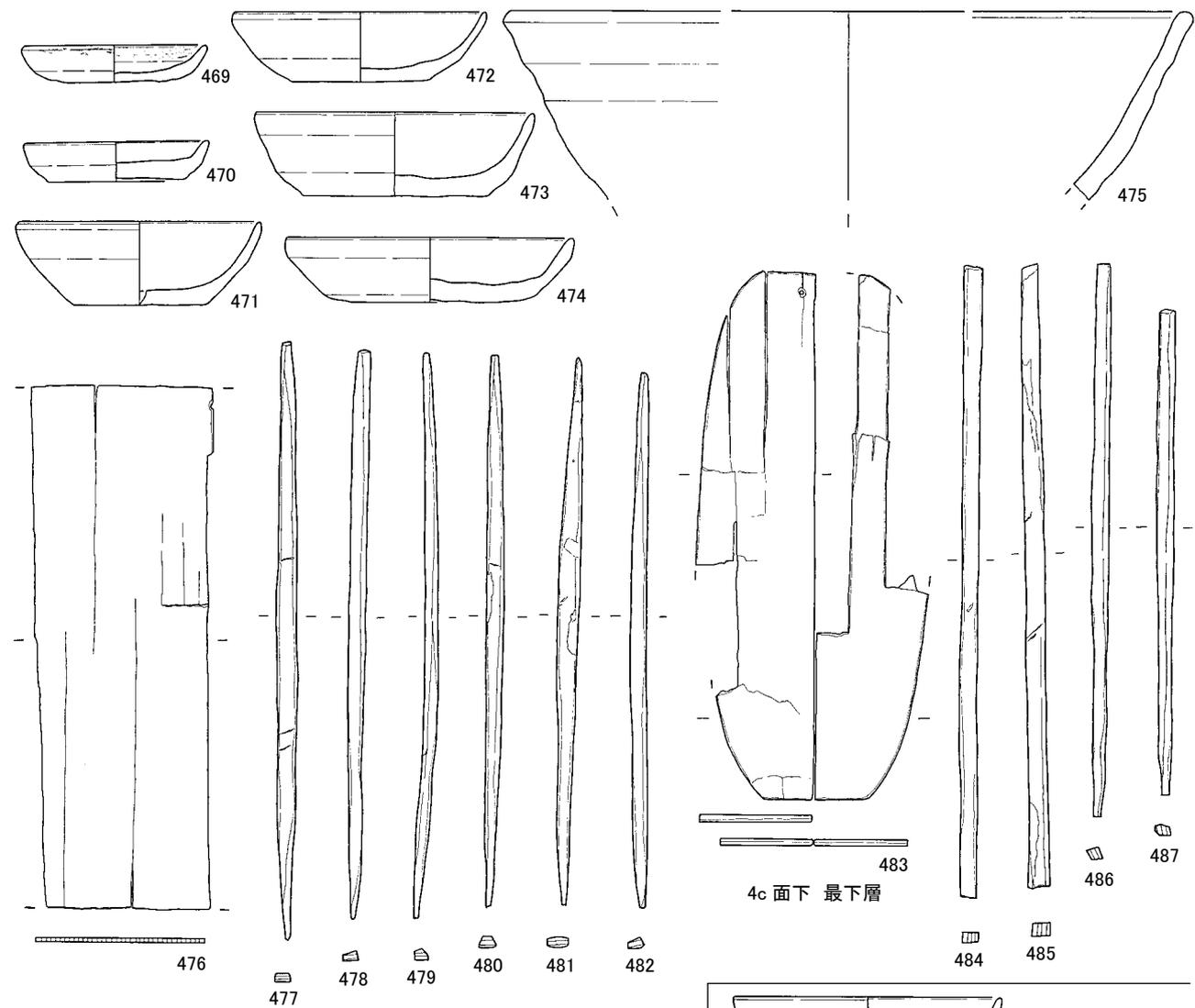


図31 4c面 遺構17・4c面下 出土遺物



5面 遺構9

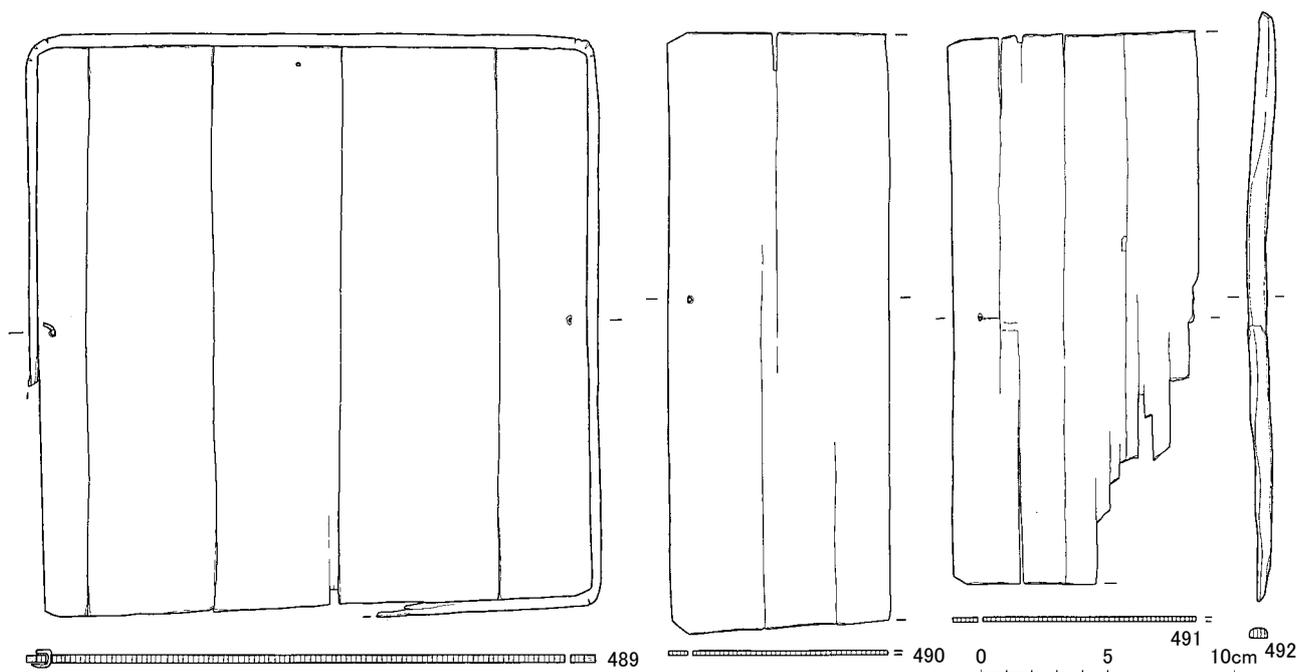


图 32 4d 面下最下層・5面 遺構9 出土遺物

(1/3)

493～499はロクロかわらけ。小皿は口径8cm前後の資料が主体で、底径6.5cm前後と広底の印象を受ける資料も加わる。大皿は器高が3cm前後にまとまり、提示できた資料は少ないながらも低平→身深という器形変遷の流れが垣間見られる。

496のみ完存する資料で、重量は46gを測る。小皿の総重量は435gなので、約9個体分に相当する。

500は手づくねかわらけの大皿。法量は、ロクロかわらけの大皿と近似している。

501はロクロかわらけ大皿で、底部のみを円板状に再加工し、外底面中央に非貫通孔が一ヶ所ある。

507～511は舶載陶磁器。507は青白磁の合子蓋。外面天井部に鳳凰文のレリーフを彫り込んでいる。508も青白磁で梅瓶の底部。

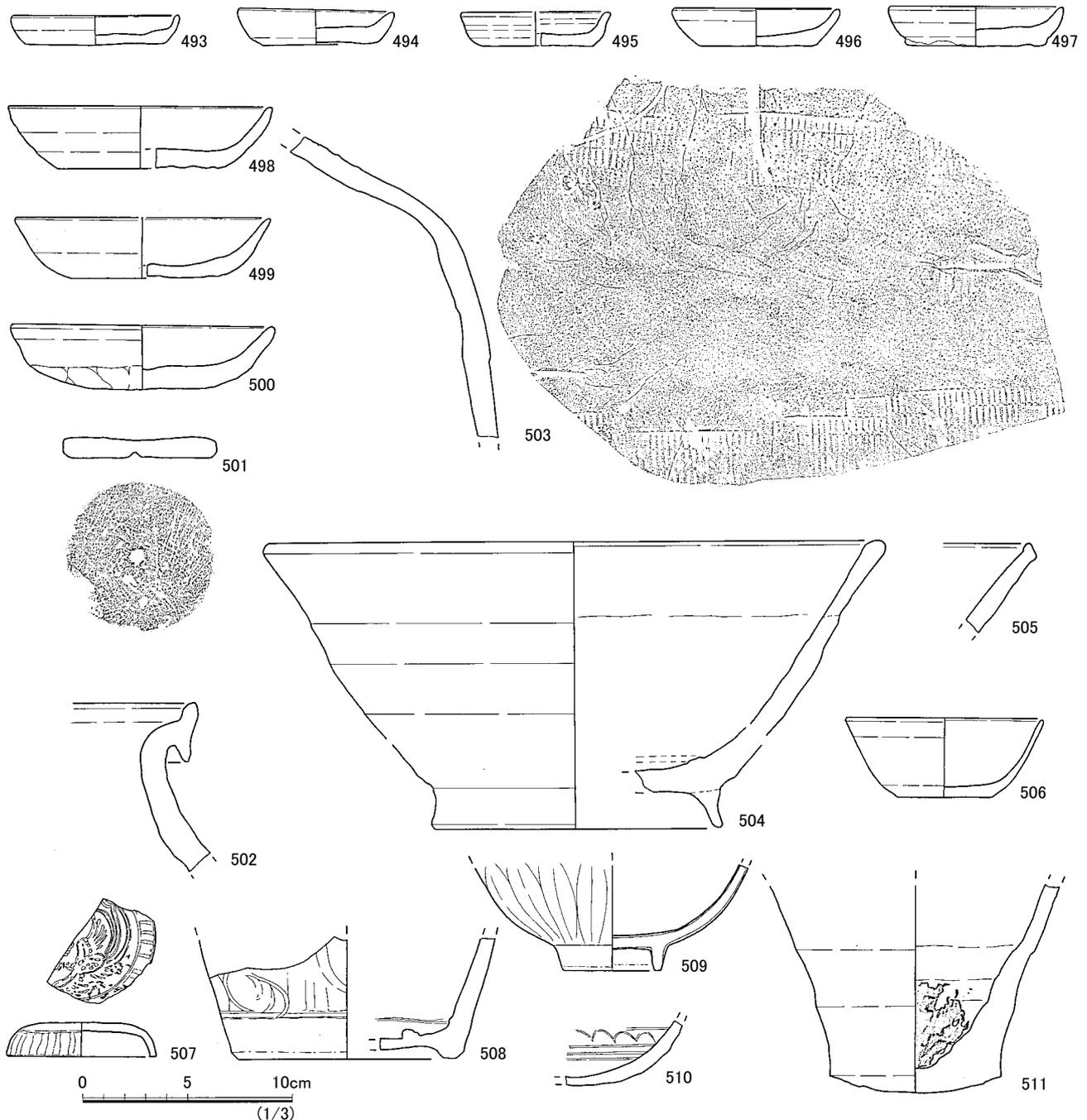


図33 5面下出土遺物①

510 は施釉陶器で二彩盤の底部片。511 も施釉陶器で褐釉壺。胴下部～底部が遺存し、内面は無釉で底部付近に黒色の塗膜（漆か？）が付着する。丸底状を呈し、本来は高台を有していた可能性が高いが、明確な剥落痕は見て取れなかった。5面下においては舶載陶磁器の瓶類や合子といった良品の出土が、破片資料とはいえ目立った印象を持っている。

512・513 は漆器皿。内外面とも黒色系漆で塗られ、無文である。

514～551 は木製品。箸や草履芯などに遺存良好な資料が見られた。540 は蓋（栓）となろう。全面に黒色塗膜（漆か）が見える。541 は半月状の製品で、紡績具の手押木。542・543 は草履芯。

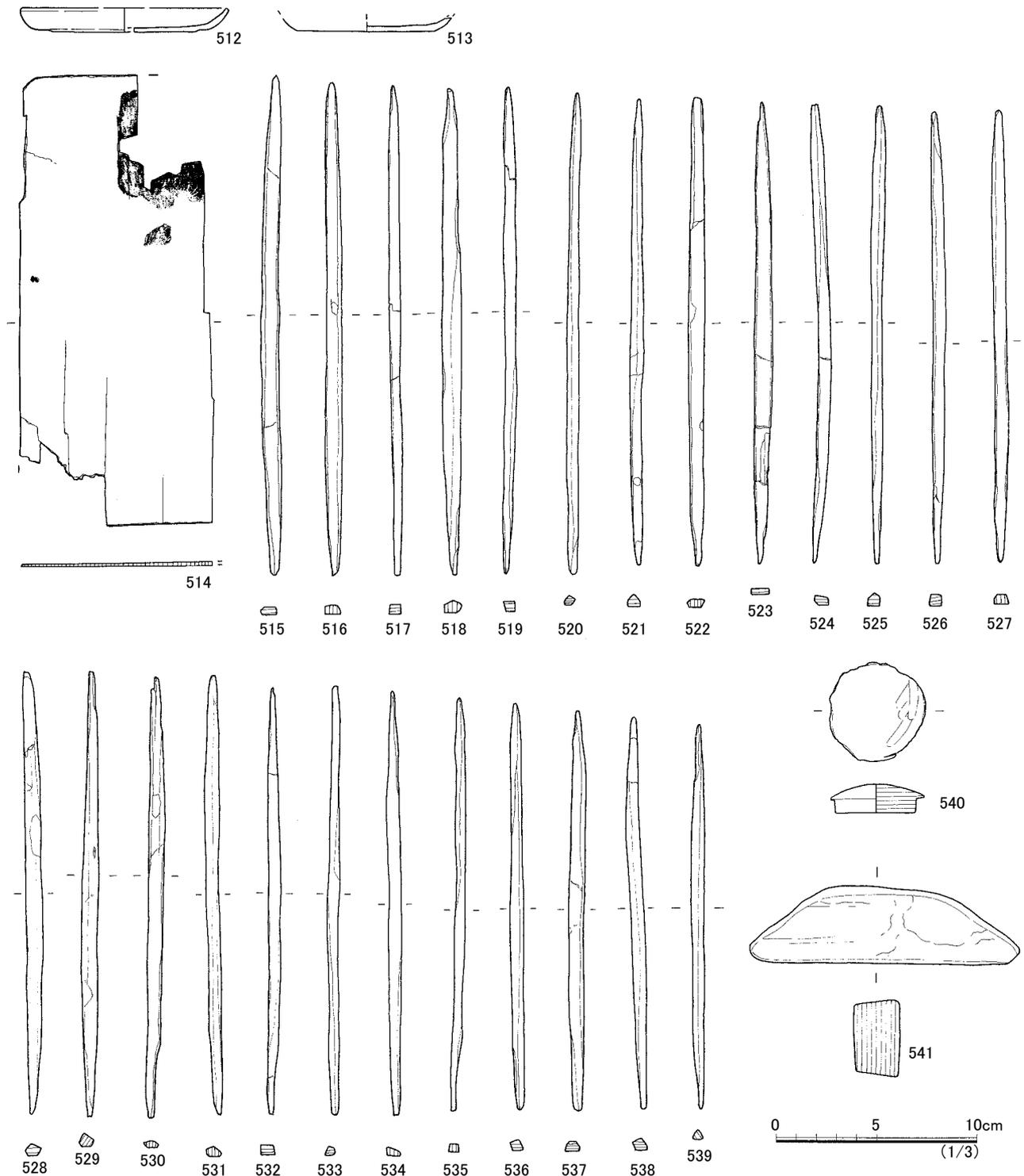


図 34 5面下 出土遺物②

6面下出土遺物 (図 36)

552～558は、6面下から7面までの掘り下げ時に出土した遺物である。この段階、ロクロかわらけが主体となるも手づくねかわらけの出土量が上層までに比べて増してくる。

552～554はロクロかわらけの小皿。図示できた資料数は少ないが、口径が10cm前後の大ぶりの資料も含み、上層での出土例に比べて広底で口縁が短く開く形態を呈する。554は灯明皿の完存品で、重量は64gを測る。これを平均重量とすれば6面下の出土総重量が210gなので、約3個体分に相当する。

555は舶載品の施釉陶器で、盤の口縁部片。

556は鉄製品で刀子。茎の端部付近に柄を固定するための目釘穴が穿たれているものの木質の固着が見られないことから、使用の最終段階には柄を装着していなかった可能性が高い。刃渡り12cm、茎の長さは7.7cmを測る。

557は箱形を呈する軽石製品で、4面に研磨痕を残すことから砥石とした。

558は円板状の木製品。明確な用途は分からないが、紡錘車などの可能性もあるだろう。

7面下出土遺物 (図 36)

559の1点のみを図示した。舶載品の施釉陶器で、二彩盤の底部片。

この段階ではかわらけに占める手づくね成形品の割合が増し、大皿ではロクロ成形品より多い(表 3)。

8面下出土遺物 (図 36)

8面下～9面掘り下げ時の出土遺物として、560～564を掲げた。かわらけでは手づくねの割合が増し、大皿ではロクロ成形品を大幅に上回る量が出土している(表 3)。

560・561は手づくねかわらけの大皿で、ともに口径13.5cm前後を測り、低平な作りである。口縁部は薄くシャープである。

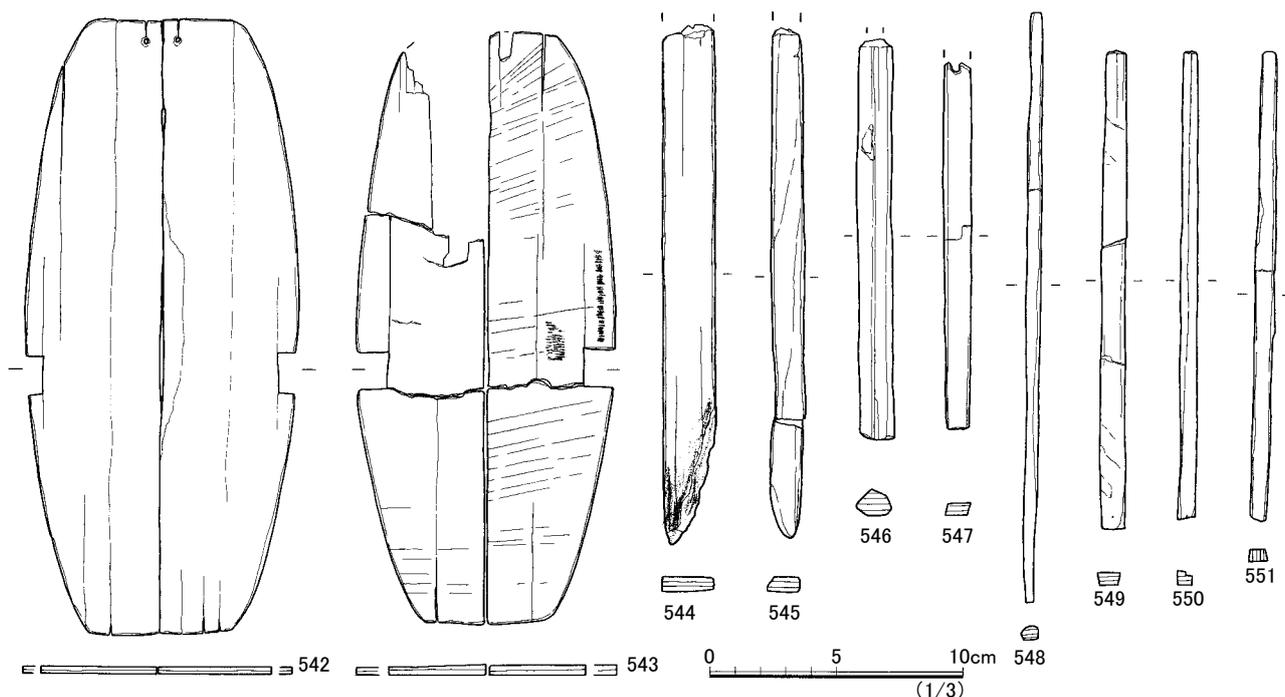


図 35 5面下出土遺物③

562～564 は木製品で、564 は用途不明の板状製品。

9 面下出土遺物 (図 36)

565 として、ロクロかわらけの小皿 1 点を図示した。復元口径が 10.6cm と大ぶりで、広底かつ低平な外観を呈する。内底面にナデ、外底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。

この段階のかわらけは、手づくねとロクロの数量比が小皿で拮抗し、大皿では手づくねがロクロを大きく上回っている。

10 面 遺構 11 出土遺物 (図 36)

566 として、手づくねかわらけの小皿 1 点を図示した。小片のため口径の復元には至らなかった。内底面にナデ調整を施している。

少量ではあるが、かわらけにおける構成比は小皿・大皿とも手づくね成形品がロクロを上回っている (表 3)。

調査区壁 出土遺物 (図 36)

567～570 は I 区調査区壁の断面で出土した。567・568 は 1 面の遺構 1 炭層に、569・570 は 3 面に帰属する。

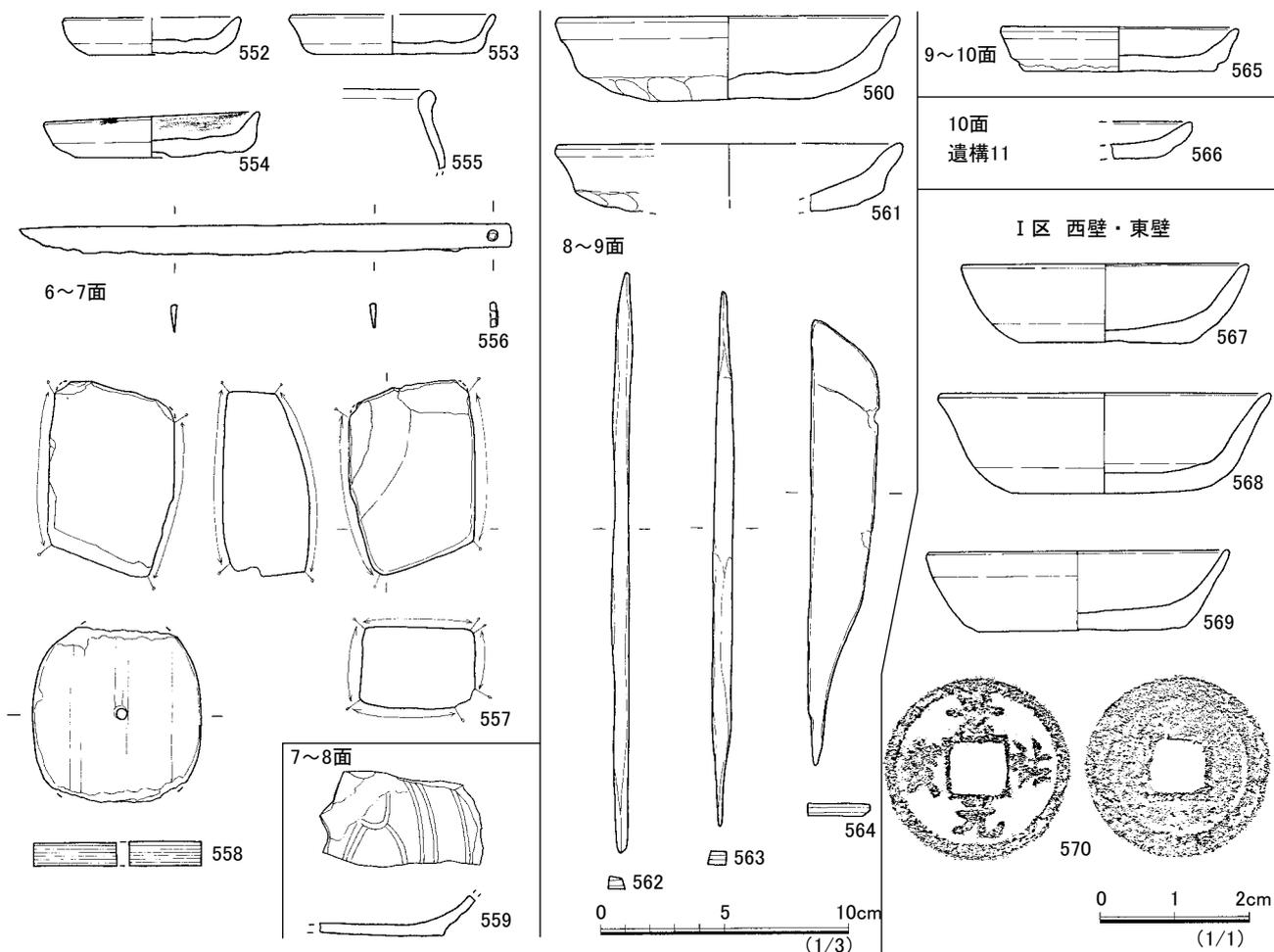


図 36 6 面下～10 面・10 面 遺構 11 出土遺物

表 1 簀計測値分布

全長(cm)	2 面 下		3 面 下		4 面 遺 構 1 5		4 面 下		4 遺 構 1 5 b		4 b 面 下		4 c 面 下		4 c 面 下 層		5 面 遺 構 9		5 面 下			
	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率		
17.6~18.0		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%					0.0%	
18.1~18.5		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
18.6~19.0	1	16.7%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
19.1~19.5	1	16.7%	4	15.4%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%					0.0%	
19.6~20.0		0.0%	4	15.4%	1	33.3%	2	28.6%	1	33.3%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
20.1~20.5	1	16.7%		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%					0.0%	
20.6~21.0		0.0%	2	7.7%	1	3.8%		0.0%	1	33.3%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
21.1~21.5	1	16.7%	2	7.7%	2	7.7%		0.0%		0.0%	2	33.3%	1	33.3%		0.0%					0.0%	
21.6~22.0		0.0%	3	11.5%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
22.1~22.5		0.0%	4	15.4%	2	7.7%	1	14.3%	1	33.3%	1	16.7%		0.0%		0.0%					0.0%	
22.6~23.0	1	16.7%	4	15.4%	8	30.8%		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%	1	14.3%					0.0%	
23.1~23.5		0.0%	2	7.7%	1	3.8%	2	28.6%		0.0%		0.0%	2	28.6%		0.0%	1	100.0%			0.0%	
23.6~24.0		0.0%		0.0%	9	34.6%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	2	28.6%					0.0%	
24.1~24.5	1	16.7%		0.0%	1	3.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	2	28.6%					0.0%	
24.6~25.0		0.0%		0.0%		0.0%	1	14.3%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%					0.0%	
25.1~25.5		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%					0.0%	
25.6~26.0		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	1	16.7%		0.0%		0.0%					0.0%	
小計	6	100.0%	26	100.0%	26	100.0%	7	100.0%	3	100.0%	6	100.0%	7	100.0%	7	100.0%	1	100.0%	44	100.0%	44	100.0%

簀の法量分布 (表 1)

表 1 は各面・遺構から出土した簀のうち、完存品の全長を 5mm 単位の分布域に帰属させたものである。資料数の多い 3 面下と 4 面遺構 15、それに 5 面下とを比較すると、3 面下では全長 19cm 台と 22cm 台に分布のピークがあるのに対し、遺構 15 では 22cm 台後半と 23cm 台後半にピークがあり、遺構 15 の資料が長い傾向を見て取れる。5 面下では全体に広い分布域を見せる中、22.6 ~ 23.5cm に一定のピークを確認できる。佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）では時期が下るにつれて簀の全長が短くなる傾向が指摘されているが、本地点では 3 面下と遺構 15 との間にその傾向が見て取れた。資料数が少ないこともあって明確な時期別偏差を見出すことはできなかったが、土器様相の面でも 5 面から 3 面までの間に顕著な差を見出し難いことから、この間に大きな時間差がなかったであろうことも推測できよう。

第五章 調査成果のまとめ

前章までに、発見された遺構と出土遺物について説明してきた。33㎡と非常に狭い調査範囲であり、安全面への配慮から下層の遺構面ほど調査対象を狭める必要があった。このため、各時期の遺構展開や性格を十分に捉えることができなかった点は残念である。

本章では各遺構面の年代について整理し、近隣での調査内容も参照しながら本成果を補足することにしたい。年代の比定には、各面で数量・遺存状態ともに安定的な出土が見られる「かわらけ」の器形と組成の変化を主たる指標とした。鎌倉のかわらけ年代観に関しては研究者間に見解の相違があることが指摘されて久しい(永田 2014)。新出資料の蓄積に伴う検証が進められるとともに、共通認識の形成が図られることを期待したい。筆者には各々の所見について是非を論じるだけの知識はないが、ここでは宗臺秀明氏の編年案(宗臺 2005)をベースに年代観の提示を行う。

1面では、炭層の落ち込み(遺構 1)とかわらけ集積土坑 1 基(遺構 13)が検出され、切り合いでは後者が新しい。遺構 13 の出土かわらけは全てロクロ成形品で、口縁が外方へ直線的に開き、大・小を中心に中型品も少量含まれる。全体に身深の側面観を呈し、大・中皿の内面は底部～体部の立ち上がりが明瞭である。宗臺編年第Ⅷ期、15 世紀中葉に位置付けられる。遺構 1 の出土かわらけも全てロクロ成形で、遺構 13 の資料と比べて大・小皿とも器高が 5mm ほど低く、大皿では口径 12cm 台と 14cm 台を中心とする二群が見られた。概ね外傾基調の器形であるが、小皿には体部に丸みを帯びる資料も一定量含まれていた。宗臺第Ⅶ期と同時期、ないしは後出的特徴を持つ資料が混在していると考えられるので、15 世紀前半という年代幅を当てておきたい。

これら 15 世紀代の遺物に関して、大倉～浄明寺地区での出土は市内の他地区に比べて質・量ともに豊富であり、図 1 - 地点 c では遺物組成も含め寺社関連と目される 14 世紀末～15 世紀代の礎石建物が 3 棟検出されている(原・須佐 2002)。当地区でのこうした在り方が偶々後世の削平を免れたためか、或いは鎌倉での人的活動・土地利用が一定の地区に集約されるたことによるものなのか、資料の増加に合わせた考察が必要であろう。

2面では土坑(遺構 14)で完形を含むかわらけが一定量出土しており、やはりロクロ成形品で占められる。1面出土資料と比較して薄作りで器形に丸みがあり、小皿は器高 2cm 未満の低平な一群が中心となる。器形変化が少ない段階であり年代特定は難しいが、下層資料との連続性を考慮すれば宗臺第Ⅴ期後半～第Ⅵ期、14 世紀後半頃の年代が与えられようか。

3面直上と面上炭層で出土したかわらけも、ロクロ成形品で占められる。小皿には深身の資料が殆どなく、広底で体部～口縁が短く開くものが主体となる。大皿は丸みがある深身の器形で、面直上の資料が僅かに大ぶりである。下層での遺物様相も考慮し、宗臺第Ⅴ期のうち 14 世紀前半頃の年代を当てておきたい。囲炉裏を設けた 3 面建物が焼失した後、2面までの堆積層は 30～60cm と厚く何らかの土地利用の転換があったことが推察される。出土土器の年代観からは、幕府滅亡がその一因にあった可能性も指摘できよう。

3面下から 4面下までは土器様相が目立った変化は窺えず、かわらけはロクロ成形品で占められる。大皿は身深で内湾気味のものと、やや広底で低平な一群とに分けられる。手づくねを含まない状況から、宗臺第Ⅴ期のうち 13 世紀後葉を当てておく。4面は堆積状況から 3 時期に細分でき、東西木組み溝が二段階に亘って構築されていた。各期の面構成土は有機質腐植土が主体で、3

面や5面ほど堅固な泥岩整地層は確認できなかった。このことから、比較的短期間で乱雑な整地や溝の造り替えが繰り返された状況も推察できる。

5面では遺存度の良かわらけがなかった。5面下でもかわらけの殆どをロクロ成形品が占めることから、宗臺第Ⅳ期～第Ⅴ期、13世紀中葉～後半に当てておく。

6面以下は調査範囲が狭まったこともあり出土遺物が僅少で、図示できた資料は極端に少なかった。以下は各面構成土からの出土かわらけを基に年代比定を試みるので、当然これに覆われた遺構面の下限年代を示すことになる。

6面下で図示したかわらけはロクロ成形の小皿のみで、広底で体部～口縁部が短く開く。破片数では手づくねかわらけが上層よりも僅かに目立っていることから、この頃が同類の最終段階となる可能性も考えられる。宗臺編年では第Ⅴ期の1280年頃に手づくねかわらけの終焉時期を想定しているが、上層の年代観も鑑みて宗臺第Ⅳ期、13世紀中葉を当てておく。

7面下で図示できたかわらけはなかった。破片数・重量ではロクロと手づくねが拮抗してくるので、概ね宗臺第Ⅳ期、13世紀前半（第2四半期頃）～中葉と捉えておく。

8面下では、大皿において手づくねかわらけがロクロかわらけの破片数を大きく上回る。実測できた手づくね成形の大皿2点は器壁が厚手化しているものの、後続する身深の資料より低平で口径も一回り大きい。ただ宗臺第Ⅲ期まで遡らせるのは難しいので、これも第Ⅳ期、13世紀第2四半期頃の所産と考えておきたい。

9面下でも手づくねかわらけがロクロ成形品の破片数を上回る。図示できたのはロクロかわらけ小皿1点のみであり、広底で低平な側面観を呈する。単体での年代比定は難しいが、上・下層の状況も勘案して13世紀前葉の所産と考えておく。

10面では大型の土坑である遺構11で少量のかわらけが出土しており、破片数はロクロより手づくね成形品が多数を占める。図示したのは手づくねの小皿1点のみで、小片のため径復元はできなかった。従って年代比定も曖昧にせざるを得ないが、鎌倉時代でも初期段階に近いと考えられることから、宗臺第Ⅱ～Ⅲ期、12世紀末～13世紀前葉の所産と考えておく。

10面下は中世基盤層である黒褐色粘質土が堆積し、層中からは古代の土師器片が少量出土したのみである。12世紀後葉以前と見なせる。

以上、土器様相からは9面以下を13世紀第1四半期の**大倉御所時代**と考えたが、泥岩塊を多用する7面より以下の整地面を大倉御所の存続期間に当てる見方も可能であるかもしれない。

大掘みではあるが、6面から3面までが13世紀中葉～14世紀前半の鎌倉時代後期に相当すると考えられる。この各段階では東西木組み溝や礎板持ちの柱穴、杭列、囲炉裏などの遺構が検出された。4面構成土は泥岩ではなく有機質腐植土が主体であり、こうした状況からは整然とした土地造成の上に堅牢な建物を構築したとは考えにくい。東に接する**図1-地点15・16**でも概ね同様の整地状況と遺構展開が窺えるが、14世紀初頭～前半の遺構面では凝灰岩切石を積み並べた方形基壇状遺構や裏込めに切石を積み上げた井戸が検出されるなど（滝澤・宮田2013a・b）、当地の居住者は一定の経済力を保有していたことも想定できる。**地点16**では、標高12.4m付近の第3面で掘立柱建物や木組み溝が検出され、この廃絶後に炭層が堆積している状況から本地点の第3面と同一遺構面と考えられる。この上位に大型泥岩塊による厚い整地層（1・2面）が形成される点も共通しており、3面から2面にかけての土地利用形態が転換した様子が推察される。

このように、御所移転後の当地域は武家屋敷や寺院としてではなく庶民居住区として雑多な賑わいを見せていたと考えられ、概ね周辺での調査成果を追認・補強する成果となった。【参考文献は280頁を参照】

表2 出土遺物カウント表

種別・産地 器種	手 かわく わらね かけ		ロ かわら かけ				渥 美		尾 張 常 滑									
	小	大	小	大	薄・丸 小系	薄・丸 大系	極小	片口鉢	片口鉢	片口類鉢	片口類鉢	甕	甕	壺				
面・層位	点数 重量																	
～1面				75 545									8 270					
				52 496									1 30					
			53 550	98 725									8 375					
1a面			2 15	9 45			3 45						5 1595					
			87 1010	1221 22460			4 45						9 360					
			86 780	372 3055			1 30						7 250					
1a～1b面			46 450	576 4370			3 50						1 65	1 45	14 920			
			373 4892	635 13580									2 95	2 150	9 650			
1b面			1 10	229 2615											1 20			
1b～2面			465 4595	2303 29935			5 110	1 5	1 35				5 150	12 805	95 5480			
			2 55	7 430														
2面			162 2560	154 2945			2 40											
			2 20	189 6930	635 7869		13 110						7 560	2 160	30 2495			
2～3面																		
				3 10														
3面				3 20														
			7 315	7 750	1 10										1 50			
3c面				1 10											5 420			
3～4面			1 10	128 1320	285 3130	8 65	69 720						1 25	11 685	4 450	29 2125	1 20	
			14 220	64 1955			17 360	1 15						3 135				
4面			12 185	73 1145	1 10	59 530								1 10		4 210		
			4 65	17 100		5 30								4 205		2 30		
4b面																		
4c面			2 25															
4～5面			1 10	2 25	106 995	276 4200	2 10	32 505					1 35	1 215	17 1320	2 95	37 1900	
					1 10		1 40										2 110	
5面			2 15	2 160	37 435	119 1485		2 25					1 50		5 595	1 40	156 9010	
5～6面			2 10	15 125	21 210	67 745		1 10					1 2035		2 165	1 70	9 720	
6～7面			4 25	7 65	10 65	1 10											1 65	
7～8面			3 30	94 805	3 30	9 60												
8～9面			9 45	28 250	5 65	2 25											1 50	
9～10面			12 50	14 80	3 5	1 10											2 100	
10面																		
10面下																		
不明			15 220	220 3125													6 385	1 15

種別・產地 器種	土器		瓦器		瓦質土器		瓦				青白磁			白磁	
	黒縁碗	火鉢	碗	火鉢	風炉	軒平瓦	平瓦	丸瓦	不明	合子蓋	梅瓶	瓶	口元皿	碗	不明
出土遺構				2 115									1 5		
試掘坑				2 115									1 5		
試掘6層															
遺構12															
遺構13				1 95			2 65								
攪乱				1 90											
1a~1b面				5 200			1 10	1 145					1 5		
1b面				2 85	1 20		1 60	1 220			3 20				
遺構外				1 15											
1b~2面	1 20			25 1345		1 340	19 1830	4 475			3 50	1 10	1 5		1 5
遺構2															
遺構14				1 30											
2~3面				5 115				5 1835			1 10			1 3	
遺構4															
遺構5															
遺構外															
遺構7															
3~4面				1 70			1 85		2 95					2 13	1 5
遺構15															
遺構15b				1 85					1 45						
遺構16															
遺構17															
4~5面	1 5		1 10	4 415			1 100				1 5				
遺構9															
5~6面				2 265						1 15	2 65				
6~7面															
7~8面	1 5														
8~9面															
9~10面															
遺構11															
10面下															
地山															
不明											1 5				
帰属不明															

種別・產地 器種	龍泉青窯磁系				彩施釉種陶器			不明	鐵製品		銅製品
	蓮弁文碗	碗	折緣皿	皿	天目碗	盤	壺		刀子	釘	
面・層位											
出土遺構											
試掘坑											
試掘6層											
1a面											
遺構12											
遺構13											1 5
攪乱											
1a~1b面			2 30								
遺構1	3 25		1 60		1 20		1 5				1 5
遺構外											
1b~2面	4 25	1 10	2 15			1 15	1 15		3 20		
2面											
遺構2											1 5
遺構14	1 5								1 5		
2~3面	4 60	1 10				1 5					1 2
遺構4											
遺構5											
3面											
遺構外	1 5										1 2
3c面											
遺構7											
3~4面	4 55		3 90				1 10	10 490			2 6
4面											
遺構15											
遺構15b											
4b面	1 25										
遺構16											
4c面											
遺構17											
4~5面	4 55		1 10			1 25	2 50		1 35	1 10	1 15
5面											
遺構9											
5~6面	2 80	1 10		1 5		1 55	6 1545				
6~7面						1 10			1 30	1 15	
7~8面						1 10					
8~9面											
9~10面											
10面											
遺構11											
10面下											
地山											
不明											
帰属不明											

種別・產地 器種	石製品							石			骨製品	漆器	土師器			須惠器	
	滑石鍋	砥石	硯	基石	紡錘車	火打石	加工石	輕石	頁岩	筭			蓋	相 模 型	相 模 型		壺？
出土遺構																	
試掘坑																	
試掘6層														1	10		
遺構12																	
遺構13																	
攪乱																	
1a面																	
1a~1b面		3	40														
1b面																	
遺構1														1	15		1
遺構外														1	15		10
1b~2面	1	10	2	20	1	5	1	25	1	10	1	170	1	55			1
2面			1	15	1	5											
遺構2																	
遺構14			2	555	1	70										1	5
2~3面																	
遺構4																	
遺構5																	
遺構外																	
遺構7																	
3~4面	1	75	1	35								1	90				
遺構15																	
遺構15b																	
遺構16																	
遺構17																	
4~5面		1	5							1	5						
遺構9																	
5~6面	4	395															
遺構9																	
6~7面	1	155	2	115													
7~8面																	
8~9面																	
9~10面	1	70															
遺構11																	
10面下																	
地山																	
不明																	
帰属不明																	

表3 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
I面 遺構13 出土遺物(図16)						
1	瓦質土器	火鉢	—	—	[4.2]	口小片 胎土:白色粒・雲母・泥岩粒 色調:灰橙色 備考:口縁内面に突起あり。口縁部煤付着
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	3.5	2.5	略完形 [52]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	3.8	2.6	略完形 [43]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
4	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	3.8	2.4	略完形 [42]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2 ~6.8	4.8 ~4.3	2.7	略完形 [47]g 胎土:雲母・白色針上物質 色調:橙色 備考:上面観楕円状に歪む
6	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.0	2.7	略完形 [41]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	3.8	2.7	略完形 [34]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
8	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.2	2.5	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.0	2.9	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	5.0	2.6	4/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
11	土器	ロクロ かわらけ・小	—	4.2	[2.8]	略完形 [45]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(6.0)	3.5	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	(5.5)	3.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.4)	3.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
15	土器	ロクロ かわらけ・中	11.1	5.7	3.9	略完形 [162]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.0)	3.5	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
17	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.0	4.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
18	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.5	4.2	完形 209g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
19	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.6	3.8	略完形 [212.5]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
20	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.5	4.0	完形 194.9g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:橙色 備考:内底面渦巻状の痕 (ナデが弱い?)
21	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.9	4.5	略完形 [192]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
22	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(8.0)	4.0	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
23	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.2)	4.0	3/4 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
24	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	(6.8)	4.3	略完形 [213]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
25	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.6	4.2	略完形 [222]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
26	土器	ロクロ かわらけ・大	13.7	8.4	4.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
27	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	7.1	4.0	完形 211.4g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
28	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.5	4.1	略完形 [207]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
29	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.0)	4.0	1/2 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
30	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	8.1	4.1	略完形 [184.4]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
31	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(7.4)	4.1	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
32	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	7.5	4.3	略完形 [217]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
33	土器	ロクロ かわらけ・大	13.4	8.4	4.4	略完形 [229]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
1面 遺構1 出土遺物①(図17)						
34	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.4	1.8	完形 59g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
35	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	3.9	2.2	完形 42g 胎土:雲母 色調:黄橙色
36	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	2.6	略完形 [48]g 胎土:雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
37	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.2	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
38	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.0	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
39	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8 ~7.4	4.5 ~5.2	2.9	完形 50g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:楕円状に歪む
40	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6 ~7.0	4.5 ~5.8	2.4	略完形 [41]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:楕円状に歪む
41	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.9	2.3	完形 51g 胎土:雲母 色調:黄橙色
42	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.2	2.3	完形 43g 胎土:雲母 色調:橙色
43	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.1	2.4	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
44	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	3.8	2.1	完形 46g 胎土:雲母 色調:黄橙色
45	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.7	2.2	略完形 [60]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
46	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(6.8)	[2.1]	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
47	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.2	2.0	完形 44g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
48	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	4.6	1.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
49	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.4	略完形 [48]g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
50	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.2	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
51	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	[2.1]	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
52	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.1	2.4	3/5 色調:黄橙色
53	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	4.2	2.1	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
54	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	3.2	2.4	略完形 [51]g 色調:黄橙色
55	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.4	2.2	略完形 [46]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
56	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	3.8	2.3	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
57	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.1	略完形 [44]g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
58	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.9	略完形 [58]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
59	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	3.8	2.5	完形 39g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
60	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.7	2.6	完形 58g 胎土:雲母 色調:黄橙色
61	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.2	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
62	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.6	2.0	完形 43g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
63	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.5	完形 71g 胎土:雲母 色調:黄灰色
64	土器	ロクロ かわらけ・小	6.1 ~6.5	4.3	1.9	完形 35g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
65	土器	ロクロ かわらけ・小	6.5	4.7	2.1	完形 44g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
66	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.0	2.1	完形 44g 胎土:雲母 色調:黄橙色
67	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.5	2.3	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
68	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	9.1	2.4	略完形 [64]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
69	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(4.2)	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
70	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.7	2.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄灰色
71	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.1	2.6	略完形 [26]g 色調:黄橙色
72	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.3	完形 49g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
73	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.0	2.0	略完形 [40]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
74	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	5.2	2.2	略完形 [44]g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
75	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.7	2.3	略完形 [39]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
76	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.6)	[3.1]	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
77	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.7	3.4	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
78	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.5)	(7.0)	[3.2]	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
79	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.4)	3.4	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
80	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.6)	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
81	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.4	3.2	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
82	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.2	3.6	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
83	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	7.2	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
84	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.6)	6.0	3.0	2/5 胎土:雲母 色調:橙色
85	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.4)	(6.6)	3.5	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:外面中心に黒変
86	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.2	6.3	完形 158g 胎土:雲母 色調:黄橙色
87	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.4)	[3.6]	2/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
88	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.0	3.8	完形 134g 胎土:雲母 色調:黄橙色
89	土器	ロクロ かわらけ・大	11.9	7.0	3.6	4/5 胎土:雲母 色調:橙色
90	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.6	3.6	完形 181g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
91	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6	7.9	3.6	完形 208g 胎土:雲母 色調:黄橙色
92	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.2	3.5	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
93	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	6.8	4.1	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
94	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(8.2)	[3.1]	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
95	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4 ~11.6	6.4	3.1	完形 146g 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
1面 遺構1 出土遺物②(図18)						
96	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	(8.4)	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
97	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.4)	(9.0)	3.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
98	土器	ロクロ かわらけ・大	14.0	9.2	3.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
99	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.4)	(9.0)	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
100	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	8.7	4.1	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
101	土器	ロクロ かわらけ・大	(15.2)	(8.6)	[3.8]	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
102	土器	ロクロ かわらけ・大	14.4	9.2	4.0	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
103	土器	ロクロ かわらけ・大	15.2	10.4	4.6	4/5 色調:黄橙色
104	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	8.5	3.9	3/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
105	陶器	常滑 甕	—	—	[7.0]	胴小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 備考:傾き
106	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.8)	—	[6.3]	口～体1/3 胎土:精良 色調:淡黄灰色 釉調:黒褐色(鉄釉)、外面下部錆釉 備考:二次焼成を受け釉が濁る
107	陶器	瀬戸 天目茶碗	—	—	[3.7]	口小片 胎土:精良 色調:淡灰色 釉調:黒褐色(鉄釉)
108	瓦器	風炉	—	—	[3.0]	口小片 胎土:やや粗雑 色調:灰黒色 火鉢VI類
109	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	至和通寶 中国北宋代・1054年初鑄
110	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.1	銭銘不明
1面下 出土遺物(図19)						
111	土器	ロクロ かわらけ	(3.8)	(3.4)	1.8	1/2 内折れ 胎土:雲母 色調:黄橙色
112	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.8	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口唇の一部を擦り凹ませる
113	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.1	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
114	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.2	1.7	完形 4.5g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
115	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.9	2.0	略完形 [5.6]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
116	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
117	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.1	1.8	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
118	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.7	略完形 [4.1]g 胎土:雲母 色調:黄橙色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.8	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	2.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	3.7	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.4	2.0	2/5 胎土:雲母 色調:黄橙色
123	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.6)	(2.0)	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
124	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	7.0	3.4	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部に白色の付着物
125	土器	ロクロ かわらけ・小	6.0	4.0	2.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
126	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	4.6	2.6	3/4 胎土:精良 色調:黄橙色 備考:歪み顕著
127	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.4)	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.6)	3.0	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
129	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.6)	3.0	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
130	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.6	2.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄灰色
131	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	7.0	2.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
132	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.4)	3.9	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
133	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.6	3.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部に煤付着
133	土器	ロクロ かわらけ・大	12.7	7.7	4.8	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
134	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.7	3.7	1/2 胎土:精良 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
136	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.0)	3.5	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
137	陶器	すり常滑	長さ 4.3	幅 4.6	厚さ 1.5	胎土:灰色～黒灰色 白色粒 黒色粒 色調:黄灰色
138	陶器	常滑 甕	—	—	[6.5]	胴小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 備考:外面に三つ鱗文のスタンプ
139	陶器	常滑 片口鉢I類	—	—	[4.2]	口小片 胎土:精良、微砂粒 色調:淡灰褐色 (尾張・山茶碗系)
140	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[7.0]	口小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色～暗赤褐色
141	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[6.4]	口～底小片 胎土:長石粒 色調:灰褐色～褐色
142	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[4.0]	口小片 胎土:長石粒 色調:褐色～橙褐色
143	陶器	瀬戸 緑釉皿	(12.0)	(7.4)	[2.0]	1/6 胎土:精良 色調:淡灰色 釉調:灰色 (灰釉)
144	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[2.4]	口小片 胎土:精良色調:黄灰色 釉調:灰色 (灰釉)
145	陶器	東濃 山茶碗	—	—	[4.5]	口～胴小片 胎土:精良 色調:灰色 備考:自然釉かかる
146	陶器	東播系 鉢	—	—	[4.5]	口小片 胎土:粗雑 色調:灰色 焼成:良好
147	青白磁	梅瓶	—	—	—	胴小片、傾き不詳 胎土:精良 色調:白色 釉調:青灰色～灰色、貫入あり
148	陶器	緑釉陶器 盤?	—	—	—	底小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:緑灰色 備考:外底面回転糸切り
149	須恵器?	転用陶片	長さ 3.5	幅 3.4	厚さ 1.3	甕の胴部片を転用か 胎土:精良 色調:灰色 備考:内外面と割れ口一面に擦痕
150	瓦	軒丸瓦	瓦当径 (16.0)	—	—	胎土:やや粗雑、砂粒・白色粒 色調:灰黒色
151	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代、1093年初鋳
152	鉄製品	釘	長さ 4.7	幅 0.8	厚さ 0.7	完形? 錆化顕著
153	鉄製品	釘	長さ [4.3]	幅 1.2	厚さ 1.0	上部欠損 錆化顕著
154	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ [3.5]	幅 3.5	厚さ 0.8	1/2以下 表裏2面を使用 灰白色
155	石製品	紡錘車?	長さ 5.0	幅 [2.5]	厚さ 1.9	1/2 中央部に貫通孔 頁岩製
156	石製品	基石	直径 1.9	厚さ 0.6	—	灰黒色
157	石	火打石	長さ 2.5	幅 1.7	厚さ 1.5	石英 稜角2辺に打撃・摩擦痕あり
2面 遺構14 出土遺物(図20)						
158	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.9	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
159	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.6	略完形 [55]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
160	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.4	1.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
161	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7	4.8	2.1	完形 64g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
162	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.5	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
163	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8 ～8.3	5.1	1.8	完形 65g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:歪み顕著
164	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.6	完形 55g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
165	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
166	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
167	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
168	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	2.0	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
169	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.0	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
170	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
171	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.0	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
172	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
173	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.4	2.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
174	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.5	5/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
175	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.8	1.6	略完形 [50]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
176	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3	1.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
177	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.8	略完形 [51]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部に浅い抉り2ヶ所、打ち欠き1ヶ所
178	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
179	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.4	1.9	略完形 [52]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
180	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.2	2.2	略完形 [49]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
181	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.3	2.1	略完形 [48]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
182	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	5.3	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部打ち欠き2ヶ所
183	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(7.0)	2.9	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
184	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	8.2	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:底部中央に径0.7~0.5mmの窪みあり
185	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.5	3.4	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
186	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6	8.6	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
187	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	7.6	2.9	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:内底面円形のナデ痕
188	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	7.2	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:底部貫通孔2ヶ所、未貫通孔が多数
189	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.7	3.5	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部打ち欠き1ヶ所
190	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.5	3.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
191	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.5	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
192	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(7.0)	3.2	1/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
193	土器	ロクロ かわらけ・大	—	—	[3.0]	口小片 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:側面に貫通孔
194	陶器	瀬戸 入れ子	7.8	3.6	2.8	胎土:精良 色調:灰白色、体部内面~口唇部外面に自然釉 焼成:良好 備考:八弁の輪花形
195	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ 5.5	幅 3.0	厚さ 0.6	残存率不明 表裏2面を使用 灰白色
2面下 出土遺物(図21)						
196	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.4	1.5	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
197	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.4	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
198	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.6	1/2 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
199	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
200	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
201	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.0	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
202	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	6.0	1.9	完形 62g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
203	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(4.4)	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
204	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.0	1.6	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
205	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	2.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
206	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.5	2.2	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
207	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.3	2.4	完形 50g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
208	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.7	2.5	完形 53g 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
209	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	6.8	3.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
210	土器	ロクロ かわらけ・大	12.7	8.5	3.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
211	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.0	3.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
212	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.6)	3.1	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:内外面全体に薄く煤付着
213	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	7.1	3.0	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 備考:口縁部煤付着 備考:外底面ササラ状圧痕
214	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.0)	3.2	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
215	土器	ロクロ かわらけ・大	11.8	7.5	4.5	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
216	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	7.2	3.4	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
217	陶器	常滑 片口鉢I類	(28.2)	(11.9)	(9.9)	1/6 胎土:長石 小石含有 粗土 色調:灰色 焼成:良好
218	瓦	丸瓦	長さ 15.0	幅 9.8	厚さ 2.0	1/4以下 凸面タキ目ナゲ消し、側縁ヘラケズリ 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 備考:永福寺I期
219	瓦	丸瓦	長さ —	幅 —	厚さ 1.7	1/8 凸面ヘラナゲ 凹面ヘラナゲ、布目痕不明 胎土:精良 色調:黒灰色
220	瓦	丸瓦	長さ 4.5	幅 4.6	厚さ 0.9	小片 胎土:白色粒 色調:灰色 備考:永福寺I期
221	石製品	硯	長さ [5.1]	幅 6.2	厚さ 1.3	赤間産・頁岩
222	石製品	砥石 中砥	長さ 8.5	幅 6.6	厚さ 2.0	伊予産・流紋岩質粗粒凝灰岩 3面を使用 一部再加工のためか切り取られている
223	漆器	皿	(9.0)	(7.0)	1.0	内外面黒色系漆塗、無文
224	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
225	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
226	木製品	箸	長さ 20.3	幅 0.5	厚さ 0.4	完形
227	木製品	箸	長さ [19.7]	幅 0.5	厚さ 0.3	端部欠損
228	木製品	箸	長さ [18.7]	幅 0.8	厚さ 0.5	端部欠損
229	木製品	用途不明	長さ [10.3]	幅 2.3	厚さ 0.5	側縁部に切り込み2ヶ所 筆置き?
2面下 炭層 出土遺物(図22)						
230	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	1.6	完形 48g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
231	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.7)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
232	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.7	1.9	完形 53g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
233	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.9	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
234	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.0)	1.8	2/3 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
235	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.6	1.5	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
236	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
237	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
238	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
239	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.8	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
240	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.0	完形 62g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
241	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.8)	1.6	2/3 胎土:白色針状物質 色調:橙色
242	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.4)	1.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
243	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.6)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:内底回転ナデ痕顕著
244	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.0	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
245	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.1	1.8	4/5 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
246	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
247	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(7.0)	3.0	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
248	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	7.4	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
249	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(6.8)	3.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
250	瓦器	瓦 丸瓦	長さ [15.8]	幅 [8.0]	厚さ 1.7	1/4以下 凸面ヘラナデ、凹面糸切り痕 胎土:粗雑 色調:黒灰色
251	石製品	瓦 丸瓦	長さ [20.3]	幅 14.2	厚さ 2.0	1/2 凸面縄目タタキ痕ナデ消し、凸面布目痕 胎土:粗雑、砂粒・黒色粒・赤色粒 色調:黒灰色 永福寺・弘安改修期瓦(13世紀後半)か
252	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代、1078年初鑄
253	石製品	砥石 中砥	長さ [8.6]	幅 6.8	厚さ 5.2	残存率不明 産地不明、白色 2面を使用、1面に加工痕が残る
254	漆器	皿	8.2	6.8	0.8	内外面黒色系漆塗り→内面に赤色漆・手描きの籠目+カタバミ?文
255	漆器	椀	—	(8.4)	[3.0]	内外面黒色系漆塗り、無文 口縁部内外面に一部茶褐色の付着物
256	木製品	栓か	直径 2.5	高さ 11.2	—	上端部一ヶ所斜めにケズリ
257	木製品	不明	長さ [8.3]	幅 [5.5]	厚さ 2.6	板目材 表面に浮き彫りの加工あり(文様不明)
3面 面上 出土遺物(図23)						
258	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.5	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
259	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	1.5	完形 49g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
260	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	5.2	1.5	略完形 [45]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
261	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
262	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	5.2	1.7	完形 52g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
263	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.1)	[1.9]	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
264	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.6	完形 59g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:遺構3(囲炉裏)板材下
265	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.8	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
266	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	8.3	3.5	略完形 [155]g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
267	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(7.8)	3.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
268	土器	ロクロ かわらけ・大	—	7.0	2.0	口縁部全周打ち欠き 胎土:精良、雲母・白色針状物質 色調:黄橙色~橙色
269	木製品	建具 格子子	長さ (61.0)	幅 2.4	厚さ 1.9	均等の間隔で貫通孔(釘穴) 凸面部の長さ2.6~3.0cm 凹面部の長さ1.7~2.0cm
270	木製品	建具 格子子	長さ (25.7)	幅 2.3	厚さ 1.7	均等の間隔で貫通孔(釘穴) 凸面部の長さ2.6~2.8cm 凹面部の長さ1.8~2.4cm

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
3面下 出土遺物(図24)						
271	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	6.0	1.6	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:褐色 備考:口縁部煤付着
272	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(6.2)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
273	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.4	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
274	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.2	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
275	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.3	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
276	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.3)	1.8	3/4 胎土:精良・雲母 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
277	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.1	完形 54g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
278	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	4.6	1.8	3/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
279	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	6.0	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
280	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	2.1	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
281	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.0)	1.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
282	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.4)	(5.4)	3.0	1/2 胎土:雲母 色調:橙色
283	白磁	碗	—	—	[1.9]	口縁部片 素地:精良 色調:白色 釉調:白色 釉層非常に薄く、口唇部無釉 内外面に型押しによる文様有り
284	青磁	蓮弁文碗	—	—	[3.2]	口小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:灰緑色～白色 龍泉窯系
285	青磁	折縁皿	—	—	[5.0]	口～胴小片 胎土:精良 色調:灰色 釉調:灰緑色 備考:内面花卉形のケズリ 龍泉窯系・大宰府坏Ⅲ-3b類
286	石製品	滑石鍋	—	—	[5.0]	口小片 色調:白黄色 内面に工具痕残る
287	瓦	丸瓦	長さ 6.2	幅 7.5	厚さ 2.0	外縁を研磨で整形→凸面に凹部成形、硯として転用か 永福寺 I 期
288	石製品	砥石 仕上げ砥	長さ [5.4]	幅 3.7	厚さ 1.0	鳴滝産・流紋岩質凝灰岩 黄白色～乳白色
289	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代、1068年初鋳
290	漆器	皿	9.2	6.8	1.1	内外面黒色系漆塗り→内底面に朱漆・手描きの楓文(一葉) 低い輪高台
291	漆器	皿	9.0	7.0	1.2	内外面黒色系漆塗り→内面に手描き・朱漆塗り残しによる放射状分割円形文
292	漆器	皿	9.2	7.2	0.9	内外面黒色系漆塗り→内面に朱漆・手描きの植物文(松)
293	木製品	連歯下駄	長さ 17.3	幅 [7.0]	厚さ 1.2	前歯・側縁部欠損 左前方部に母指による窪み
294	木製品	連歯下駄	長さ 22.2	幅 9.5	厚さ 1.5	前端部一部欠損 右前方部に母指による窪み 裏面3か所に刃物痕
295	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
296	木製品	箸	長さ 23.3	幅 1.0	厚さ 0.6	完形
297	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
298	木製品	箸	長さ 22.8	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
299	木製品	箸	長さ 22.6	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
300	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
301	木製品	箸	長さ 22.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
302	木製品	箸	長さ 21.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
303	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
3面下ほか 出土遺物(図25)						
304	木製品	箸	長さ 21.3	幅 0.8	厚さ 0.3	完形
305	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
306	木製品	箸	長さ 21.0	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
307	木製品	箸	長さ 20.9	幅 0.7	厚さ 0.8	完形
308	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
309	木製品	箸	長さ 19.2	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
310	木製品	箸	長さ 19.4	幅 0.5	厚さ 0.4	完形
311	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
312	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
313	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
314	木製品	箸	長さ 18.6	幅 0.7	厚さ 0.5	端部欠損
315	木製品	用途不明	長さ 16.5	幅 1.8	厚さ 0.7	完形?
316	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.8	2/3 胎土:雲母 色調:黄橙色
317	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.5)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
318	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.0	1.6	完形 44g 胎土:雲母 色調:橙色
319	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.8)	1.7	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
320	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	1.9	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
321	土器	ロクロ かわらけ・中	10.9	6.8	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
322	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.4)	3.0	1/3 胎土:白色針状物質 色調:濃橙色
323	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.2)	(5.6)	3.2	1/3 胎土:雲母 色調:薄橙色
324	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.4	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
325	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(6.8)	3.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
326	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.2)	(6.4)	2.8	1/2 胎土:雲母 色調:黄橙色
327	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	[10.0]	口～底小片 胎土:長石粒 色調:灰褐色 6b型式 (1275～1300頃)
328	陶器	亀山 甕	-	-	[15.9]	胴小片を再利用(硯か?) 胎土:粗雑、白色粒 色調:灰褐色 外面に格子目タタキ痕 割れ口に数か所の擦痕
329	青磁	蓮弁文碗	-	-	[3.0]	口小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅱ-b類
330	青磁	蓮弁文碗	-	(4.2)	[2.0]	体～底小片 胎土:精良、黒色微粒、気泡 色調:灰白色 釉調:青白色～灰白色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗Ⅱ類
331	銅製品	銭	直径 2.0	孔径 0.5	厚さ 0.2	備考:詳細不明 腐蝕が進み錆が厚く付着
332	漆器	皿	-	6.0	[0.7]	手描き 文様不明 内外面全体に黒色系漆 内底面に朱色漆で文様あり 高台無し
333	木製品	折敷	長さ 30.5	幅 [20.4]	厚さ 0.5	2/3 柾目材
334	木製品	草履芯	長さ (22.5)	幅 (5.1)	厚さ 0.3	1/2弱 板目材 繊維圧痕
4a面 遺構15 出土遺物(図26)						
335	土器	ロクロ かわらけ	4.2	3.5	1.0	完形 13g 内折れ 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
336	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.5)	1.7	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
337	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	1.9	3/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
338	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	8.0	3.4	3/4 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
339	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.0	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
340	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.0	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁部煤付着
341	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.5	3.0	略完形 [163]g 胎土:白色針状物質 色調:橙色
342	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.5)	(7.9)	2.8	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
343	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.0)	3.2	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
344	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.5)	3.5	3/5 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙白色
345	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	6.3	3.4	3/4 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
346	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(7.9)	3.3	1/2 胎土:精良・雲母・白色針状物質 色調:橙色
347	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(7.0)	3.5	3/4 胎土:精良・雲母 色調:黄橙色
348	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.4)	3.2	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
349	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.7	3.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
350	木製品	折敷	長さ 29.5	幅 [23.5]	厚さ 0.6	3/4 榎目材 樹皮紐で結合 上下各5ヶ所に貫通孔 表裏ともに刃物痕多数
351	木製品	草履芯	長さ 23.8	幅 [11.0]	厚さ 0.3	3/4 板目材
352	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 5.8	厚さ 0.3	1/2弱 板目材 表面に曲線の刃物痕
353	木製品	草履芯	長さ (13.0)	幅 5.0	厚さ 0.3	後端部欠損
354	木製品	草履芯	長さ (13.8)	幅 5.0	厚さ 0.3	前端部欠損
355	木製品	工具・篋	長さ (19.8)	幅 1.7	厚さ 0.8	端部欠損 篋面片面のみ削り尖らせている
356	木製品	用途不明	長さ (13.8)	幅 2.6	厚さ 0.3	端部に漆付着 側面切り込み加工 筆置き?
4a面 遺構15・4b面 遺構15b 出土遺物(図27)						
357	木製品	箸	長さ 24.2	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
358	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
359	木製品	箸	長さ 24.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
360	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
361	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.4	完形
362	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
363	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
364	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
365	木製品	箸	長さ 22.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
366	木製品	箸	長さ 21.3	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
367	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
368	木製品	箸	長さ 20.7	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
369	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
370	木製品	用途不明 棒状	長さ 25.2	幅 0.9	厚さ 0.7	完形?

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
371	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形?
372	木製品	用途不明 棒状	長さ 13.8	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
373	木製品	用途不明 棒状	長さ 14.4	幅 0.9	厚さ 0.5	完形?
374	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	1.6	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
375	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.7	4/5 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
376	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.7)	7.6	3.3	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
377	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.7	3.1	3/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:内面煤付着
378	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.1	3.8	3/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色 備考:口縁～内底面煤付着
379	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
380	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
381	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
382	木製品	用途不明 棒状	長さ 19.2	幅 0.8	厚さ 0.5	
383	木製品	用途不明 棒状	長さ 15.8	幅 0.6	厚さ 0.4	
384	木製品	用途不明 棒状	長さ 15.2	幅 0.6	厚さ 0.4	
385	木製品	容器 取手	長さ 10.7	幅 1.4	厚さ 1.1	
4面下・4b面下 出土遺物①(図28)						
386	木製品	草履芯	長さ 23.6	幅 10.0	厚さ 0.3	完形 編み藁の痕跡顕著
387	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.6)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
388	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.1)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
389	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.4)	1.4	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色～黒褐色 備考:内面・側面二次焼成を受けている
390	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.7	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
391	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.1)	1.6	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
392	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.8)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
393	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.3	3.4	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
394	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.6)	3.3	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
395	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(9.0)	3.6	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
396	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(8.0)	3.2	1/3 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色～灰褐色 備考:外底面煤付着
397	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色～灰褐色
398	陶器	尾張型 山茶碗	(15.0)	7.2	5.9	1/3 胎土:長石粒 色調:灰色～灰褐色 常滑5型式 (1220～1250頃)
399	陶器	常滑 片口鉢I類	—	(12.2)	[10.1]	底1/3 胎土:長石粒 色調:灰色 5型式 (1220～1250頃) (尾張・山茶碗系)
400	陶器	常滑 片口鉢I類	—	(14.6)	[3.8]	底1/8 胎土:小石粒 黒色粒 白色粒 長石 石英 色調:灰色 5型式 (1220～1250頃) か (尾張・山茶碗系)
401	青磁	青磁 蓮弁文碗	—	—	[4.8]	口小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:灰緑色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗II-b類
402	陶器	黄釉陶器 盤	—	—	[3.5]	口小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 釉調:黄緑色
403	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶か? 中国北宋代、1009年初鑄
404	鉄製品	刀子	長さ [15.0]	最大幅 2.0	厚さ 0.4	茎欠失

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
405	鉄製品	釘	長さ 8.7	幅 0.5	厚さ 0.5	完形?
406	骨製品	筭	長さ 2.4	幅 2.4	厚さ 0.1	完形
407	漆器	椀	(12.0)	-	[3.5]	口～体小片 内外面黒色系漆塗り→内外面とも赤色漆・手描きで楓文?
408	漆器	椀	-	(7.4)	[2.7]	体～底1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
409	漆器	盆	長さ [24.8]	幅 [3.4]	高さ 1.0	1/8以下 外底面以外を黒色系漆塗り→内面に赤色漆・スタンプで亀甲花卉文1ヶ所
410	木製品	折敷	長さ 22.2	幅 (6.6)	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
411	木製品	折敷	長さ 22.0	幅 (7.6)	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
4面下・4b面下 出土遺物②(図29)						
412	木製品	折敷	長さ 22.5	幅 (2.9)	厚さ 0.3	1/10 二側辺残存 柾目材
413	木製品	折敷	長さ 20.2	幅 (5.4)	厚さ 0.3	1/4 二側辺残存 柾目材
414	木製品	折敷	長さ (18.4)	幅 6.0	厚さ 0.2	1/3以下 二側辺残存 柾目材
415	木製品	箸	長さ 26.0	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
416	木製品	箸	長さ 24.7	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
417	木製品	箸	長さ 24.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
418	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
419	木製品	箸	長さ 23.5	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
420	木製品	箸	長さ 23.1	幅 0.9	厚さ 0.6	完形
421	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.3	完形
422	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
423	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
424	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
425	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
426	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
427	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
428	木製品	箸	長さ 20.2	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
429	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形
430	木製品	箸	長さ 19.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
431	木製品	箸	長さ 19.5	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
432	木製品	箸	長さ 18.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
433	木製品	箸	長さ [22.3]	幅 0.8	厚さ 0.5	一端部欠損
434	木製品	箸	長さ [21.2]	幅 0.6	厚さ 0.6	一端部欠損
435	木製品	箸	長さ [20.8]	幅 0.6	厚さ 0.5	一端部欠損
436	木製品	箸	長さ [19.2]	幅 0.6	厚さ 0.5	一端部欠損

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
4面下・4b面下 出土遺物③(図30)						
437	木製品	曲物	—	12.2	[3.0]	底板完存、側板一部残存 厚さ:底板0.7、側板0.3cm 底板内底面に圧迫痕・焦げ痕
439	木製品	栓か	直径 1.5	高さ 2.7	—	完形? 上部側縁に粗いケズリによる面取り加工
438	木製品	栓か	直径 1.7	高さ 13.5	—	完形? 下端部に焦げ痕
440	木製品	草履芯	長さ [21.0]	幅 11.0	厚さ 0.3	4/5 板目材
441	木製品	草履芯	長さ 24.2	幅 5.4	厚さ 0.3	1/2 板目材
442	木製品	草履芯	長さ 20.2	幅 4.4	厚さ 0.3	1/2 板目材
443	木製品	草履芯	長さ 20.2	幅 4.8	厚さ 0.4	1/2 板目材 前端部と同じ大きさの孔が2ヶ所
444	木製品	刀子鞘	長さ 21.7	幅 3.0	厚さ 1.4	略完形 呑入式合わせ構造 合わせ部半円形にケズリ込み 刀身部推定長19.5cm
445	木製品	刷毛柄?	長さ 16.5	幅 1.2	厚さ 0.6	完形? 柁目材 下端部付近を縦に6cmほど裂き、両側縁に切り込み
446	木製品	用途不明	長軸長 7.5	孔径 0.3	厚さ 1.4	完形? 板目材 八角形に成形、上面外縁を面取り 中央に貫通孔
447	木製品	用途不明	長さ [9.1]	幅 5.3	厚さ 0.6	一端部欠損 板目材 上部隅落とし、直径0.3cmの貫通孔
448	木製品	用途不明	長さ 4.3	幅 4.1	厚さ 2.7	完形(加工途中)? 片面に刃物痕
449	木製品	用途不明	長さ 21.0	幅 1.8	厚さ 1.0	完形? 一端を細く加工
450	木製品	用途不明	長さ 7.7	幅 11.8	厚さ 0.8	完形? 板目材 表裏面に刀子傷
451	木製品	用途不明 棒状	長さ 13.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
452	木製品	用途不明	長さ (10.9)	幅 2.0	厚さ 0.6	一端欠損 板目材 刀子形に整形
4c面 遺構17・4c面下 出土遺物(図31)						
453	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.0)	1.8	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
454	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	5.3	1.5	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色～褐色 備考:内底面二次焼成
455	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(7.0)	4.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
456	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	(7.8)	3.2	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
457	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	7.8	3.4	4/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色
458	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色 外面に簾状格子文のスタンプ
459	木製品	箸	長さ 23.4	幅 0.9	厚さ 0.5	完形
460	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
461	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
462	木製品	箸	長さ 21.0	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
463	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
464	木製品	箸	長さ [28.3]	幅 0.7	厚さ 0.5	一端欠損
465	木製品	箸	長さ [20.2]	幅 0.8	厚さ 0.7	一端欠損
466	木製品	機織部材?	長さ (23.5)	幅 2.4	厚さ 2.2	両端部欠損
467	木製品	用途不明	長さ 22.4	幅 1.5	厚さ 0.7	完形? 板目材 先端部へら状に整形
468	木製品	用途不明	長さ (27.0)	幅 2.6	厚さ 0.7	一端欠損 板目材 先端部へら状に整形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
4c面下 出土遺物(図32)						
469	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.5)	1.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色 備考:口縁部煤付着
470	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.8)	1.7	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
471	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	(5.8)	3.6	2/3 胎土:精良・白色針状物質 色調:黄橙色
472	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(5.8)	3.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
473	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	8.0	3.6	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
474	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	8.4	2.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:濃橙色
475	陶器	常滑 片口鉢I類	(29.0)	—	[8.1]	口〜体1/6 胎土:長石粒 色調:灰褐色 4型式 (1190~1220頃) (尾張・山茶碗系)
476	木製品	折敷	長さ 22.5	幅 [7.3]	厚さ 0.2	1/3 二側辺残存 板目材
477	木製品	箸	長さ 25.9	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
478	木製品	箸	長さ 24.5	幅 0.7	厚さ 0.51	完形
479	木製品	箸	長さ 24.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
480	木製品	箸	長さ 23.7	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
481	木製品	箸	長さ 23.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
482	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
483	木製品	草履芯	長さ 22.8	幅 (8.0)	厚さ 0.3	4/5 板目材
484	木製品	用途不明 棒状	長さ 27.4	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
485	木製品	用途不明 棒状	長さ 26.8	幅 0.8	厚さ 0.6	完形?
486	木製品	用途不明 棒状	長さ 23.9	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
487	木製品	用途不明 棒状	長さ 20.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?
488	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	(6.0)	3.6	1/2弱 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
489	木製品	折敷	長さ 22.6	幅 22.3	厚さ 0.3	縁の枠板一部欠損 柁目材の底板各辺中央に貫通孔、うち1ヶ所に樹皮紐が残存
490	木製品	折敷	長さ 23.7	幅 [8.7]	厚さ 0.2	1/3以下 柁目材
491	木製品	折敷	長さ 21.5	幅 [9.7]	厚さ 0.2	1/2弱 柁目材
492	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.4	完形
5面下 出土遺物①(図33)						
493	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.4)	1.4	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
494	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.7	1.8	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
495	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(5.2)	1.7	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色 備考:内外側面にはっきりと数条の稜線あり
496	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.6	1.8	完形 46g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
497	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	6.7	1.9	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:灰橙色
498	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.8)	3.0	1/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
499	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.9)	(8.0)	2.9	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:外側面〜底部煤付着
500	土器	手づくね かわらけ・大	12.4	—	3.2	3/4 手づくね大 胎土:白色針状物質 色調:黄橙色
501	土器	ロクロ かわらけ・大	直径 7.3	厚さ 1.0	—	底部を円板に再加工(用途不明) 色調:橙色 備考:外底面に回転糸切り痕→摩擦痕+中央に非貫通孔

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
502	陶器	常滑甕	—	—	—	口小片 胎土:長石粒 色調:褐灰色 6型式 (1250~1300頃)
503	陶器	常滑甕	—	—	—	胴小片 胎土:長石粒 色調:褐色~灰緑色 外面に簾状格子文のスタンプ
504	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	(28.8)	(13.7)	[13.7]	1/3 胎土:長石粒 色調:灰色 備考:内底面に重ね焼き痕 5~6a型式 (1220~1275頃)
505	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	[4.3]	口小片 胎土:長石粒 色調:黒灰色 6b型式 (1250~1275頃)
506	陶器	瀬戸入れ子	(9.2)	(4.4)	3.8	1/3 外底面回転糸切り痕 胎土:黒色粒・白色粒 色調:褐色
507	青白磁	合子蓋	(7.2)	—	1.6	1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:青白色 天井部に鳳凰文レリーフ 備考:外面一部に煤付着 天井部内面に一部釉付着
508	青白磁	梅瓶	—	(10.4)	[5.7]	底小片 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:青緑色
509	青磁	蓮弁文碗	—	(4.6)	[4.9]	体~底1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:灰白色 釉調:灰緑色、貫入 龍泉窯系・大宰府碗Ⅲ-c類
510	陶器	施釉陶器盤	—	—	[3.0]	体~底小片胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 釉調:黄褐色 (内全面~口縁側外面) 内面に鉄絵 大宰府盤Ⅰ-2b類
511	陶器	褐釉陶器壺	—	(8.2)	[9.8]	胴下部~底完存 胎土:精良 釉調:暗褐色 丸底状 (高台剥離か) 大宰府分類に例なし

5面下 出土遺物②(図34)

512	漆器	皿	(10.4)	(7.0)	1.2	1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
513	漆器	皿	-	(7.0)	[0.6]	1/3 内外面黒色系漆塗り、無文
514	木製品	折敷	長さ 22.4	幅 [9.4]	厚さ 0.2	1/2弱 柾目材
515	木製品	箸	長さ 24.9	幅 0.9	厚さ 0.4	完形
516	木製品	箸	長さ 24.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
517	木製品	箸	長さ 24.4	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
518	木製品	箸	長さ 24.2	幅0.9	厚さ 0.6	完形
519	木製品	箸	長さ 24.2	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
520	木製品	箸	長さ 24.0	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
521	木製品	箸	長さ 23.2	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
522	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
523	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.9	厚さ 0.3	完形
524	木製品	箸	長さ 22.8	幅 22.8	厚さ 0.5	完形
525	木製品	箸	長さ 22.8	幅 0.6	厚さ 0.7	完形
526	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
527	木製品	箸	長さ 22.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
528	木製品	箸	長さ 22.0	幅 0.8	厚さ 0.7	完形
529	木製品	箸	長さ 22.2	幅 0.9	厚さ 0.7	完形
530	木製品	箸	長さ 21.9	幅 0.8	厚さ 0.4	完形
531	木製品	箸	長さ 21.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
532	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
533	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.5	厚さ 0.5	完形
534	木製品	箸	長さ 21.1	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
535	木製品	箸	長さ 20.6	幅 0.6	厚さ 0.4	完形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
536	木製品	箸	長さ 20.2	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
537	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
538	木製品	箸	長さ 19.5	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
539	木製品	箸	長さ 19.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
540	木製品	蓋	直径 4.8	高さ 1.4	—	略完形 板目材 全面黒色漆塗りか
541	木製品	手押木	長さ 13.5	幅 3.8	高さ 2.2	略完形 柾目材
5面下 出土遺物③(図35)						
542	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 10.5	厚さ 0.3	完形 板目材
543	木製品	草履芯	長さ 23.4	幅 10.3	厚さ 0.4	略完形 板目材
544	木製品	用途不明	長さ [20.4]	幅 2.1	厚さ 7.6	一端欠損 板目材 刀子形に整形
545	木製品	用途不明	長さ [20.2]	幅 1.3	厚さ 0.6	一端欠損 板目材 ヘラ状に整形
546	木製品	用途不明	長さ [16.0]	幅 1.9	厚さ 1.0	一端欠損
547	木製品	用途不明	長さ [14.2]	幅 1.1	厚さ 0.5	一端欠損 板目材 端部付近に貫通孔
548	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
549	木製品	用途不明 棒状	長さ 19.0	幅 0.9	厚さ 0.5	完形?
550	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.5	幅 0.6	厚さ 0.7	完形?
551	木製品	用途不明 棒状	長さ 18.1	幅 0.8	厚さ 0.5	完形?
6面下～10面・10面 遺構11 出土遺物(図36)						
552	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	4.9	1.5	1/4 胎土:雲母 色調:黄橙色
553	土器	ロクロ かわらけ・小	(10.1)	(6.0)	(1.6)	1/6 胎土:雲母 白色針状物質 色調:黄橙色
554	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	7.1	1.9	完形 64g 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色 備考:口縁部煤付着
555	陶器	施釉陶器 盤	—	—	[3.1]	口小片 備考:二次焼成 大宰府盤 I-2類か
556	鉄製品	刀子	長さ 19.7	幅 1.2	厚さ 0.25	刃長12.0cm 重量27g 備考:茎の尾部に目釘穴
557	石製品	砥石	長さ 7.8	幅 6.0	厚さ 3.4	完形 表裏・側面の4面を使用 軽石製 灰褐色
558	木製品	用途不明 円板状	直径 (7.0)	厚さ 1.0	—	4/5 板目材 中央に貫通孔
559	陶器	施釉陶器 盤	—	—	[1.8]	底小片 胎土:黒色粒・白色粒 色調:灰色 内全面・体部外面に施釉、外面体部下端～ 底部は無釉 内面に鉄絵 備考:二次焼成で釉が変色 大宰府 I-2b類
560	土器	手づくね かわらけ・大	(13.5)	—	3.4	1/2 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
561	土器	手づくね かわらけ・大	(13.6)	—	[2.7]	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
562	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
563	木製品	箸	長さ 21.5	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
564	木製品	不明	長さ 18.0	最大幅 2.5	厚さ 0.5	完形? 板目材
565	土器	ロクロ かわらけ・小	(10.6)	(7.8)	1.8	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色～黄橙色
566	土器	手づくね かわらけ・小	—	—	[1.5]	口小片 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
567	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	7.0	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
568	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.6	4.0	2/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:橙色
569	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.2	3.2	4/5 胎土:雲母・白色針状物質 色調:黄橙色
570	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代、1034年

【図 1 に番号を掲載した調査地点と所収文献】

◆大倉幕府跡 (No.253)

1. 雪ノ下四丁目 569 番 1:『大倉幕府周辺遺跡群』1990 年 (馬淵和雄 1990)
2. 雪ノ下三丁目 707 番 1:『神奈川県埋蔵文化財調査報告 34』1992 年
3. 雪ノ下三丁目 651 番 8:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15 (第 2 分冊)』1999 年
4. 雪ノ下三丁目 618 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 1 分冊)』2002 年 (汐見一夫・山上玉恵 2002)
5. 雪ノ下三丁目 701 番 14:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年
6. 雪ノ下三丁目 701 番 3:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年 (馬淵和雄ほか 2005)
7. 雪ノ下三丁目 701 番 1:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21 (第 1 分冊)』2005 年
8. 雪ノ下三丁目 704 番 3 外:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27 (第 2 分冊)』2011 年 (福田 誠 2011)
9. 雪ノ下三丁目 637 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27 (第 2 分冊)』2011 年 (熊谷 満 2011)
10. 雪ノ下三丁目 629 番 1:『大倉幕府跡発掘調査報告書』2011 年
11. 雪ノ下三丁目 637 番 6 外:2007 年度調査・未報告
12. 雪ノ下三丁目 635 番 2 外:『大倉幕府跡発掘調査報告書』2012 年
13. 雪ノ下三丁目 693 番 8:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2015 年 (本地点)
14. 雪ノ下三丁目 648 番 3:2009 年度調査・未報告
15. 雪ノ下三丁目 694 番 18:『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書』2013 年 (滝澤晶子・宮田 眞 2013a)
16. 雪ノ下三丁目 693 番 1:『大倉幕府跡 (No.253) 発掘調査報告書』2013 年 (滝澤晶子・宮田 眞 2013b)
17. 雪ノ下三丁目 648 番 8:2010 年度調査・未報告
18. 雪ノ下三丁目 618 番 8・653 番 9:2013 年度調査・未報告
19. 雪ノ下三丁目 628 番 1:2014 年度調査・未報告

◆大倉幕府周辺遺跡 (No.49)

- a. 雪ノ下四丁目 620 番 5:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14 (第 2 分冊)』1998 年 (馬淵和雄 1998)
『大倉幕府周辺遺跡群』1999 年 (馬淵和雄 1999)
- b. 雪ノ下三丁目 606 番 1:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9 (第 3 分冊)』1993 年 (菊川英政 1993)
- c. 二階堂字荏柄 58 番 4:『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18 (第 1 分冊)』2002 年 (原 廣志・須佐直子 2002)

【引用・参考文献】

- 太田静六 1992『寝殿造りの研究』吉川弘文館
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって」『中世の風景を読む—2 都市鎌倉と坂東の海に暮らす』網野善彦・石井 進編 新人物往来社
- 馬淵和雄 2004「中世都市鎌倉成立前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』五味文彦・馬淵和雄編 高志書院
- 宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
- 高橋慎一郎 2005『武家の古都、鎌倉』山川出版社
- 永田史子 2014「考古学からみた鎌倉研究の現状と課題」『鎌倉研究の未来』中世都市研究会編 山川出版社



1. 現地調査前 (南西から)



2. I区表土掘削状況 (北西から)



3. I区1面検出状況 (北から)



4. I区1面遺構1 (北西から)



5. I区1面遺構1下層遺物出土状況 (北東から)



6. I区1面遺構1土層断面 (東から)

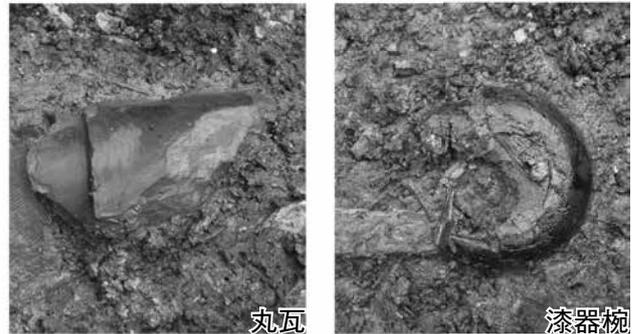
図版2



1. I区3面上炭層検出状況（北から）



2. I区3面上炭層堆積状況（北東から）



丸瓦

漆器碗

3. I区3面上炭層内遺物出土状況



4. I区3面全景（北から）



5. I区3面遺構3（囲炉裏：東から）



6. I区3面遺構3上炭層堆積状況（東から）



1. I区3面上 格子子出土状況 (南西から)



2. I区3面上 格子子出土状況 (板材除去後・西から)

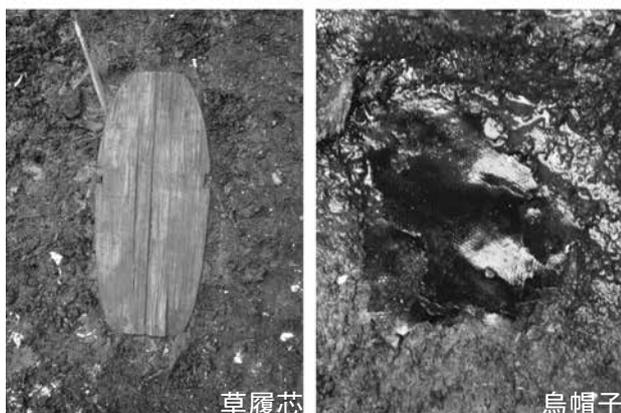


3. I区3面 トレンチ全景 (下層部分・北から)



草履芯

4. I区3面下 遺物出土状況



草履芯

烏帽子

5. I区3面下 遺物出土状況



6. I区4a面 トレンチ全景 (北から)

図版4



1. I区4a面下遺物出土状況(東から)



2. I区4a面下かわらけ・ハエのサナギ出土状況



3. I区5面トレンチ全景(北から)



5. I区6a面トレンチ全景(北から)



4. I区5面上折敷出土状況



6. I区6a面上草履芯出土状況



1. I区6b面トレンチ全景(北から)



2. I区7面トレンチ全景(北から)



3. I区7面遺構10礎板検出状況(南から)



4. I区10面トレンチ全景(遺構11プラン・北から)



5. I区10面遺構11未完掘状況(東から)



6. I区10面遺構11土層断面(西から)

図版6



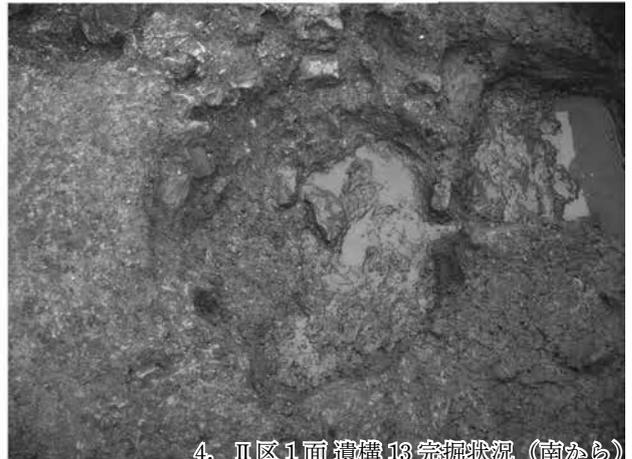
1. II区1面検出状況(北から)



2. II区1・2面遺物出土状況(北から)



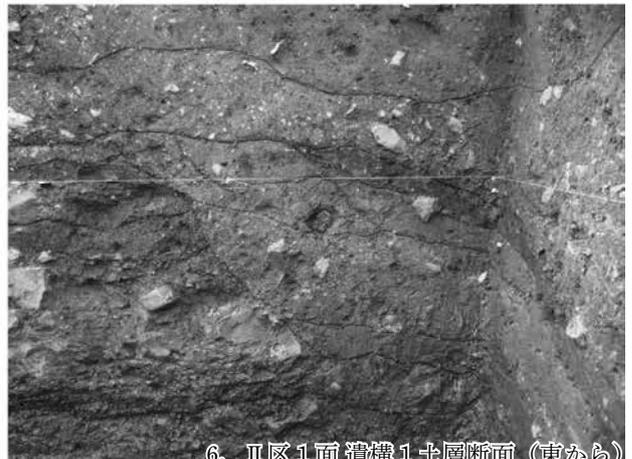
3. II区1面遺構13内かわらけ出土状況(東から)



4. II区1面遺構13完掘状況(南から)



5. II区1面全景(北から)



6. II区1面遺構1土層断面(東から)



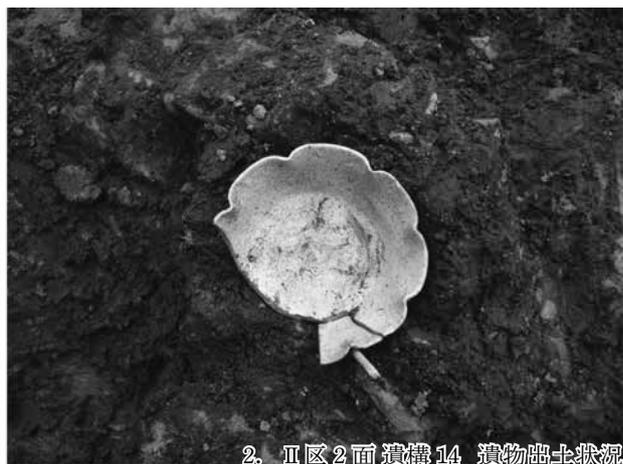
7. II区1面遺構1(北から)



8. II区2面遺構14遺物出土状況(西から)



1. II区2面遺構14土層断面(東から)



2. II区2面遺構14遺物出土状況



3. II区3面上炭層検出状況(北から)



4. II区4a面トレンチ全景(東から)



5. II区4a面遺構15(北西から)



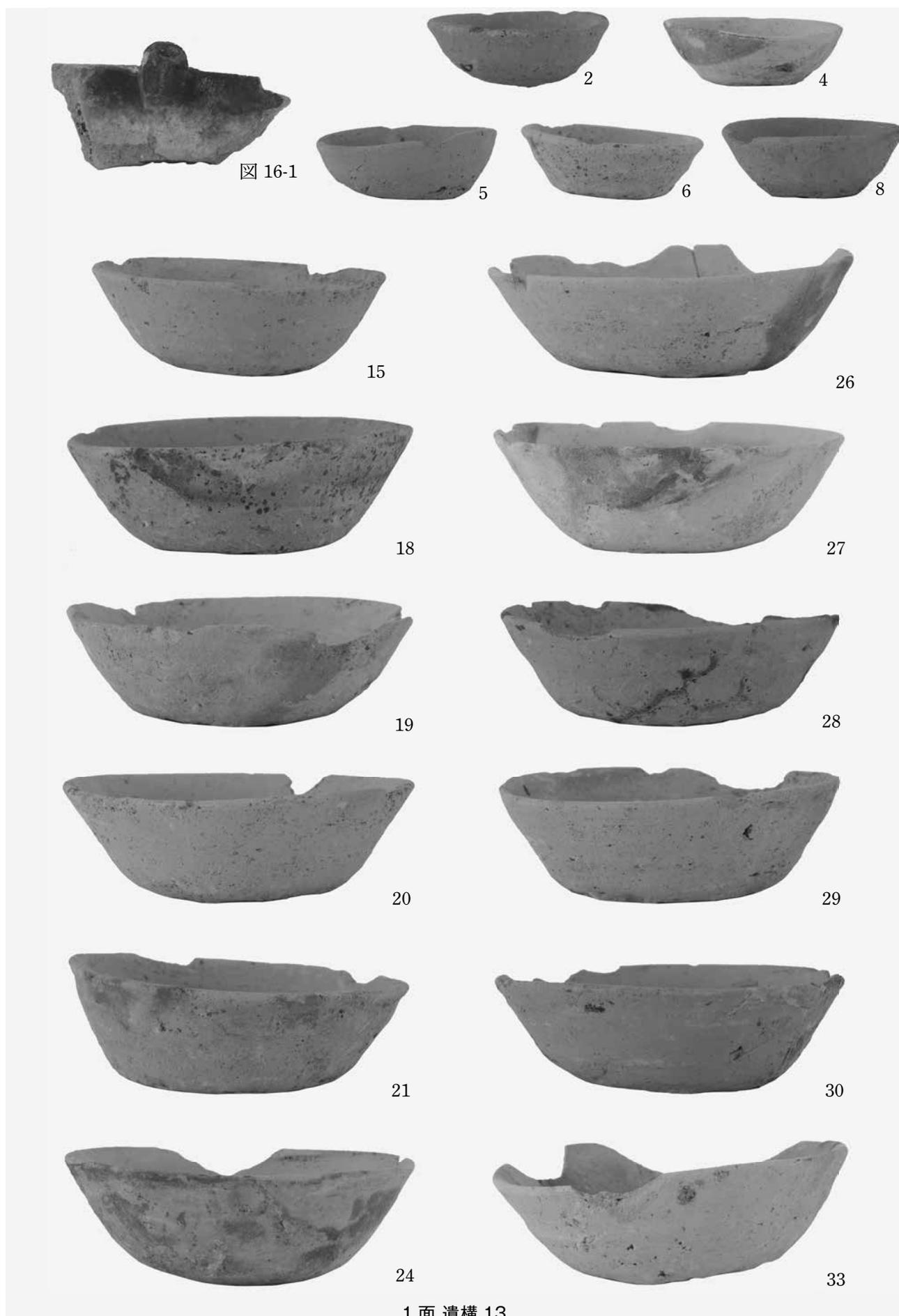
6. II区4a面遺構15土層断面(東から)

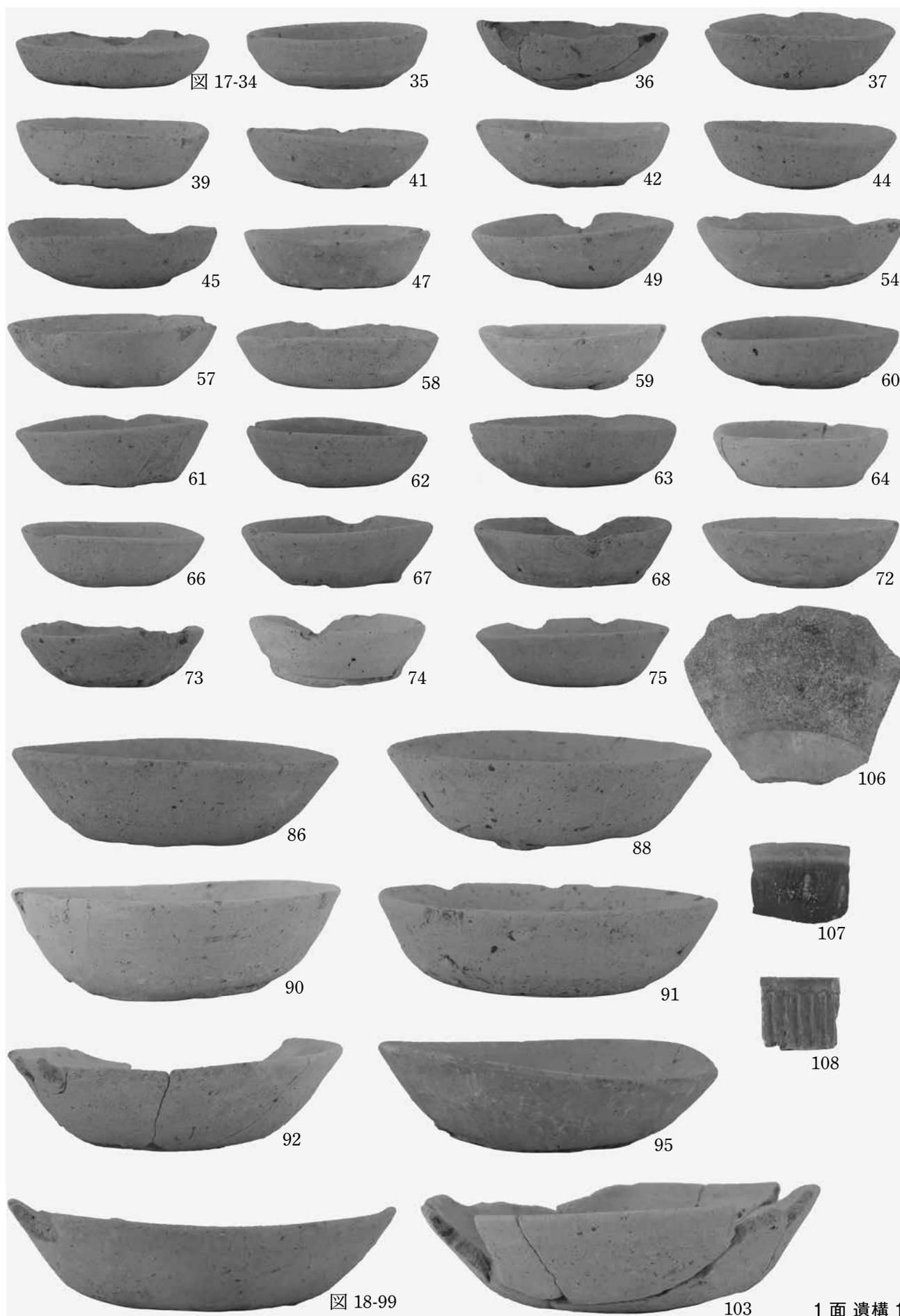


7. II区4b面トレンチ全景(東から)



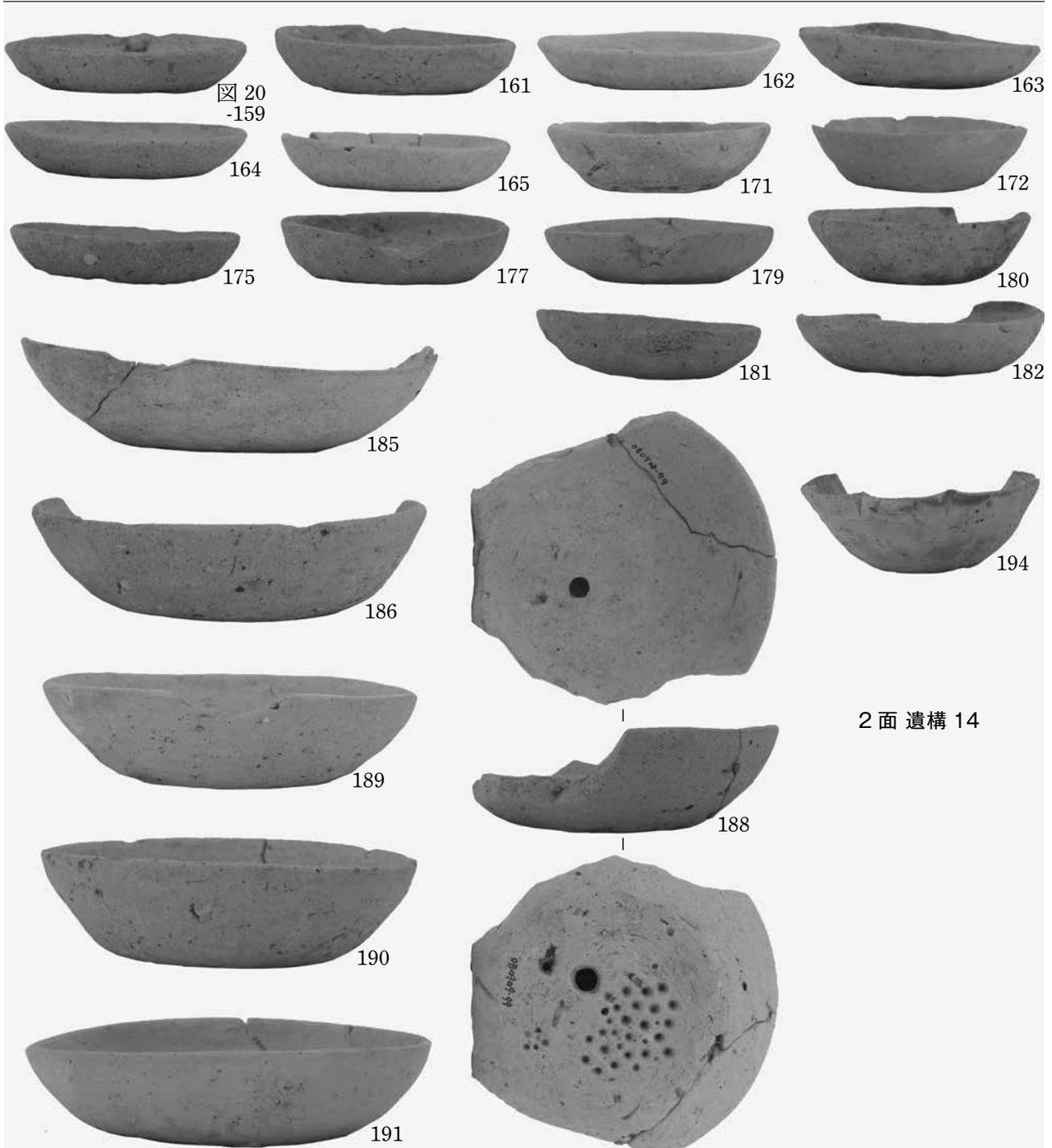
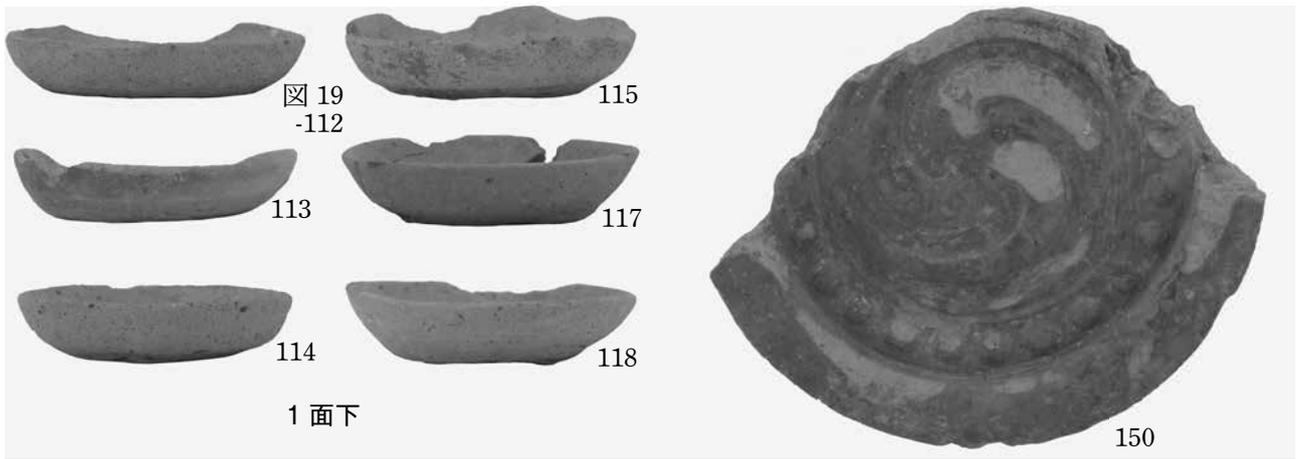
8. II区5面トレンチ全景(東から)

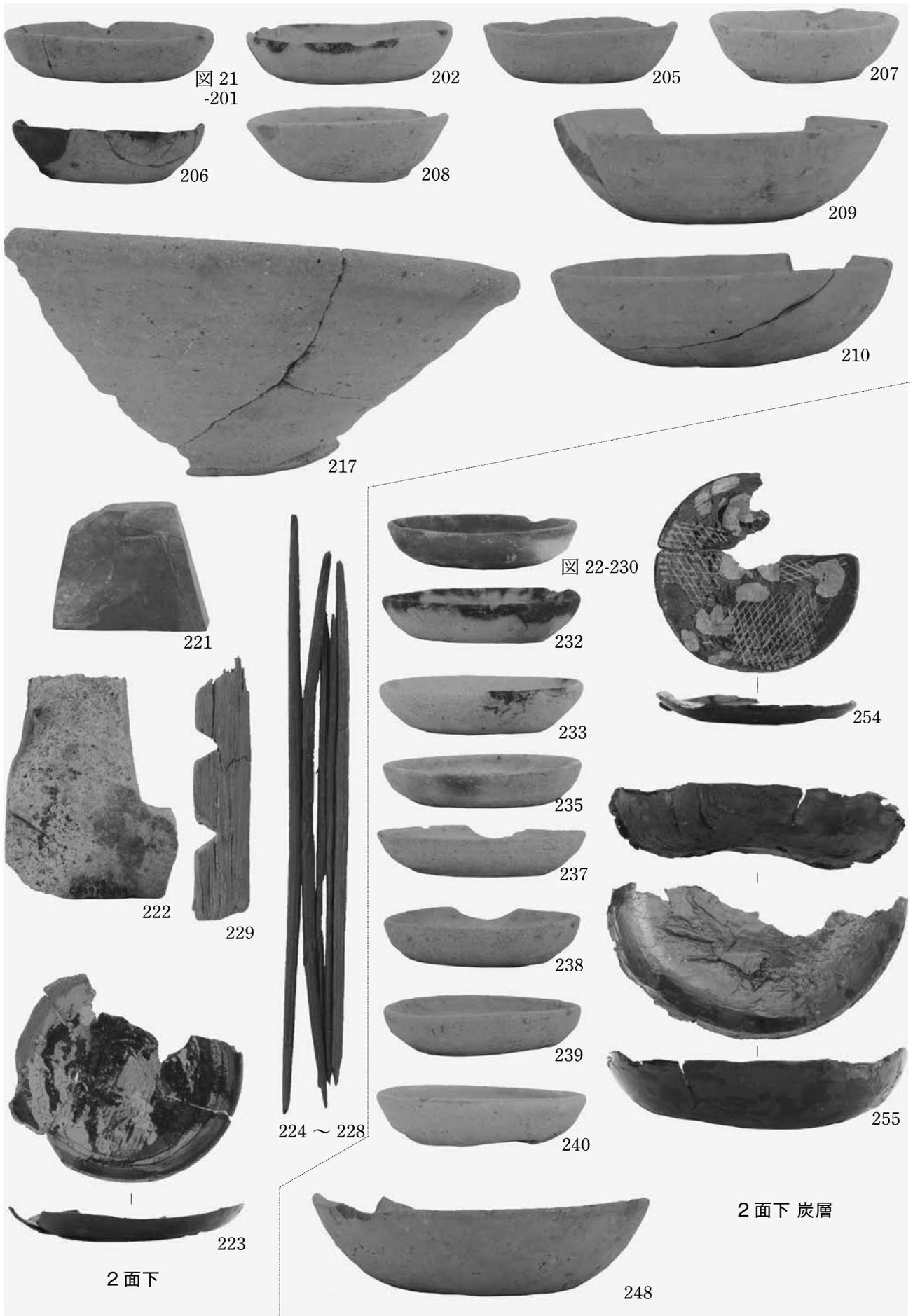




1面遺構1

図版 10





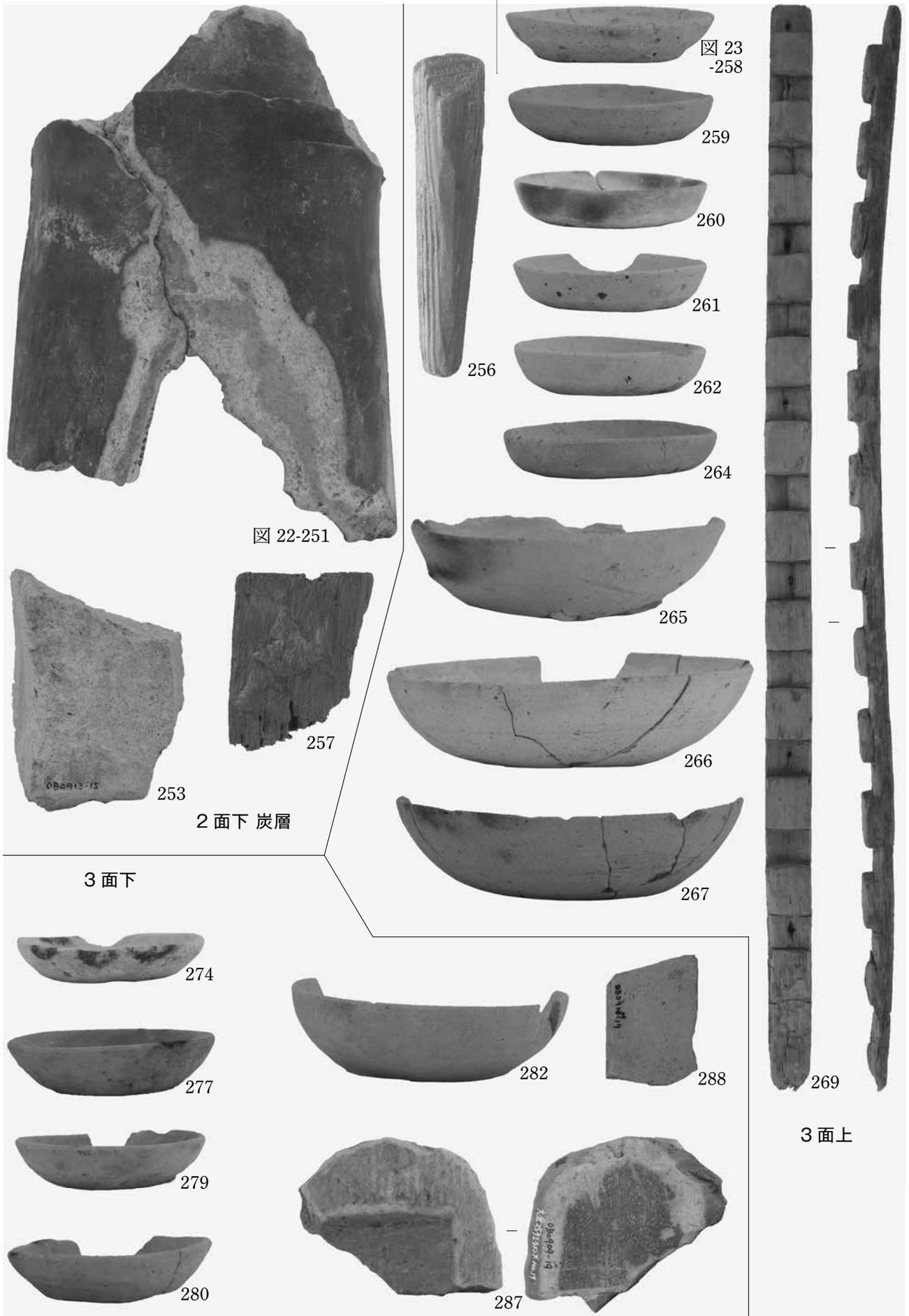




图 24-290



291



292

3 面下



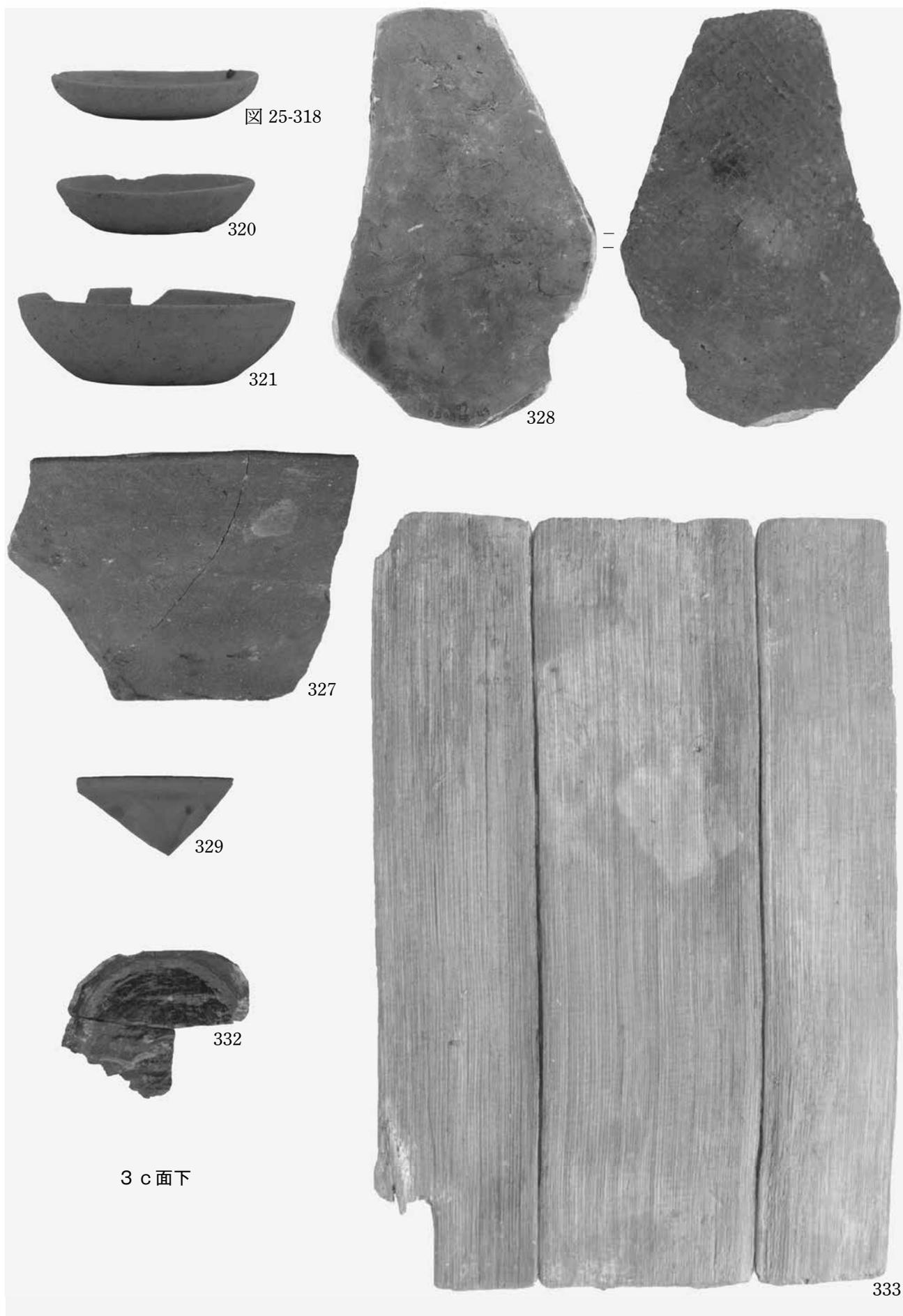
293

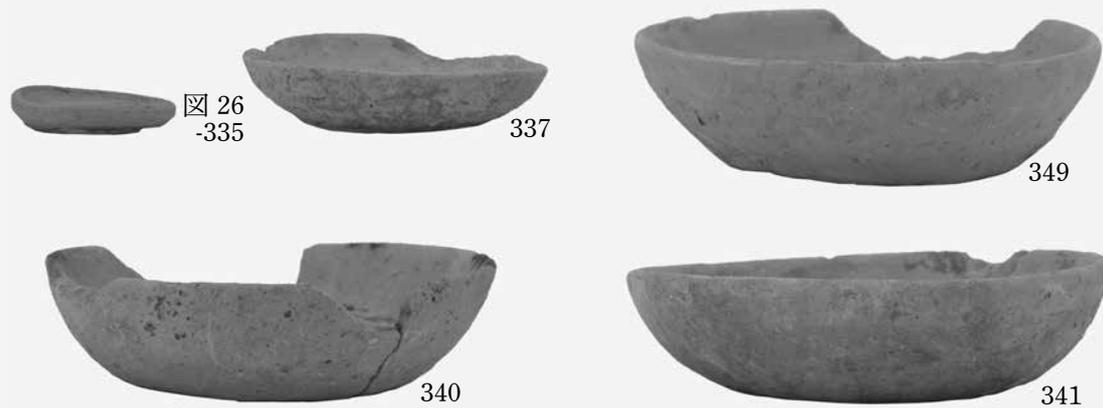


294

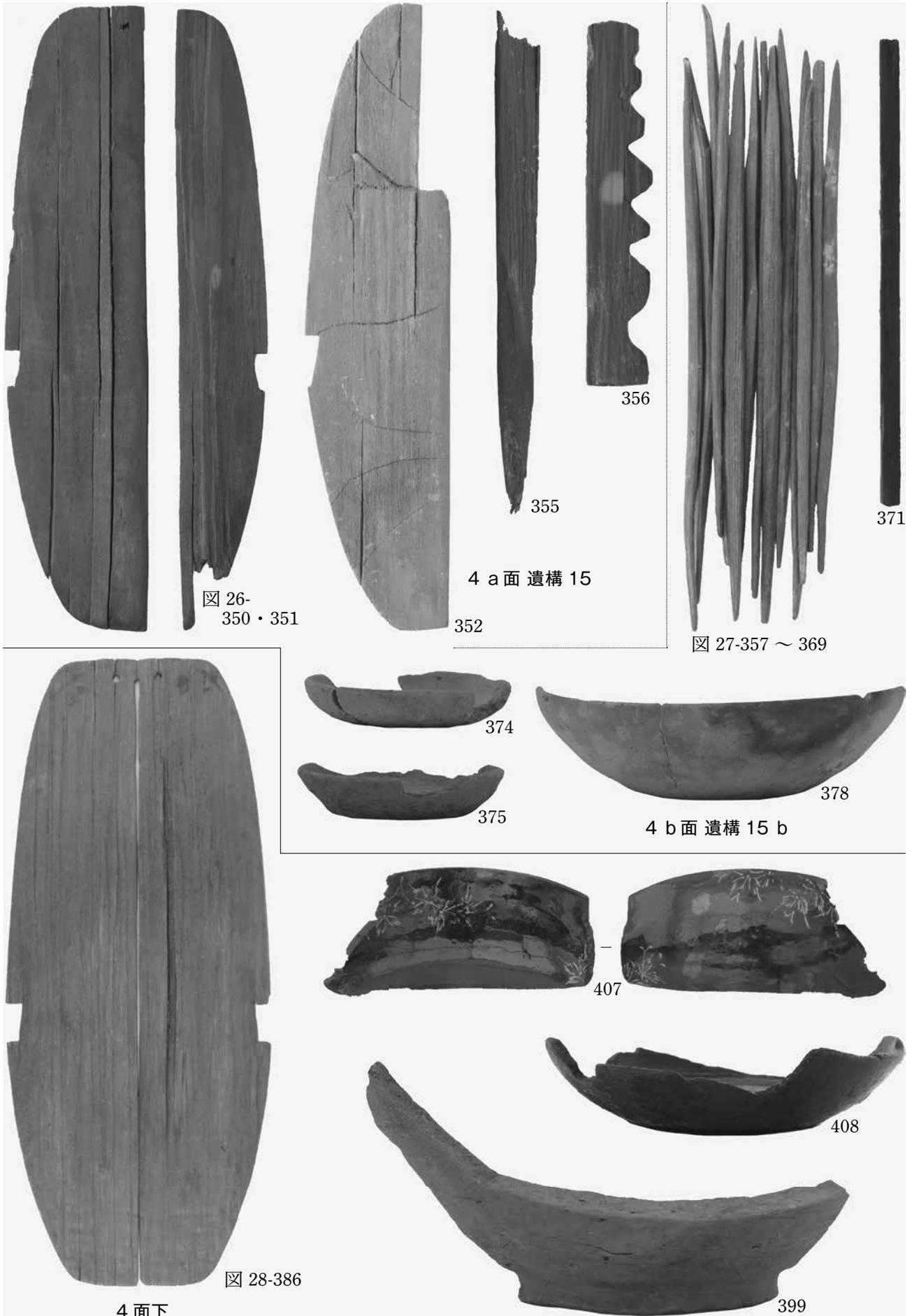


295 ~ 314





4 a 面 遺 構 15



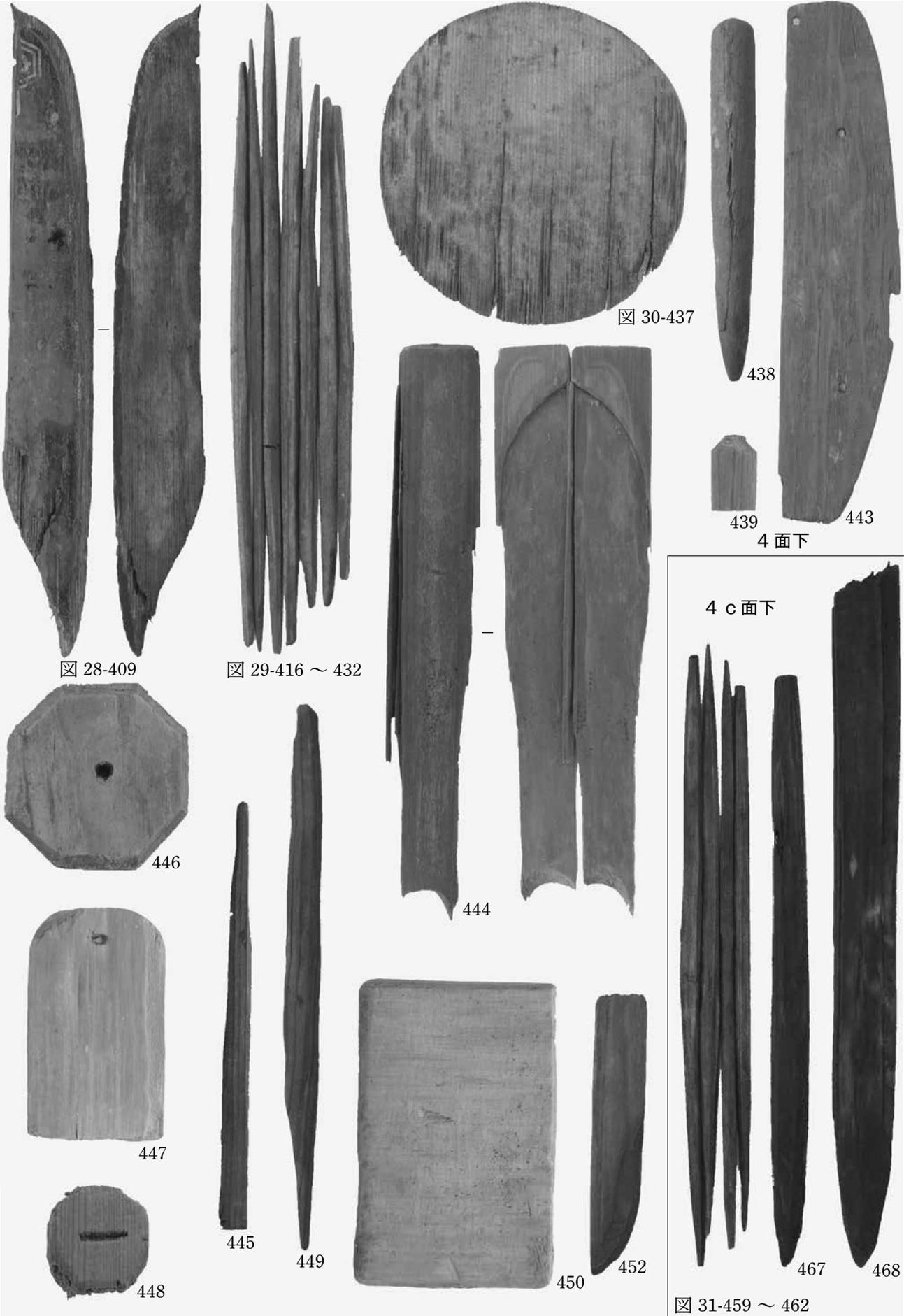


图 28-409

图 29-416 ~ 432

图 30-437

4 c 面下

4 面下

图 31-459 ~ 462

